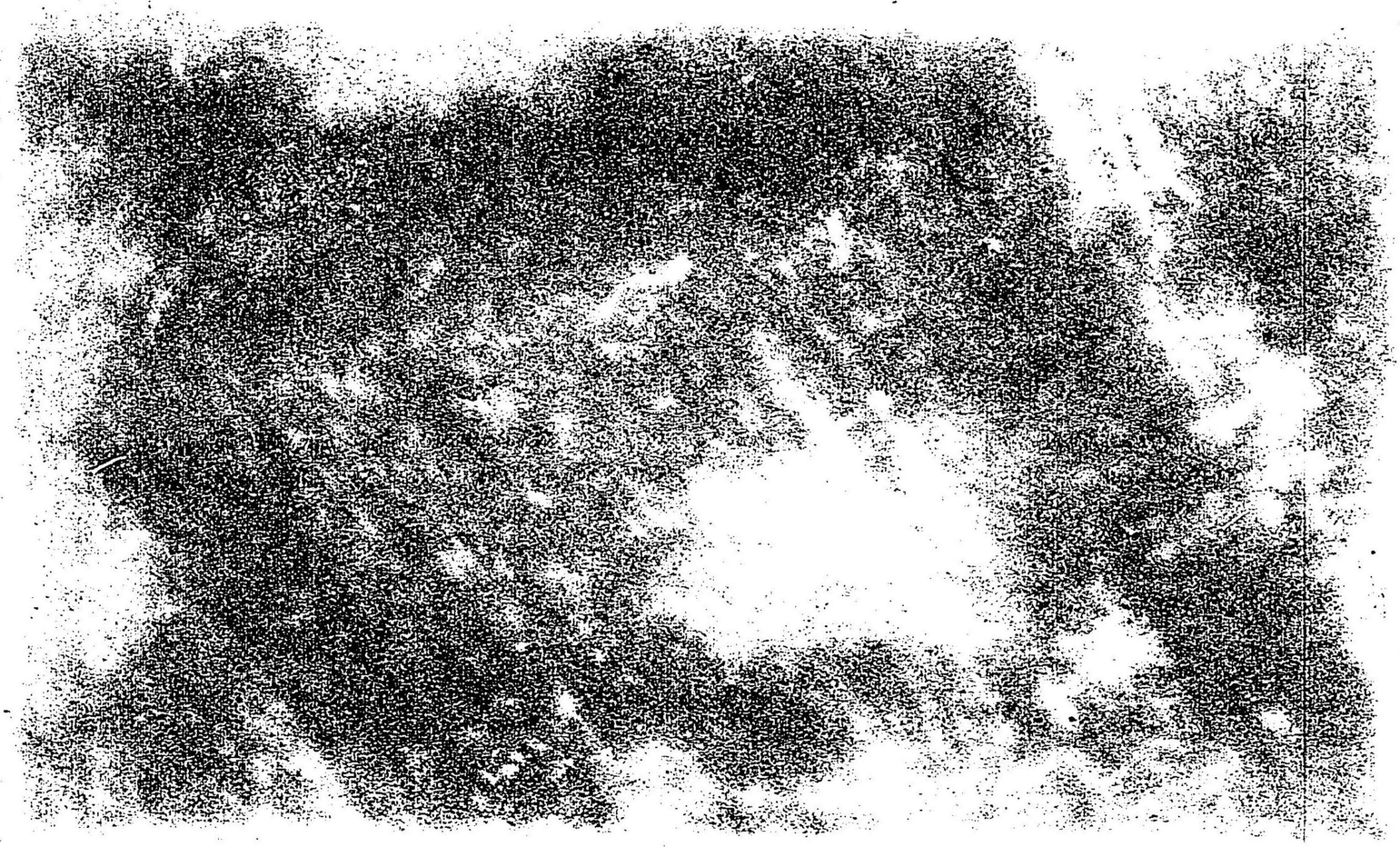
911.2
Sa747r

連俳小史

全



文學士 佐々政一著

迷佛小史

大日本圖書株式會社

911.25 Sa63Fr.
767

凡例

一此の連俳小史は、明治二十七年の冬、著者が大學に在りし頃より稿を起こして、二十九年の冬までの帝國文學に連載せしものにして、教課の暇の僅かなる時間にものせしものなれば、不完全なることは云ふまでもなけれど、現時この種の著書の影だになきを飽かず思ふ餘り、後に思ひよりたる誤謬一つ二つ訂して、再び出板することゝはなしぬ、

一此の書は初め連歌小史と名づけしが、さては唯中古の純正連歌のみの歴史と誤まられんことを恐れて、かくは改めつゝ、そも〳〵連俳とは連歌と俳諧とを併せ稱する名にして、俳諧とは即ち俳諧の連歌の略稱なれば、通はして連歌と云はんも、或は連俳と云はんも、異なることあるにはあらず、

一此の書は專ら連歌俳諧の時代的變遷の大躰を述べんとせしものなれば、箇人としては如何に有名なる連歌師俳諧師も、大躰の沿革に關係淺きものは總て省きて云はず、

一此書に引用せるは、主として大學圖書館東京圖書館五升庵酒竹庵及び著者の藏

国立国会図書館
27.3.-4
261188

書にして、なるべく其出所を附記して著者が斷案の馮據を示さんことを勉めたり一二これを記さゞる者あるは古寫本にして書名定かならねばなり、

明治三十年六月　　仙臺に於て　著者

連俳小史

目次

一、和歌の變遷を論して連歌に及ぶ……一丁
　長歌の湮滅……詩想の萎縮と詩形の發達……連歌の勃興……
　平民的傾向……俳諧……俳諧と發句
二、上代の連歌……九丁
　筑波、佐保川の詠……拾遺、金葉、散木……和歌者流の餘興
三、五十韻百韻等の連歌即純正連歌の起源……十八丁
　純正連歌勃興の年代……定家家隆……聯句との關係
四、中古の連歌　前期……二十七丁
　よき連歌、あしき連歌……滑稽の湮滅……歌連歌……發句……
　……連歌の社會的地位……賭物……地下連歌の流行

五、中古の連歌　後期……四十六丁
連歌地下に歸す……和歌の衰微と連歌の流行……二條良基……
……筑波集……應安の新式……賦物……一卷の首尾……歌道
と連歌道との分離……連歌の全盛……連歌界の迷信……連歌
の想……連歌の餘炎……發句……切れ字と季……和漢漢和
六、俳諧調の連歌即俳諧の勃興……八十三丁
守武と宗鑑と……飛梅千句と犬筑波と
七、近古の連歌　前期……九十七丁
第一　總說……九十七丁
貞門、談林、蕉風の起伏
第二　貞門の俳諧……百丁
御傘と嚏草と……俳言……淀川と油粕と……新趣味……
重賦……發句
第三　檀林の俳諧……百十九丁
焦風と談林……貞門との衝突……談林派の餘弊……蕉風化
……發句……賦物
第四　蕉風の俳諧……百三十八丁
俳諧の獨立と芭蕉……焦風の方式……首尾の變化……附句
の三變……ひゞきにほひ……蕉風の特色……滑稽なきに非
ざる事……客觀的傾向……俳諧の古注……發句と切れ字と
八、近古の連歌　後期……百六十四丁
蕉風の統一……四門派……江戸風と上方風……安永天明の復
興……一茶……文政天保の俗俳……冠句と五文字と
九、結論……百八十九丁
連俳の過去と未來と

連俳小史目次終

連俳小史

一、和歌の變遷を論じて連歌に及ぶ

佐々政一著

萬葉集の美は人爲の美に非すして自然の美なり、美を求めて美を得しに非ず自ら美なりしなり、當代の歌人は巧を求め奇を弄するの心なかりき、唯其質素朴訥なる外界と天眞爛熳なる思想とが、偶好題目に遇へは自ら雄渾偉大なる和歌を形成する事ありしのみ、されば其拙劣なる者に至ては宛然小兒の言語の如く唯平凡なる文字の羅列にして歌と稱する價値なき者亦頗る多し、歌聖赤人人麿等の如き亦斯る拙作有るとを免かれず、思ふにこれ當代の歌人が歌は唯思ふ事を云ひ得れば足る者となして、其美文なるべき事を知らず、隨て其詩想を撰擇する事を知らざりしに歸すべき也、是當代文化未だ開けず、僅に外國の文字を借り來て國語を記せし時代の思想としては、又怪むに足らざるなり、時に滔々として進入し來りし支那文學は、恰も明治初代の輸入的文學が舊文學を壓倒せしが如く、否寧ろ是よりも甚しき

勢力を以て舊文學を壓倒せしかば、一時發達せんとしたりし和歌は、古今の序に記するが如く、徒に好色の家に沈淪せしこと久きに渉りぬ、後延喜の世に至て、貫之躬恒等の力に依て幸に古今の勅撰を得たりと雖も、當代の歌人等も尙ほ前代の舊習を墨守して、尙未だ眞正の詩人たる可き理想を有せざりき、尙歌を以て「世の中に在る人ことわざ繁きものなれば、心に思ふ事を見るもの聞くものにつけて云ひ出せる」者也となしぬ、依然唯自己を唱ふとのみを以て滿足しぬ、未だ宇宙の眞美を啓發すへき任あるを知らざりき、人生の秘奥を開陳すべき實あるを知らさりき、しかのみならず、彼等は歌を以て單にその意思を發露する方便なりと誤想して、其美文ならざる可らざる事をだに認めざりき、宮に當代の歌人が是を認めざりしのみならず、此誤想は延て遠く後代に及び、或は「和歌は巧拙を論ず可らず」と云ひ、或は「それそこに豆腐屋の聲云々」と云ふも亦和歌なりと稱する者あるに至りぬ、

然く歌人は根本的に和歌の何物たる可きを誤想せりと雖も、彼等亦開花を欣び落月を惜む人間なり、豈美を好み醜を厭ふ心なからんや、和歌の巧拙美醜を思ふ感念は自然に發達して、其執る所の定義に反對しつゝ、彼の萬葉中に散見するが如き何

の美もなく巧もなく單に思ふ儘を云ひ放ちしたゝ言の、眞に和歌と稱するに足らざるを、不知不識の間に認識せり、而て彼等は之を避るの道を詩想に求る事を忘れて、一に詩形の修飾に求めたり、是實に我が歌道の發達を阻害し、我韻文を萎縮せしめし一大原因たる疑を容れずと雖も、其詩形上の修飾は獨長足の進歩を爲して、狹隘なる短歌の天地に跼蹐しつゝ、頗る偉大なる光彩を洩し、轉して連歌となり、更に俳諧調の連歌となるに至ては、殆と他國文學に於て求め得べからざる、特殊の異彩を發輝せし者も、亦こゝに基せずんばあらず、

そも電氣燈と云へば何となく無風流にして、ともし火と云へば自ら雅なるが如く、古の語は優美に聞こえ、新らしきものは殺風景に聞きなさるゝは、其何の故たるを知らざれども、兼好も「もてあげよ、かきあげよ」と云ふが口惜しと記せしを見ても、蓋古今の通情ならんか、彼の詩形の修飾に、全力を傾倒せし、歌人は、此に着目せしが、將、崇古の感念に驅られしか、恐くは此の二因の集合力に依て、古今集時代に於て、歌詞と稱する者生じぬ、即ち和歌の用語は言語の發達に伴はずして古語を墨守し初めぬ、古語を墨守する弊は舊題目を墨守せざるを得ざらしめたり、題目此に於てか起

り新事物は皆和歌以外に排斥されたり、

文化の進歩は尾花の月に廣漠たりし、武藏野を、電燈眩き東都となしぬ、おどろしく轟きまはし鳴る神を、兩極電氣の衝突となしぬ、自然的の者滅して人爲的の者起り、崇高なる者去て理屈的なる者來るは、社界進歩の常態なり、文化必しも詩歌を撲滅する者に非ずとするも、尠くとも社會の進歩は、詩人的なる者を減して非詩人的なる者を增すは、疑ふ可らざる事實なるが如し、さらでだに養成を忘却され、用語と題目とに拘束されて、漸く萎縮せんとせし和歌の詩想は、此潮勢に會て彌益、萎縮したり、萎縮したる詩想何ぞ雄大なる詩形を構成するを得んや、長歌漸く跡を絶て、和歌といふ名は三十一字の短歌に占有せられ、更に十七字の發句となり、又更に十四字の片歌とならんとせしもの、深く怪むに足らざるが如し、

是と同時に、新事物に包圍せられ、新言語をのみ知る下層の人民は、舊言語を以て事物を咏ずる和歌を解する能はずして、多數なる無智の民は和歌以外の者となりぬ、和歌は獨智識ある少數の貴族社界に占有せられぬ、斯くて萬葉時代に於て四民の友として、赤人人麿等が雄篇大作によつて、盛に國民の氣炎を吐露したる和歌は、

三十一字の天地に拘束せられ、殿上の天地に跼蹐するの厄に遇ひつ、然く和歌が徒に舊態を守て、一も進歩する事を知らざりし間に、社會は猶豫なく進歩しぬ、舊事物は年々去りぬ、新事物は歲々來りぬ、歌人の四圍又舊事物を留めず、見る者聞くもの盡新事物となれり、彼の用語題目に拘束さるゝ歌人等は、見る者聞く者につけて、自己を唱ふとだに爲し得ざるに至りぬ、此に彼等は月花が昔ながらの色香を愛でゝ、歌道唯一の題目となしぬ、殿上の天地に跼蹐せし和歌は、かくて更に、月花の天地に幽閉されたり、

而して其月と花とは、上代より和歌の好題目なりき、遠く和歌起源の日より、尚も和歌を咏する者にして、此を咏せざる者あるなきなり、如何に多姿なる月花も、葉に既に咏じ盡されて、又餘蘊を留めざらんとす、和歌終に湮滅せさる可からざるか、

詩とは果して詩想の發露ならざる可らずとすれば、詩としての和歌はかゝる形勢の下に、實に一たび湮滅したり、然れども所謂和歌は決して滅せざりき、否、尙盛に流行したりき、

蓋和歌が一方に於て然く拘束され然く萎縮せりと雖も、歌人か其全力を傾倒せし

詩形の修飾は、平安朝太平の無事に養はれ、歴代の勅撰に奬勵されて流石に著しく成功したり、枕詞係詞縁詞の發達、其語法即歌調の琢磨は殆ど其極致に達し、其流麗巧妙なる詩想を離れて唯單に詩形其物のみを見るも、亦頗る嘆稱すべき價値あるに至りぬ、されば彼の歌人等は、月花の天地に跼蹐しつゝ、前代の詩想をくり返しつゝ、巧に其得意なる詩形の修飾を利用して、文字の新しき錯列を以て、舊套なる詩想を咏しつゝ、猶和歌の命脉を持續せりき、かくて和歌は心を以て咏ずる者に非ずして、文字を以て撰造する者となりぬ、詩人の詩に非ずして、殿上人の遊戯文字となりぬ、物の名沓冠折句等の遊戯、此に頗る勢を得、歌合の會大に流行して、圍碁の如く、雙六の如く、頻に勝敗を爭ひ、終には物品を賭する事さへ行はれたり、これ實に王朝末葉に於る歌道の形勢なり、

平安朝上下四百有餘年、此間豈一二の具眼者なしと云んや、然れども歌道の大勢は、要するに思想に萎縮して、詩形の修飾に發達し、所謂美しき衣著せたる人形の如く、成りすさみしは、蔽ふ可からざる事實なるが如し、

同く三十一字を以て、同詩想を反復する錯列は、如何に富贍なる言語を以てするも、

何時か盡る時あり、和歌の範圍は日に月に縮小しぬ、殿上人は新しき遊戯文字を思ふ事切なりき、此に於てか連歌起りぬ、こは其上代に於る短歌の本末を分て二人にて咏ぜし遊戯と、支那の聯句とを折衷して成りし者にして、王朝の末葉に起り、南北朝室町の世に至て隆盛を極め、德川時代に及んでは俳諧調の者最盛に行はれたり、其初は和歌と共に殿上に弄ばれしが、藤氏の衰運と共に地下の者となり、僧侶武人の間に傳播して、稍所謂平民的傾向を生じ、俳諧調となりては全く平民的の者となり、談林蕉風の徒が、鬱勃たる詩才は、盡く此に傾倒されたり、而して近代に於る唯一の平民的韻文と稱せらるゝ發句は、實に其第一句より胚胎したり、

連歌は斯る形勢の下に生れたり、新らしき遊戯文字の需要に應じて起りぬ、而て其物たる自己の詩想を咏出するを目的とする者に非ずして、他人の歌を連續する者たり、されば其詩想を吐露すべき機會は、彼の末代の和歌よりも更に僅少にして、其巧緻を爭ふべき所は主として文字上の修飾なり、故に連歌は其性質上實に純全たる遊戯文字なり、所謂連歌師俳諧師の多數も、亦自ら遊戯文字なりとして、是を弄べり、

徒然草は、徒然を慰する遊戯文字として書かれたり、八犬傳は、婦人小兒を悞ばしめんとせし戯作のみ、然も倘文學上幾多の價値あるを見れば、連歌豈獨遊戯文字なるの故を以て度外視するを得んや、且つや和歌に於て然く發達したりし詩形の修飾を承け、進て連俳と成り、更に發句を生み、我文學界に、一種の異光を放ちたる連歌の、尤研究せざる可からざるは、殆ど言を待たざるが如し、獨怪む明治の文學者、甚此に冷淡なるを、

不知庵主人は其著文學一斑に於て、然く大氣炎を吐きたる連歌を捉へ來つて、只「連歌起るも氣炎を吐かすして止みぬ」と記するのみ、去て俳諧に走れり、而て其俳諧なりと稱して論する所は、談林焦風の徒が所謂俳諧に非ずして、俳諧調連歌の發句のみ、篁村翁の俳諧論亦俳諧の主要部分たる連歌を遺却せり、數月以前俳諧の變遷、詳論して洩す所なしと稱する、自贊の聲の下に、女學雜誌社より生れたる、二人の文學者が、三年の歲月を費し、數百卷の書を涉獵して、著述したりと自稱する、俳諧史傳も亦僅かに、俳諧調の連歌勃興時代の、犬筑波集の連歌、十餘を列記するの外は、唯單に發句を論ずるのみ、文學界絶て連歌の聲を聞かず、俳諧の名は全く發句に奪はれた

り、甚しき者は、かの俳諧を以て一代を風靡せし桃青を論する、亦其發句のみを以て、これを高下せんとす、桃青曰、發句は門人に上手多し、俳諧は老吟骨を得たるが如しと、發句は彼の寧ろ不得意とせし所にして、俳諧即俳諧調の連歌こそ其得意とせし所なれ、不知、桃青地下に微笑するや、否や、

老朽見るに足らずと稱せられし古文學は盛に起りぬ、猥雜見るに堪ずと罵られし舊小説は再板の幸運に遭ひぬ、而して連歌獨り顧る者なきは、生の見る所大に誤るに非れば、我文學界の一大欠點なり、生未だ三年の歲月を費したるに非ず、敢て數百卷の書を涉獵せりと云はず、僅に淺見の及ぶ所を列記して、敢て江湖に問ふものは、死馬の骨或は千里の馬を致すあるべきを思へばなり、

二、上代の連歌

忽にして月明千里、忽にして怪雲瀰望、忽にして章臺淅々、忽にして馬軍億々、山盡き谷來り、水走り石出つ、流轉變動端倪すべからざる所、連歌獨得の長所にして而して又、唯一の長所なるが如し、若し連歌にして此長所なからんか、唯短歌を連接したる者なるのみ、又特に連歌として稱揚するの價値なきが如し、換言すれは連歌の佳所

は三句の移り、一面見渡しのはとび、一卷の首尾にあり、八雲抄に「かまへてあらぬ樣にひきなし〳〵つくるなり」といひけんも、桃青が「行にしたがひ心のあらたまるは、たとへば先へ行く心なり」といひしも、皆此變化を敎ゆるものなり、

さらば彼の上代の所謂連歌即ち短歌の本末を分ちて二人にて咏するに止まりし者は、未だこれ等の變化を顯はすべき餘地を有せず、未だこれ等の佳所を認むべき形躰を具せずとすれば、寧ろこれ短歌の變躰として見るべく、未た連歌として研究すべき價値なきが如し、

然り、拾遺集金葉集散木集の如き皆短歌と伍せしめて怪まず、ことに拾遺集の如きは其短歌の雜の部に記入して區別する事なし、當代の歌人亦以て短歌の一種とせり、これ終に連歌史以外の者たるに似たり、

然れども後世の所謂連歌、即五十韻百韻千句等の連歌未だ存せざりし時代なる、散木金葉の如きも、亦既に連歌といふ名稱を有せりとすれば、吾人は連歌といふ名稱の外にこれ等を排斥するの權利を有せざるべし、且短歌の流行より、連歌の流行に推移せし階梯として、寧ろ連歌史の前記として少しくこれを討究する、必しも徒勞にあらざるべし、

連歌の起源に就きて二條良基は其筑波問答に記して曰

問云連歌はいつれの代よりはじまるにや云々、答曰古今假名序に、貫之のかけるあまのうきはしのねびす歌といふは即連歌也、先おほ神の發句に

あなうれしゑやうましをとめにあひぬ

とあるに女神のつけたまはく

あなうれしゑやうましおとこにあひぬ

と付給也、歌を二人して云ふを連歌とは申なり、二柱の神の、發句、脇句にあらずや、此句三十一字にもあらず、みじかく侍るは、疑なき連歌と、猶心えて侍るなり、古の明匠達にも尊申侍しかば、まことにいはれ有りとぞ仰られし、又連歌とていひ置たるは、先に申侍りつる樣に日本紀に景行天皇の御代、日本武尊の、あづまの夷治めに向ひ給て、此翁か此比すみし、筑波を過て、甲斐國酒折宮にとゝまり給し時、日本武尊御句に、

珥比磨利苑玖波塢須擬底、異玖用加彌苑流

すべて付申人のなかりしに、火をともすいはけなき童の、付て云

伽然奈倍底、用珥波盧々能用、比珥波苑塢伽塢

と申侍ければ、尊ほめ給けるとなん、其後萬葉集に入たる家持卿の

さほ川の水せき入てうえし田を

といふに、汎

かるわさ稲はひとりなるべし

と付侍る、かやうの事共、次第に多うなりて、拾遺、金葉などよりは勅撰に入侍る也、されど唯一句づゝ言すてたるばかりにて、五十句百句に及ふ事はなかりき、

と記して、遠く二神の世に起れりとなす、其附會の說たる論なきのみ、八雲御抄は佐保川の咏を以て「連歌の根源也」となしぬ、これ其始て和歌集に入る者を取て以て權輿となす者にして、頗妥當ならざるに非れども、菟玖波集の序、吾妻問答、其他幾多の連歌俳諧の書、皆筑波の咏を以て權輿となし、或は菟玖波集といひ新菟玖波、犬菟玖波、鷹筑波、菟玖波問答と稱する類、皆暗に其咏の起源たるを認むる者にして、後世筑波の道と云へば、連歌道の義となりしを見ても、筑波の咏を起源とするの最至當なるを見る也、されど古事記の記する處より察するに、當時既に此種の遊戯ありし者なるべく、必しも日本武尊が創製し玉ひし者にも非るが如し、蓋其前後既に幾多の連歌ありしなるべけれど、皆沒して傳はらず、其格調の如きは知るに由なきなり、彼の火燒之老人(菟玖波問答に童と記せるは唯傳聞の誤なるべし、今古事記に依る)の咏は古事記に「是以譽其老人即給東國造也」と記するを見れば、甚稱賛せられし者の如し、吾人の眼より是を見れば、平凡無味、一も賞揚すべき處あるを見ず、蓋只有る

が僅を五七五の三句に言ひ出せし事のみが、既に當代の世界に於ては希有の詩才として賞揚するの價値ありしなるべし、かゝる幼稚なる世界の連歌にして、若し將湮滅せざりしとするも、深く討求するの價値なかるべし、唯此に注意すべきは、其長句と短句との關係これなり、彼の咏に於ては其長短句は、一首の短歌の上の句下の句と云はんよりは、寧ろ箇々獨立したる片歌なりと云ふべし、蓋一は問を問ふ文章にして、他は答を答ふる文章なり、二者相合して一首の和歌をなすべき性質の者には非ず、この種の者は比較的僅少なれは、古の連歌を說く者多くは此者ある事を忘れたるが如し、八雲抄にも「たゝ上句にても下句にてもいひかけつれば、いまながら、を付る也」とのみ云ひ、吾妻問答にも「大かた歌を二に分て、上句下句と申ばかり」なりと云ひぬ、されど上代の連歌中又幾多此種の者なきに非ず、今其一二の例を擧ぐれは、金葉集の

手はやふるかみをはあしにまくものか
これをはしもの社とはいふ

の如き、拾遺集の

神主　忠頼
和泉　式部

人こゝろうしみつ今はたのましよ　　詞人知らず
夢に見ゆとや寐そすきにける　　宗貞　朝臣

の如き是なり、後世の所謂連歌時代には、亦甚稀にして、連俳時代に至つては、少しく變形して、所謂挨拶付となりて頗る行はれたり、

彼の萬葉の佐保川の咏は、全然此等と其趣を異にして、其長短句は全く短歌の上の句下の句の關係に立てり、これ上代の連歌の普通の格調なり、五十韻百韻等の連歌起るに及んでは、頗變形して、彼の全く一首の和歌の上の句下の句の如きものは却て厭はるゝに至れり、宗祇が吾妻問答に曰

連歌に、或は歌の上の句、又下の句とて、あしきよしを申は如何、答云、至て昔は、さやうの戒ないし、侍公周阿等の時までも、さやうに有りしなり、

秋はてぬいまに山田のいれよとや
是は侍公の句也、……此句に、今川了俊付侍しなり、
鹿おふ聲を里にきこゆる

……かやうの句、少は歌の上の句下の句と可申候哉云々

其いかに變形せしかは、當代の連歌を論するの時に讓らん、

抑上代の所謂連歌は然く上古より行はれたりと雖も、後世の連歌の如く盛に行はれたるに非ず、又短歌を離れて、單獨に連歌を研究する如き事ありしにもあらず、唯時にふれ事に當りて、其常に習熟せる、和歌の下の句或は上の句の形を以て問ひかけ、或は語りかくれは、他はこれに應じて、上の句或は下の句の形を以てこれに答へ、又は單に短歌の一半を咏じて他の一半を他人に作らしむ等、唯和歌者流が一場の餘興に過ぎず、殆ど今日の吾人が地口輕口等の駄洒落と其趣を同うせし者にして、歌人も固より深く心を用ゆる事なく、記して後世に傳ふる者頗る少し、連歌と云ふ名の勅撰集に見ゆるは金葉を嚆矢とす、(其以前拾遺中に既に連歌あれど、未だ連歌の名なきことは、既に記するが如し)、當代の歌人大にこれを非議せるを見ても、如何に連歌が當時の歌人に蔑視されしかを窺ふに足らん、當代は和歌が既に殿上人の遊戯文字となりすさみし時代也、當代の連歌は彼の沓冠、折句、物の名等の純然たる遊戯文字にだに、幷稱するに足らずとせられしなり、

然く上代の連歌は、唯一場の遊戯として口にせらるべく永遠の文字として筆にせらるべき者に非ざりき、其求むる所は、永久の賛嘆に非して、一時の喝采に在り、感ぜしむるよりは、寧ろ笑はしむるに在り、嘆ぜしむるよりは、寧ろ驚かしむるに在り、さ

れは、深く玩味して初て知り得べき深高と幽遠とは、其望む所に非ずして、一見直に其妙を見るを得べき纖巧と奇警とこそ、其爭ひし所なれ、さらでだに、言語上の末技に狂奔せし歌人の連歌は、全く深遠の致を欠て、一に機智を弄するのみ、八雲抄に「多くは一句に付くは秀句のみにてあるなり」とは、蓋これを云ふ也、今拾遺金葉散木等より、上代の連歌中、尤巧妙なる者の二三を示さん、

東人の聲：そ北にきこゆなれ　永成法師
みちの國よりこしにやあるらん、　律師慶範
つれなく立てるしかの島かな　爲助
弓張の月のいるにも驚かで、　國忠
かたわにて片輪もなしと見ゆるかな　忠清
こいへくるまもいかゞしつらん、　俊賴
春はもえ冰はこがるゝかまゞ山　しらす
霞も露もけふりさそ見る、　友軸
おくなるをもやはしらさはいふ　成光
見わたせば内にもさをばたてゝけり、　觀遍
田にはむ駒は黑にぞありける　永源
なはしろの水にはかけと見えつれど、　永成

纖巧なり、奇警なり、然り、纖巧なるのみ、奇警なるのみ、其他何物をも有せざるなり、今若其五七五又は七七の詩形を取去りて、唯其纖巧奇警なる實質のみを見れば、今日の所謂地口輕口と、一の差異あるを見ざるなり、八雲抄にも「あらぬ樣に秀句を云ふ事」を論じて「鴈のゐるはしめて秋の立え、なぞいふ躰の事は、巧にはあらで、をかしくこそ聞ゆれ」と云ひぬ、上代の連歌は蓋し其最甚しき者也、遊戯としての目的は巧に成功したり、文學の眼より是を見れば、寧ろ失敗したりと云はざるべからず、されど、そは彼等の目的に非りしなり、實むべきの限に非るなり、吾人は唯其富贍なる機智（ウヰット）の發顯を賞揚して止まんのみ、

終に臨て尙一の論すべき者あり、連歌といふ名稱の起源是也、予は唯漠然と上筑波の咏より、下王朝の末葉、五十韻百韻等の始まりし迄の咏を以て、假に上代の連歌と稱しぬ、されど固り當初より、連歌といふ名稱あるに非ず、其起源は何の時なりけん、定かには知るに由なし、近頃某氏の著せし、日本文學集覽と云ふ書に

當時は連歌とは云はず、後の世に至て、上の句下の句を許多連れて、長く云ひ述る事になりて、連歌と云ふ名出來たり、

と有るは、蓋確乎たる馮據あるべけれど、予の見る所を以てすれば、必しも然らざるが如し、散木金葉に既に連歌の名あり、されば、連歌の名は尠くとも鳥羽帝以前に起れり、而して長くつゝくる事は、後鳥羽帝の時に至て始まれりとは、殆ど疑ふべからざる說なるが如し、

連歌といふ名有るより以前は、つゝけ歌と稱せし事筑波問答に見えたり、其名稱の起源に至つては更に考ふべき者なし、

三、五十韻百韻等の連歌即純正連歌の起源

彼の上代の所謂連歌發達變形して、長くつゝくる事となりし時代に關しても、傳說の吾人に殘る者甚多からず、採て考證の資となすべき者、僅かに兩三に過ぎず、

後鳥羽院建保の頃より、しろ、くろ、又色々のふし物のひとり連歌を、定家、家隆卿などにめされ侍しより、百韻なども侍るにや、(筑波問答)

つらねるとのばも、萬に書き集めし末、世々に朽ちせず、其末、水無瀨川(後鳥羽院)より流れ出で、數々連ねる事とぞなり侍る、(さゞめごと)

後鳥羽上皇、定家、家隆卿などに仰合されて、數々百韻に定め、法楽などを初めと記し置かれ云々、(梵灯庵主返答書)

近くは後鳥羽院の御比よりもて出でゝ、百韻五十韻などになれり、千句は爲家卿嵯峨にて

獨中玉(るより、世に其後滿はへり、(ひとり言)

昔は五十韻百韻とてつゝくる事はなし、唯上の句にても下の句にても云ひかけつれば、いまながらを付る也、今の樣にくさる事は、中頃よりの事なり、(八雲御抄)

多少傳說の相違なきに非ずと雖も、要するに五十韻百韻の起源を後鳥羽院の時代となすに於ては相一致せり(八雲抄が時代を明示せざるの外は)とすれば、純正連歌が土御門順德の交に起りしは、疑ふ可らざる事實なるが如し、而して其以前には五句或は十句などの連歌も、必なかりしとは斷言し難きも、唯さる者有りし證跡なしと云ふのみにて、滿足せざる可からざるなり、

五十韻百韻の創作者亦定家、家隆等なりけん、と云ふに止めざるを得ざるなり、蓋、長歌絶滅して三百餘年、和歌者流が狹隘なる三十一字の天地に躊躇する業に既に久し矣、今や藤氏既に衰えて政權武門に歸し、天下の事日に漸く忠ふべき時に當つて假令完全なる詩形と稱するに足らずとするも、とにかく五十韻百韻等の尨大なる詩形突然として我が文學界に湧出し來りし者、亦一の怪むべき現象に非ずや、然り一見奇怪なるが如し、然も細に是を考ふれば其間又優に推理の徑路を認む、

思ふに殿上人が權力の街を去つて、虛名の地に退隱せしは、却て彼等をして文學に

否寧ろ遊職文字に、其全幅の精神を傾倒するの機會を與へたり、されば新古今は、古今以來無比の氣焔を吐けり、文字上の修飾、機智、纖巧、流麗は、實に絶對無上の域に達せり、從て狹隘なる扁少なる三十一字の躬屈を感することと、日に益切なるは怪むに足らざる也、此時に方つて非凡の詩傑定家、家隆起こる、新詩形の創作寧ろ必至の勢なり、

然れども、定家、家隆亦上代の歌人の子也、上下三百年、三十一字の天地に逍遙せし歌人の子孫なり、短歌の狹隘に困んで、施頭歌、今樣、を創作したらんか、我、其變化の至當なるを了す、一飛五十韻百韻の大天地を開拓せるに至つて、寧ろ其變化の急なるに驚かざるを得ず、九尺二間の狹きに因しむ者は、五間間口の表店を借りんとするが順序なるに、今若、突飛、五千坪の別莊を買ふあらんか、人は其激變に驚くと共に、其購買力の必ず其者自身の稼き溜めのみに因せざるを推測せん、予も亦純正連歌の創作が、必しも定家、家隆の創作力のみに因せざる事を推測する者也、明治初代の新躰詩が、獨り外山井上等の諸先生の創作力のみに因て起りしに非ず、西洋の詩歌が大にこれを啓發して力ありしを知る者は、否其創作力は寧ろ其摸倣力の下に在りしを知る者は、我推測の必しも當を得ざるに非ざるを首肯せん、

然則、純正連歌の創作を啓發せし者は何ぞや、是が模楷となりし者は何ぞや、古人傳ふる者なく、今人說く者稀なり、漠々として摸捉し難し、唯偶、推究の階梯として吾人に殘留せる者一あり、何ぞや、曰、五十韻百韻等の韻と云ふ文字是也、

是を五十句と云はずして五十韻と云ひ、百句と云はずして百韻といふ、併も何の韻脚をも有せずとすれば、亦怪む可からずや、古の連歌師亦頗る是を怪めり、筑波問答に曰、

> 問云、連歌に百韻と申す事はいはれあるにや、聯句は韻字を置けばこそ百韻とも申せ、連歌は定まれる韻の文字なければ、唯百句などとこそ申さめと云人の有るは、まことに侍るや、
> 答曰、其事に侍り、京極中納言入道殿も、連歌か百韻など申、然るべからず、聯句なこそ、韻の文字あればさようにも申せ、連歌は唯百句などにて有るべしと仰られし、さらば脇句を入韻とこそ申し侍らめ、それは又たゞ脇句とこそ申せ、去ながら近比申付たる事に侍れば、今更本說なたゞしても詮なき事にてぞ侍るべき、大かたはいはれなき事ぞと、うけ給はりし、

と、尤至極なる疑といふべし、されど京極中納言、即創作者たる定家をも疑團の裡に卷込まんとするは、例の自說を尊ばしめんとする慣用手段なるべし、後世に至るに

及んで此疑團彌融けず、異論百出、終に奇怪なる揑造説を出すに至りぬ、或る俳壇の末書に左の一節あり、取て以て笑柄に供せん、

俳諧の秘記　百韻と百吟

百句とも百韻百吟などゝ云べきないかに韻とは申ぞ、不思議可申樣なし、知る人なし、俳諧の大是事也、此數詩を以て割たる數にて、雪月花の用所明かなり、

表八句、裏十四句なり、裏十六句と數を定むべき也、律詩絶句の変の數也、

依て表題、四句目迄起晴轉合、五句目月の座、起の場也、

裏の花月の座、算候へば起か轉の所へ極めて當る也、再熟再心不少、依、韻字濟也、(俳諧秘要書)

何の囈言ぞ、唯一笑に値するのみ、舉燈の解は終に此に至れり、亦以て韻と云ふ文字が如何に後世の疑團を作りしかを見るべく、又其如何に不當に用ゐられしかを見るに足らん、此奇怪なる韻文字こそ、予が純正連歌の源流を聯句に求めんとせし第一階梯なり、

一串居士の焚餘雜記に曰、

俳諧とは排諧にして、詩に出たる者也、……韓愈に至つて、初めて聯句と云ふことを爲し初めたり、是は朋友兩三人も寄合て、十六句二十句などの排律の詩を作るなり、……明の高季迪の集中にのせし數首などの如き、格別にして面白し、其他唐の白虎觀技山との牛石の聯句、東坡佛印の聯あり、總て知己の者寄合て、排律より律詩絶句までの詩を作る事を聯句とは云へども、律詩絶句にて某所聯句と云題は、書まゝき事と見えたり、さすれば聯句と云ふは排律体なるべし、古く入唐の者覺え來つて古は朝廷には聯句ありしと、朝野群載源氏物語にも見えたる樣に覺へたり、……後世天龍寺の策彦之を傳へ、省中に召されて鳳城聯句あり、其式は百五十韻、百韻、雜韻なれば五十韻あり、初八句を表とし、去嫌あり、表結尾の定法あり、……今倘五山派に此式あり、貞德是に從ひ和字に聯句を定めれら、時に和漢とて、和句の中に漢句の交りたるあり、云々

居士は連歌の一轉化なる、連歌の末流なる連俳を以て、聯句より起りたりとなしぬ、されば、俳諧の俳文字を、强て排律の排文字に附會せんとし、明かに應安の新式より出でたる御傘を、漫に聯句の式より出たりと憶斷するの拙を爲せり、其不妥の説たる疑を容れずと雖も、亦和語の連歌と、漢字の聯句との間に、歴史上一種の關係ある事を摘出したる功は、蔽ふ可からざるなり、思ふに俳諧の原流たる中古の連歌こそ、却て其摸楷を聯句に得たるが如し、

蓋漢文學輸入の潮勢の下に、嘗て一たび湮滅せんとしたる、在來の日本文學、特に和歌は、勅撰集の制度の下に、稍其舊勢を挽回したりと雖も、漢文學の進歩は是が爲に決して阻害さるゝ事なく、駸々として常に是に並行せり、否寧ろ常に一歩の前に在

りき、されば在來文學と漢文學との調和は避く可からざるの結果として顯はれたり、一種の和漢混合文は起こりぬ、和漢朗咏集は成りぬ、歌人は漢詩の妙を和歌に移さんとせり、白氏文集は歌人社會に愛玩されぬ、王朝の文學界は實にかゝる形勢の下に在りき、かの清少納言が「蘭省花時錦帳下」と云ふ句に「草の庵を誰か尋ぬん」と付けたるは、所謂漢和連歌の權輿とも稱すべく、又以て聯句、連歌調和の機微は、實に既に此時に顯はれたりと、稱するを得べし、

定家、家隆は此後を承けて生れたりとすれば、我在來の連歌、即上代の連歌を取て、彼の聯句の法式の中に投し、此に純正連歌の創作を成せりとなすは、殆んと避く可らざる、推測の徑路なるべし、

此推測を下さんとするに尙一の條件を要す、定家、家隆、當代、既に我國に長篇の聯句ありしこと是也、古傳說の一片は、幸に此事有りしことを吾人に證明せり嬉遊笑覽に曰、

後世聯句と云ふあり、又聯詩と云ふ、玉海曰文治三年二月廿七日御書所作文云云、而天永以往多有二十餘韻、餘可道蓋例之由、讓以仰宗隆、仍連句有二十韻、と見ゆ、五山の僧徒此技に長す、其、式漢土の連句とは異なり、此にて創意に造りし者と見えたり云々、

と、されば、天永以往、既に二十餘韻の聯句ありし事明かなり、且後世の聯句は五十韻百韻等最多きに居るは人の知る處なれば、或は天永より後鳥羽院に至る、畧百年の間に、既に發達して五十韻百韻の式ありしを、定家、家隆等直に採て、以て連歌に應用せし者なるか、或は二十餘韻より五十韻百韻となせしは、其創意に出づる者なるか、未だ知る可からずと雖も、必竟此二者の外に出でざるべし、されば こそ五十句百句などとは云はず、かの聯句慣用の語に從つて、五十韻百韻と稱へしなるべけれ、

而して當代の聯句は、如何なる性質の物なりけん、其今日に存ずるものは、僅かに二句一聯のもののみにして、二十韻五十韻等のものは全く沒して傳はらず、(或は存する者あるにや、予の淺學なる未だ見るに及ばず、江湖の諸君高示を賜ふを得ば幸甚)

其後世の者を見るに、嬉遊笑覽に記するが如く、漢土の聯句の全篇一意貫通して、全く一篇排律の詩を爲す者と、頗る其趣を異にして、思想句毎に流轉推移し、最打越しの變化に苦心せし形迹有る處、連歌に類似せり、蓋當代の聯句亦さる性質の者なりしならん、是恐くば上代の漢學者が、漢土の聯句を誤想せしと、朗詠等に於て單に二句一聯の對句のみを弄びしとの結果ならんか、そは殆んど有り得べからざる誤想

なるが如きも、亦亂雜彼が如き漢文を草して得々たりし時代としては、却て至當の錯誤なるべし、

若し連歌をして、純然たる漢土の聯句に摸倣して起らしめんか、我詩壇は一の雄大なる詩形を享有し得べかりしに、彼の錯誤されたる聯句が、其摸楷となりしより、僅に扁少なる詩想の尨大なる集合躰を得るに終れり、豈亦歎ず可きの甚しきに非ずや、既往逐ふ可からず、唯予をして此尨大なる詩形が、如何に特種の異彩を放ちしかを語らしめよ、

純正連歌の起源、必竟漠として確言す可からず、揣摩憶測、層又層、深く諸君を厭嫌せしめしを知る、是亦史談の定路、止を得ざる也、今進んで中古連歌に入るに先つて、漢土の聯句一篇、及本朝の聯句の一片を掲げて、以て諸君が類想の資に供せんとす、夫又、長談議更に蛇足を添ゆる者か、

風雨聯句

與會稽張憲在報恩佛寺遇風雨而作

育風簸天輿、憲凍雪飜海瀉、魚鰕落半空、啓蛟龍鬬中野、勢呑九河黃、憲功潤千里赭、怒疑決沙囊、啓振斷摧屋瓦、横行天兵駛、憲大笑電母哆、乾坤發生多、啓道路喝死寡、潦張濤涌川、憲旱去燈滅冶、谷號竟誰嘘、啓木撼不自把、神靈眞恍惚、憲造化非苟且、初占月離畢、啓又駭泗沒社、必變其聖乎、憲弗迷唯舜也、陰岑氣如炊、啓高葉聲若打、陽烏韜不見、憲乾鵲噤皆啞、重翳晦復明、啓餘點歇還灑、雖悅灌園人、憲應愁渡江者、侍王笑楚賦、啓及我慙周稚、避思泰山巓、憲戰憶昆陽下、雄夫匕易失、啓吝士蓋難假、殷霑想大田、憲廣庇思巨厦、桔槔向晩停、啓紈扇未捨秋、亂號官私蛙、憲莫辨來去馬、臥驚浪喧耳、啓歸恐泥沒踝、勿憂卷茅屋、憲且喜憩園若、民期歲有登、啓國荷夫錫、嘏沛澤宜載歌、憲新篇試姑寫、啓（高青邱大全集）

尾拂樹間黃牛背、　手打門前白雁聲、　（江談抄）

二藍經一夏、菅　朽葉幾廻秋、紀　（仝）

文武兩家姓、匡兼　江平一士名　（仝）

細聽滿庭蛩、治埋徑籠蒙霧、如靜邊舉據烽、心鞋奴千里忘、彥鏡面舊時容、金（弘治年中の作と稱す、或る古寫本中に得る處）

四、中古の連歌、前期

我が所謂中古とは、世人が俳諧調の連歌を常に俳諧と稱するに對して、唯單に連歌と稱する名義の下に理解し來りし、古調の純正連歌流行時代を云ふ也、時を以て云へば、上は後鳥羽院の世より、下は織田豐臣の際に及び、人を以て云へば定家家隆に起こり宗鑑紹巴等に終る、今其格調の變化を明にせんが爲に、更に前後二期に分ち、筑波集成り、新式出で、救濟周阿等輩出せし、南北朝の末葉應安延文の交を以て後期の初となさんとす、此章に論せんとするは其前期也、

抑、純正連歌勃興の當初、即後鳥羽院の時代に於る、連歌の格調は二種に分かれたり、一は上代の連歌の如く機智滑稽を宗としたる者にして、他は當代の和歌に倣ひて、比較的優美にして典雅なる者なりき、そは筑波問答に

後鳥羽院建保の頃より……よき連歌をは柿本の衆と名付られ、わろきをば栗本の衆とて、別座につきてぞし侍し、有心無心さて、うるはしき連歌と狂句とをまぜ〳〵にせられし事も常に侍り、

とあるなどより推測せらるゝ也、其よき連歌あしき連歌とは巧拙の義には非して、優美なる者と滑稽的なる者との義なるとは、頓阿が水蛙眼目に柿本栗本の事を記して、

六條内府被語云、後鳥羽院御時、柿本栗本さてなかる、柿本はよの常の歌、是を有心と名づく、栗本は狂歌、これを無心と云ふ、有心には後京極殿慈鎮和尚以下、其時秀逸の歌人なり、無心には光親卿宗行卿泰覺法眼等也、水無瀬殿和歌所に、庭を隔てゝ無心座あり、庭に大なる松あり、風吹て殊におもしろき日有心の方より慈鎮和尚、心あると心なきとが中に又、いかにきけとや庭の松風、と云ふ歌を咏して無心の方へ送らる、宗行卿、心なしと人のたまへと耳しあれはきゝさふらふを庭の松風、と返歌を咏下けり、云々

と云へるを見ても明かなり、かくて其優美なるものと滑稽的なる者とは暫く並び行はれしが、久しからずして後者は前者に壓倒されぬ、

蓋咄嗟頃刻の間に一時の喝采を博するは優美崇高なる者よりも機智滑稽の勝を占むへきは、嘗て是を說けり、上代の連歌が一に滑稽諧謔を尊びしは是を以てなり、今や連歌は其形躰を大にしたると共に、少しく其性質を變じたり、そは上代の連歌の地口輕口等の如く、一の口より出てゝ他の耳に入るに止まりし、轉瞬的の者なるよりは、尠くとも稍其生命を長くしたり、そは懷紙に書かれ、朗讀せられ、幾分か玩味されて、更に是に連續すべき句を詠ぜらられ、五十韻百韻に大成されて或は點者に評せられ、或は一座に是非せられ、時として賭物を爭ふ者とさへなりぬ、尠くとも單に

言語上の遊戯なるよりは重大なる、寧ろ複雑したる遊戯となりぬ、かくて連歌に對する歌人の感念は、少しく進歩したると共に、連歌の格調は一の極端より他の極端に走れり、嘗て滑稽諧謔を以て唯一の趣味となせし連歌師は、却て此等の者を排斥せんとせり、

元來、所謂優にやさしきとのみを以て美の眞髓と誤想せし當代の歌人、何ぞ滑稽的なる者の間に、優美なる者と同等の美を認むべき烱眼あらんや、三馬、一九は終に馬琴、春水の下にありとなし、赤貝飯盛は千蔭春海にだに及ぶ能はずとなすは今日の文壇も尚免かるゝ能はざる偏見なるが如し、過去の錯誤は至當の錯誤なり、予は唯現在の偏見を疑ふ者也、優美なる者は優美なるが故に美なり、滑稽的なる者は滑稽的なるが故に美なり、彼是各特殊の美なり、特殊なる者は比較すべきに非る也、高下すべきに非る也、短見なる當時の文學界は此に思ひ及ぶ能はざりき、彼等は優美なる者を以て、遍に滑稽的なる者の上に置けり、彼を有心と稱し是を無心と稱し、(有心即「心ある」とは一種の時代語にして情ある、事理を解する等の義なり、無心とはこれに對して無情なる、事理を解せぬ等の義なり、されは前者は常に稱賛の意に用ゐられ、後者は輕蔑又は卑下の語として用ゐられたる者也、後世の俳諧者流が所謂無心所着など稱する者とは全く意義を異にせり)彼をよき連歌と云ひ、是をわしき連歌と云ふに至りぬ、此社會的冷遇は、連歌師を驅て漸く滑稽的なる者を去つて優美なる者に移らしめたり、かの機智百出、滑脫無際の妙は栗の本の名と共に、久しく跡を純正連歌に絶ちぬ、されば二條良基が筑波集の編纂にも、滑稽的なるもの、即、所謂俳諧は僅かに其數葉を割愛せらるるに留まりて、遠く知己を守武宗鑑の輩に待てり、」滑稽の湮滅頗る惜むべきなり、當代の短見尤嘆ずべき也、然れども、更に當代の所謂滑稽を見るに唯是一種の地口輕口に過ぎず、深刻なる裏面的考察、輕快なる諷刺的文字等の滑稽の眞趣味は、彼等の夢想だもせざりし處也とすれば、這般の小滑稽が輕蔑せられ排斥されしは必竟事の數なり、又大に惜むに足らざるが如し、予は唯是に代て連歌界を支配せし詩想が、陳套なる寧ろ腐敗したる、當時の所謂歌人的詩想なりしを見て、寧ろ稍革新的趣味を帶びたる、生氣ある、潑剌たる小滑稽の湮滅を哀しむのみ、

そはともあれ、上代の連歌を支配せし滑稽は、漸次純正連歌より排斥されたり、而し

て之に代りて、殆んど中古の連歌の大半を支配せし者は、當代の所謂歌人的詩想なりとすれば、今少しく、其所謂歌人的詩想なる者をとくの必要あらん、

基俊が悅目抄に曰

歌をよまんには、歌を先する事あるべからず、先題につきて緣の字を求めよ、三あらは三所に置くべし、二あらば、めいく、たいくもゝはかたと腰とに置くべし、一あらば一ふし歌によむべし、緣の字なくは、緣の字を尋れて置くべし、緣を求めずして歌を先立つる事は、材木なくして家を造らんが如しと云へり、云々

古き歌の第一二句を取りて、今の歌の第三四に置き又古き第三四の句を今の第一二に置く事、先達の數久しくなれり、かくて上下をちがふる事も、又度數なれば、例の事かと見る、又花の歌を本として、紅葉の歌に改め、雪の歌を取て霞の歌によみなどしたるを見れば、題目はあられども、心詞總て本にかはる所なし、只花の歌を花に、月の歌を月に、歌をはたらかさずして、しかも其心をかへて、其心をめづらしくよまんと思ふべし、又古き五文字を七文字になし、例へば五首詩を七首に作るが如し、七字をも五字につゞめ、若くは七字をも二句にかけてもよみつべからん詞を、必古歌には一句にこそあれと云ふ事なく、亂りてもよみ侍るべきにや、かゝらでは、いかにとして異ふ所有るべしとも見えず

と、如何に其言語の錯列法を精究せしかを見よ、基俊は當代の歌人の泰斗と稱せらるゝ藤原定家が「此輩の末の世の賤しき姿を離れて常に古き歌を希へり」と、稱揚して措かざりし當代の名家なりとすれば、又以て當代の詩想を窺ふに足らんか、其「心をかへ」と云ひ「心をめづらしく」せよと云ふは、詩想を新奇にせよと云ふに非ずして、「云ひまはし方」を新しくせよと云ふに過ぎざるは前後の語勢に徵して明かなり、彼等は歌を咏ずると云ふよりは、寧ろ言語を錯列せし也、其思想を咏せしに非ずして、古歌の想を操り返えしのみ若し是をしも詩想と稱する事を得ば、是即當代の所謂歌人的詩想なり、

而して、其所謂古歌の想とは、かの花月にうかれし殿上の風流男が、唯自己を咏する事のみを以て滿足せし、偏狹なる詩想是也、されば定家亦嘗て云ひぬ、「歌は廣く見、遠く聽く可き道に非ず、心より出て自ら悟る者とばかりこそ申侍しか」と、彼は嘗に自己を咏ずる事を以て滿足せしのみならず、廣く事物を觀察する事を排斥せんとさへしたり、かくて歌道が彌益萎縮せしは疑を容れずと雖も、其錯列法は實に異常の進歩をなして、其獨得の妙致に於て、古今東西殆と比類なき、一種の敘情詩顯れたり、新古今歌集即是なり、而して其妙技は直に連歌に應用されたり、

定家家隆の輩は、當代の和歌の妙手として、同時に純正連歌の創作者として、當代の

所謂歌人的詩想、寧ろ其絶妙なる錯列法を連歌に應用せしのみならず、短歌の句法をも直に連歌に應用せり、故に其長句と短句との關係はほゞ、短歌の上の句下の句と異なる事なく、從て單獨に其一句のみを見れば、完全なる意味を成さゞる者多し、そは室町時代に至つては「歌連歌」と云ひ、又は「一句に其理なし」など云ひて排斥されし者也、かの筑波集にも是を論じて

いにしへの連歌は秀句對句なり、唯一兩句云ひ綴けたる斗り也、中比は又一句の成さざる句を歌の樣に云ひ綴けたる也、近頃よりぞ心深く幽玄なる事共承りしかども云々

といひぬ、其古とは我所謂上代なり、中頃とは中古の前期にして、近頃とは二條良基の當代、即我が後期の初となさんとする南北朝の末葉なり、

宗祇が吾妻問答には

此道の再興は、故二條攝政殿好みすかせ給て、好士を撰び給ひしに、其頃の達者善阿、順覺、救濟、信照、周阿、良阿など侍や、當時も千句など云ふ事侍れども式目を定め法度を正しくせられて、宋代に其旨を守るは、彼御時よりの事なれば、此折節をさして、上古とは可申や、句の樣も長高く有心にして、歌に其心等しく、殊勝の事多く侍り、然はあれど、歌の樣句などの樣に云ひかけて、一句に其理なきも侍りけるにや、云々

と云ひて、良基時代をも、尙所謂歌連歌の時代とせり、蓋其時代は變遷の時代にして、新調成て古調未だ去らざりしかば、一方には新調の萠牙の著明なるものの有るとともに、他方に古調の痕跡亦頗る多かりしなり、されど予は其新調起源の時代として、其他尙幾多の理由の下に此時代を以て後期の初に置くの妥當なるを見るなり、其詳細に至ては更に次節に說く處あるべし、

當代の短歌と連歌は、然く趣味構造を同くせしかば、其和歌道と連歌道は實に二物にして一物の如き觀ありき、當時、連歌の名手として、稱揚せられし人々を、筑波問答によつて列擧すれば、定家、家隆、土御門院、順德院、爲家、爲氏、良實、實經、辨內侍、少將內侍、基家、良知、知家、行家、善阿、等にして、其多數は吾人が和歌の名手として記憶する人々なる事を見れば、其如何に密接の關係を有せしかを想見するに足らん、實に當時の歌人にして連歌に通せざる者なく、連歌に通する者にして和歌を解せざるものなかりしなり、されば其巧妙なる長短句を連接して新古今、新勅撰以下の集中に列記するも、吾人は終に其連歌なる事を覺知せざるべし、

今筑波集及其他の諸抄より、當時の連歌の二三を抄出して、更に其格調を示さん、

さゝ竹の大宮人のかりころも

ひさよはあけぬ花の下ふし、　　定家

かゝみの山に月ぞさやけき

にほてるやにほのさゞなみうつり來て、　　家隆

たえぬ煙と立のぼるかな

巻はまだ淺まのたけのうす暖、　　爲家

思ひ出るみしよの春はそれなから

月や昔にかすみはつらん、　　少將内侍

思ふ程にはいまだうらみす

風かよふなつのゝまくすわかばにて、　　普阿

空にも冬の月はすみける

やとるべき水は氷に閉ちられて、　　四行

これ等ぞ其最普通なる者なる、そは多く例を示すの要なかるべし、普通の短歌を二人にて咏せし者と思はゝ直に其一例として見るを得べければ、必竟和歌が想の發露に非ずして、言語上の製作品なりとすれば、一人にて作爲するも二人にて作爲するも甚しき徑庭あらざるべきなり、

而して、かの稀に行なはれて、漸く湮滅せし、滑稽的なるもの、即俳諧又は狂句と稱せられし者の一二を擧くれば、

弓につくるはしもこそ見れ　　紫阿

前後竹ある里にもすなきて、

あしもてかへる離波津の波、　　しらず

みだれもはすまひ草にぞ似たりける、

法勝寺に花見侍けるに人々酒たうべて

山櫻ちれは酒こそのまれけれ　　顯照

花に強てや風はふくらん、

櫻の枝を花瓶に立てられたるを、爲氏卿折て取られけるを、御覽せられて爲氏が花を盜むに、連歌一つしかけよと、仰せられければ、　　辨内侍

しら波の立よりておる櫻ばな　　爲氏

ちらしかけてぞにぐべかりける、

など是也前二聯は純正連歌中に用ゐられし者にして、後二聯は特に、其詞書きが示す如く、唯一場の戯として詠ぜられし、上代連歌の餘風を示すなり、そは只當時のみならず、長く連歌界に其餘波を留めて、常に連歌者流の餘興として弄ばれたり、かの守武が「御座敷を見れは何れもかみなづき」と云ひしに答へて宗祇が「ひとり時雨のふり烏帽子着て」と云ひしも此類なるべし、

當時既に賦物と稱する事行はれたり、兼載雜談にも後鳥羽院殊に賦物を好み玉ひ

しとを記し、八雲抄にも賦物の事見えたり、されど後世の如く必ず賦物を取る事と定まりしにも非りけん、總て連歌に種々なる法則を立てゝ、拘束する事となりしは、此前期の末に初まり、良基の時代に成りし事なれば、そは次章に讓りて唯賦物を取りし一例を示して止まん、

爲氏

ちきりしのみやかはらざるらん
　こは山城國名所を賦する連歌中に四の宮がはらを賦せしなり

こひのみちいしやうさのみなげくかな　仝
　こは中將殿さいふことを賦せしなり、

必竟、賦物とは和歌の物の名より脱化し來りし者也、上に示すは特にめづらしき賦物を擧げし物にして、何木、花何などの上賦下賦の類ありし事は勿論なり、賦物の詳解亦次章に讓らん、

發句と云ふ名稱も既に當時に顯はれ、普通の長句とは少しく異りたる形躰をさへ具へたり、そは八雲抄に

發句は必云ひきるべし、何は、何ななどはせぬ事也、かな、とも、べし、とも又体、秋の風など躰にすべし

と云ひて、發句のみは普通の和歌の上の句と異なりて、云ひきるか、然らざれば躰言にて終るべし、即思想を一句に云ひ盡すべしといふなり、されど後世の發句にさへ異例あれば、此法則は必しも當時一般に用ゐられたる者也、とは云ふ可からざる也、蓋連歌の妙は連接の間に在れば、發句の作者は常に其巧を第二以下に奪はるゝ事を飽かず思ひて、一句に思想を咏し盡して、一種の巧致を示さんとする事、盛に行はれしかば、そを一の法則の如く思惟するに至りし者ならんか、勿論未だ獨立の詩形として咏せられし者に非れば、後世の俳諧者流が所謂發句などに比すべくもあらねど、亦一種の巧致を有する者なきに非ず、

爲家
無生
尊氏

きかぬにも心はつくすほとゝきす
　明日も見ん都に近きやまざくら

一木さく花には散らぬこゝろかな

是等は其稍見るに足るべき者なり、

予は嘗て上代の連歌を論するの條に云ひぬ、連歌の美は、五十韻百韻等の流轉變化窮極なき處にありと、今や五十韻百韻等の連歌既に成れりと稱す、然も其連歌の例を示すに當つて、依然唯前句を示すに止まるは諸君の深く怪む處なるべし、予も亦

當時の連歌を記傳する者、悉く其長短二句を列擧するに止まつて、打越をだに示さず、或は其前句をさへ記さゞる者あるの、何故なるかを怪むなり、心敬僧都がひとり言に曰く

古人秀逸とて、賭人記し置侍るを見るに、大かた前の句なかゝず、又二人合侍るを聞くにも、前の句沙汰なし、此事無念にや、連歌は前句を聞かでは、如何斗り玄妙の句も所詮なくや、前句、打越の輪廻などのあつかひにより、て、地連歌定句も感情あるべくや、かやうの輕々しき事より、ひとへに心も詞も前句によらず、眼失せ侍りて、只ならべ置たる句のみに成り行き侍るか、

と、古人亦此嘆あるなり、彼の當代の連歌の、唯一の編纂物たる筑波集も、悉く長短二句を連記するのみ、實に一卷の完結したる連歌をも見る能はず、從て其變化の妙用の、如何なる點にまで達せしかを知る能はざるは、尤遺憾と云ふべし、然れども是又其當時の連歌が、打越見渡等の變化に深く留心せざるの證として見るべきか、されば、にや當代連歌を談する者、多くは二句間の連接のみを說て、一面、首尾の變化に及ぶ者甚稀なり、唯八雲抄に、

三句が中には病を去るべし、四句五句が內にも同事は用意すべし、されどそれまでは云ふ可きに非ず、總て一座の連歌に、いたく同事の多かるはあしき事也、かまへて、連歌なればあらぬ樣にひきなしひきなし付る也、春にて久しく、秋にて久しきは、連歌せぬ者の集りたる折の事也、

先の上句に春來れば、など云ひ果てたるに、下句斗りを隔てゝ、なにすれば、などは文字有るてにはの事は、尤すべからず、惡く阻ゆるなり、

と云へるなどのみぞ、少しく此に思ひ及びし者なるされど、そも亦漠然と指合、去嫌、同季等の耳立たしき者を去るべし、と云ふに止まりて、後世の式目を立てゝ綿密に是を規定し、甚しく此に注意せし者に比して及ばざる事遠しと云ふべし、

要するに、當代の連歌は寧ろ連關したる短歌の集合躰なるが如き觀ありて、未だ一卷の純正連歌として、稱揚すべき佳所を有せざるりしが如し、

其格調及躰裁は畧これを叙述したり乞ふ少しく當代の連歌作者が連歌に對する感念、及び當時の社會に於る連歌の位置を說かしめよ、

將に地に墮んとしたる短歌が、定家、家隆、西行、長明等が奇才に依て、更に一種の異彩を放てるは、例へば燈火將に滅せんとして一たび明かなるのみ、永遠の光華は終に望むべからざるなり、此に連歌は短歌に代る可

き命運を以て生れぬ、而して彼は短歌の仇敵の家に生れずして、却て其保護者の家に生れたり、彼は依然其父たる上代の連歌の如く、猶皆く和歌者流が餘興の具として、遙かに和歌の下に列せられて、靜かに後世に於る、そが全盛の潛勢力を養ひぬ、これを中古連歌前期の大勢となす、

されば當代の連歌作者も、只和歌の餘興として是を咏ずるに止りて、後世の救濟周阿あるは宗砌宗祇等の如く、一身を連歌修行に委ぬるが如きものゝある事なし、定家も年たけし後の老樂に、夕毎に連歌せしと筑波問答に見え、爲家卿も齡長けては、歌案しつゝくるもむつかしとて、朝夕連歌のみぞせられける」と一條兼良が小夜の寢さめに記せる如く、和歌が遊戯的なるよりは、更に一層遊戯的なりき、從つて其鍛錬も頗輕視されて、巧妙なる詩想は、さる遊戯場裡に浪費せんよりは、寧ろ短歌を作るが爲に蓄積すべしとさへ諫告されたり、八雲抄に「大かた連歌は、いたく風情を盡す歌の樣にはなけれども、よき程に人に案ぜさせて作るはよき也、秘藏の詞などは付く可からず」と云ひ、藤谷爲相が「其子爲成の連歌に面白き句ありけるを、會果てゝ後大に賦めて、かゝる事を歌にこそ秘藏して讀むべきなれ、連歌は當座の一興ばかりなれば、用ゆる事然るべからず」(落書露顯に見ゆ)と云ひしなどこそ、當時の歌人が連歌に對する普通の觀念なれ、

蓋政權武門に移りてより、殿上人の功名心は唯和歌に勅撰の榮を得て、不朽の名聲を博するの外に出でず、從て身命を賭して斯道に驅馳する者亦頗る多かりき、然るに連歌に至つては、筑波集以前には、未だ嘗て撰集の擧ある事なく、名人が苦心の痕も、多くは唯一座の賞贊を得るに止まり、偶世上に傳聞せられて一時の名聲を得も、久しからずして忘却され、湮滅に歸するが常なりとすれば、當代の歌人をして、深く此に注心せしむる能はざりし者、亦怪むに足らざるか、

今川了俊が落書露顯に曰、

河内耳が句に、……海旅の暮たると云名句仕たりとて、其頃世にもちあつかひし句を、耳にふれて侍しかど、連歌の事うとく侍し頃にて、忘れたり、さやうの古反紙世にも殘てや侍らん、

と、世にもてはやされて、連歌に疎き耳さへ一度は驚かしゝ句も、數年ならずして湮滅しぬ、其古懷紙も殘れりや、殘らずや、若し耳基が筑波集なかりせば、吾人は當代の連歌の一斑をだに窺ふ能はざるべし

そが、遊戯的性質の特徴として、物を賭する事の當初より行はれしは、尤看過すべからざる事の一なるべし、後鳥羽院の時既に「さま〳〵の懸物など出されて、おびたゝしき御會」ありと云ひ、殿居百韻の賭物を定家卿は四十まで取られたりと、卿が日記に見ゆと云へば、純正連歌創作の當代より既に此事ありしなり、徒然草の猫法師が連歌の賭物を懐にせしとは諸君の熟知する所なるべく、後には砂金、領地などさへ賭物となりしとあり、はては周阿、救濟は奸策を回らして賭物の領地を私せんとせし事ありし、とさへ傳へらるゝに至りぬ、(そは心敬が馬上集に見えたり)其眞僞は暫くこれを措くも、其餘弊の盛なるや、宛然一の賭博の如き觀あるに至りしは事實なるべし、今川了俊大に是を嘆じて、「歌には金づくの歌はなき者を」と云ひけるを見ても、亦其狀態を想見するに足らんか、今日の所謂點取發句、懸賞俳諧の殺風景は、既に其淵源を當代に啓けりと云ふべし、

かゝる弊害は、一方に其眞正なる價値を減殺すると共に、他方には又大に其流行の勢を助長したりけん、歌會などの果ては、殆と毎に餘興として連歌ありし者なりしが如し、爲家卿は、歌に人の許へ行くには、必ず連歌の發句一二句案じて、何木何人何舟樣の、常の賦物にあてゝ用意して行くべし、と云はれし事水蛙眼目に見えたり、

かくて當初は、唯歌人社會にのみ弄ばれしが、嘗て短歌が殿上の獨占に歸せし以來、下層の民は、歌道を以て一種の秘鑰の裡に在る者の如く誤想し、仰視して敢て企て及ばずとなし、已を得ずして文學以外の動物たるに甘んぜしが、彼の連歌と云ふ新文學が、頗る殿上人に輕視され、唯其餘興の具として弄せらるゝを見て、此に彼等は、連歌を以て、和歌よりは、寧ろ容易にして近き易き者なるべし、と推測して、漸くこれを摸倣せんとする者起りぬ、地下にも花の本の好士多かりしかども、上樣の道の人々の上手にて有しかば取分けてぬけ出たるも侍らず、と二條良基には冷々看過されしかど、昆沙門堂、法華寺等の所謂花の本の輩、萬の者ども多く集めて、春毎に連歌すること既に四條後嵯峨の交に初まりぬ、鎌倉の末葉に至ては、啻に此派のみならず、地方下層の民も爭ふて、是を弄びけん、建武元年の二條河原の落書に、「事新らしき風情なく、京鎌倉をこきまぜて、一座揃はぬえせ連歌、點者にならぬ人ぞなき、」と在りし事嬉遊笑覺に見えたり、兼好が「田舍人こそ色こく萬は興ずれ、花の下にはねぢよりて立より、あからめもせずまもりて、酒飲み連歌し、はては大なる枝心なく折りぬ、」と

そが、遊戯的性質の特徴として、物を賭する事の當初より行はれしは、尤看過すべからざる事の一なるべし、後鳥羽院の時既に「さま〳〵の懸物など出されて、おびたゝしき御會」ありと云ひ、殿居百韻の賭物を定家卿は四十まで取られたりと、卿が日記に見ゆと云へば、純正連歌創作の當代より既に此事ありしなり、徒然草の猫法師が連歌の賭物を懐にせしとは諸君の熟知する所なるべく、後には砂金、領地などさへ賭物となりしとあり、はては周阿、救濟は奸策を回らして賭物の領地を私せんとせし事ありし、とさへ傳へらるゝに至りぬ、(そは心敬が馬上集に見えたり)其眞僞は暫くこれを措くも、其餘弊の盛なるや、宛然一の賭博の如き觀あるに至りしは事實なるべし、今川了俊大に是を嘆じて、「歌には金づくの歌はなき者を」と云ひけるを見ても、亦其狀態を想見するに足らんか、今日の所謂點取發句、懸賞俳諧の殺風景は、既に其淵源を當代に啓けりと云ふべし、

かゝる弊害は、一方に其眞正なる價値を減殺すると共に、他方には又大に其流行の勢を助長したりけん、歌會などの果ては、殆と毎に餘興として連歌ありし者なりしが如し、爲家卿は、歌に人の許へ行くには、必ず連歌の發句一二句案じて、何木何人何舟樣の、常の賦物にあてゝ用意して行くべし、と云はれし事水蛙眼目に見えたり、

かくて當初は、唯歌人社會にのみ弄ばれしが、嘗て短歌が殿上の獨占に歸せし以來、下層の民は、歌道を以て一種の秘鑰の裡に在る者の如く誤想し、仰視して敢て企て及ばずとなし、己を得ずして文學以外の動物たるに甘んぜしが、彼の連歌と云ふ新文學が、頗る殿上人に輕視され、唯其餘興の具として弄せらるゝを見て、此に彼等は、連歌を以て、和歌よりは、寧ろ容易にして近き易き者なるべし、と推測して、漸くこれを摸倣せんとする者起りぬ、「地下にも花の本の好士多かりしかども、上樣の道の人々の上手にて有しかば取分けてぬけ出たるも侍らず」と二條良基には冷々看過されしかど、昆沙門堂、法華寺等の所謂花の本の輩、「萬の者ども多く集めて、春毎に連歌する」こと既に四條後嵯峨の交に初まりぬ、鎌倉の末葉に至ては、啻に此派のみならず、地方下層の民も爭ふて、是を弄びけん、建武元年の二條河原の落書に、「事新らしき風情なく、京鎌倉をこきまぜて、一座揃はぬえせ連歌、點者にならぬ人ぞなき、」と在りし事嬉遊笑覽に見えたり、兼好が「田舍人こそ色こく萬は興ずれ、花の下にはねぢよりて立より、あからめもせずまもりて、酒飲み連歌し、はては大なる枝心なく折りぬ、」と

云ひしは、此輩を云ひしなるべし、文學思想に乏しき、田舍漢の當初の連歌が、所謂えせ連歌のみ多かりしは勿論なるべし、されど彼等は和歌者流の偏見を有せさりき、月花的思想にのみ拘泥せざりき、連歌の改革者は實に此の地下の輩より起れり、連歌道の全權は終に花の本の手に歸せり、彼等は殆ど和歌を壓倒して、室町時代に連歌の全盛を維持し、更に進んで德川時代の俳諧を大成しぬ、その發達變遷は、更に章を改めて是を叙述せん、

五、中古の連歌　後期

上延文應安の際より下天文弘治の交に至る百數十年、室町全盛の時代は、實に所謂連歌、即連俳に對して單に連歌と稱する古調連歌全盛の時代なり、下つて天文九年の守武千句、宗鑑が犬筑波等出でゝ、一轉して德川時代の所謂俳諧となるに至るの間を、假に中古の後期と稱す、

初め後鳥羽の世、長篇連歌の創作なりしより、よしそは單に和歌者流の餘興たるに留まりしとするも、幾多の名家輩出して、頗る流行の勢を示せしが、北條の末葉天下漸く多事ならんとして、所謂月卿雲客の徒もこの遊戯文字に專らなる事能はず、連歌の主權は漸く去つて地下の閑人、ことに僧侶の輩に歸せり、されば慶長正和の頃に至つては、殿上又連歌に名あるものを聞かず、善阿法師獨斯道の達人と稱せらる、其弟子救濟、順覺、信照、良阿、十佛の徒、皆市井の閑人に非れば圓頂緇衣の人なり、而して其多くは天下亂麻の間に沒却されて、僅かに筑波の撰集に其名を留むるのみ、蓋、連歌亦幾多の美術文學と共に、一たび其戰亂の厄に遭ふとを免かるゝ能はざりしも也、

補家亡び、義興死し、南朝の氣炎漸く減して、義詮義滿頗る室町の權威を固うし、所謂室町文學勃興の氣運熟するに乘じ、最流行の勢を逞うせしものは實に連歌なりき、そは前章に記載せし二條河原の落書を見るも、或は芳賀學士が能狂言の分類中連歌に關する者頗る多きを見るも、其他幾多の日記隨筆の類、苟も室町時代の文學者の筆に成る者にして、連歌の字を見ざる者鮮きを見れば、優に其流行の狀を想見するに足るべし、

そも〳〵短歌は、新古今時代に於て其特殊なる進歩の頂點に達し、かの錯列的の製作法は既に進むべき餘地を有せず、而して歌道は單に雜駁なる修辭法と笑ふべき

秘傳々授のみとなりて、終に所謂師範家の世襲的事業となり、徒らに歌詞の文字を爭ひ、禁忌の辭句を詮索するのみ、啻に彼の雄渾壯大なる萬葉の調を見る能はざるのみならず、纖巧奇警なる新古今の調すら存せざるに至たりぬ、蓋是詩壇、赤人人丸の繡鵬なく、定家家隆の巧緻なきに因らざるに非ずと雖も、亦歌人等が徒に形式的の末枝にのみ拘泥せし者、關て力なくんばあらず、思ふに短歌が然く衰運の境に沈淪せしは、又大に連歌の流行を助長するに於て力ありしを見る也、心敬僧都が「老のくりことと」にも短歌の衰微を以て連歌流行の因となして曰、

（前略）又延喜の聖、古今集を撰び玉へるより、彌道廣く代々のあつめ數重なり、家々の風花を香はし、國々の言葉色を添へり、ことに後鳥羽院の御代に盛にして、歌の仙數を盡して生れ合ひ、浮雲霞の如く起り、艷流泉の如く沥く、此道の再昌と見え奥旨を盡し侍ると也、蓋塵纏風て一天晴の道に成れると也、しかはあれど其末の方よりは又心の花云ひなくれ、こと葉の露あさはかに下り行きて、近き世にはひたすら捨られ侍るにや、興廢盛衰の理あらたに覺え侍り、歌の道すたれしよりは、世人皆連歌に心をうつし、一天に滿てり、これ二條太閤此道の聖におはして云々

と、而して彼自身が連歌にのみに盡瘁するものは、亦歌道既に衰へて又如何ともすべからざるによると稱しぬ、曰、

近き世には歌の道さながらすたれ侍れば、せめて此道をまとしく學びあきらめて、歌の教戒の端なも殘し、大丈夫爽の心なも和らげ、末の世遠く情なも知らせはべるべきに、云々

そが尙、連歌を以て歌道の末枝となし、前代の歌人的思想の餘音を存して、せめて此道なりとも云ひしもをかしけれど、そはともかくも、尠くとも、かの梵灯宗砌等と併せ稱せらるゝ、連歌界の一偉人、心敬僧都は、短歌界の衰色を見て不得已して連歌界に身を投じたる者たるを見るべく、また以て詩壇の潮流を推測するに足るべし、

嘗て歌道の末枝として、和歌者流の餘輿として輕視されし連歌は、終に其盛衰に乘して短歌を壓倒し、其流行の盛運は蓋上代短歌流行の右に出てたり、されば上公家武家の輩より、下は市中の閑人僧侶隱者の徒に至る迄、苟も文筆ある者にして斯道を窺はざる者なきに及べり、而して彼の二條太閤良基は宛も其勃興時代に遭遇して、頗る其大勢を助長したり、

蓋、慶長以來、僅かに僧侶隱者の間に其命脈を維持せし連歌が、身和歌道の宗家たる二條家に生れ、位攝關を極め、且つ和歌に堪能なりと稱せられし良基をして、其全力

を傾倒せしむるに至らしめたる耳ならず、善阿の弟子救濟を以て其師と稱せしむるに至りたる事實のみにても、亦大に連歌の價値を增進せしむるに足るべし、況や菟玖波の撰集、應安新式の規定、亦其手に成りしに於てをや、

菟玖波集は良基救濟等の撰む所にして、延文元年五月成る、そは、上菟玖波の詠より下當代に至る古今の連歌を撰集せし者にして、實に連歌撰集の權輿也、翌延文二年七月勅撰に准ぜらるべきの命あり、今坊間に流布する處の菟玖波集の卷尾に其奉書を附記せり、曰、

菟玖波集、可被准　勅撰、可有御存知之由、　天氣所候也、以此旨可令申入關白殿給、仍執達如件、

延文二年後七月十一日　　日野左中辨　時光

謹上　刑部卿殿

追　申

依武家　奏聞、如此御沙汰候也、同可令申入給、

（因に云、帝國大學圖書館圖書目錄、及び三上高津兩先生の日本文學史等に菟玖波集を以て宗祇の撰なりとなすは蓋誤謬也、宗祇が撰びしは、新菟玖波集にして、單に菟玖波集と稱する者は二條良基の撰なる事此奉書を見ても明かなり）

唯一塲の遊戯文字たりし連歌は、此撰集に依て初めて不朽文字たるを得たりしのみならず、其撰集は和歌の勅撰集に准ぜられて、善阿救濟の名は定家家隆に伍せんとす、連歌師得意の狀知るべきなり、菟玖波の撰集は然く連歌師の位地を高めしのみならず、實に連歌道に一大革新を與へたり、連歌が不朽文字として文學上の價値を認めらるゝに至りしは此撰集の力なり、

菟玖波の撰集に後るゝ事十七年、應安五年、連歌新式成る、所謂應安の新式是なり、蓋連歌の式目は此時に初まるに非ず、筑波問答にも式目の起源を記して

中古までは一二句をつらね、或ひは連歌、有心無心の句などにて有し程に、誠に式目を作たる事もなし、然るに文和弘安の比より本式新式など云物出來侍り、鎌倉には爲相卿藤ヶ谷の式目とて北林と號していたされたり、當時用ゐたる新式は大納言爲世卿作られ侍るにやとかれども地下の輩多し、當座の了見によりて古き式を背く事侍り、云々

と云ひ、或は

近くは爲世爲相爲藤卿など、思ひ〳〵の式目を作られなどして賞翫せられし事は、無下に近きもなれば云々

と、記す等を見ても、當時既に幾多の式目有りしことを知るべし、されどそは所謂、思ひ

〳〵にして、只一家言として其の門弟中に行はれたるに過ぎず、從つて法則として規定されたる者たるよりは、寧ろ修辭法として敎示されたる者なりき、其連歌道一般の通則として天下に認められしは、應安の新式に初まりぬ、而してこれ亦二條良基の手に依つて成りぬ、されば宗祇が吾妻問答にも「式目を定め、法度を正しくせられて、末代に其旨を守るは、彼御時よりの事なれば、此折節をさして上古とは可申哉」と云ひぬ、彼御時とは二條良基時代にして、式目法度とは即應安の新式を稱する也、蓋宗祇の眼中又良基以前の連歌なきなり、又以て此新式が連歌道に及ぼせし影響を想見すべし、されば予をして、少しく應安の新式の梗槪と、及び當時に普通なる連歌の形式とを語らしめよ、そは連歌と云ふ者の概念を得るに最必要なればなり、

連歌に最普通なる形式を百韻となす、そは長句即五七五の句、及び短句即七七の句を交互相連ね、長短句合して百句より成る者なり、而して是を記載するに懷紙四枚を束ねたる者を以てし、其第一面に八句を記しこれを表と稱し、其裏面に十四句を記して裏と稱し、第二枚目及び第三枚目の表裏に各十四句を記して二ノ表、二ノ裏、三ノ表、三ノ裏と稱し第四枚目の表面に十四句を記して名殘の表と稱し、其裏面に八句を記してこれを名殘の裏と云ふ、而して各懷紙の一面に記したる部分を面と云ひ裏と、二ノ表と、二裏と、三表と、三裏と名殘の表と、各二面を合して見渡しと稱し、一二三名殘等の各表裏二面を合して同懷紙或は折と稱す、其初表の第一句を發句と稱し、次の短句を脇或は入韻と稱し、次の長句を第三と云ひ、最終の句を擧句と云ふ、こは應安新式以來連俳時代に至る迄、百韻連歌に一定したる形式及び名稱なり、其百韻を二分したる者を五十韻と云ひ、百韻十箇を集めて千句と稱す、五十韻と千句とは當時百韻に次で最多く行はれたる者也、此等の規定は應安の新式中別に明記する事なければ、其以前より既に幾分か行はれたる者なるべけれど、彼の本式と稱して後世時々用ゐらるゝ處の表を、十句となし、名殘の裏を六句となす者、亦頗る行はれたるが如く其他又幾多の異りたる形式ありしなるべけれど、前期の連歌多く湮滅して考ふ可きもの尠く、且つ深く追究するの必要を見ざるが如し、兎にも角にも、斯く確然一定されたるは應安以來の事なるが如し、

新式に規定せし主要なる部分は、後世の所謂指合、去嫌なり、即ち一座一句の物、即ち一卷の連歌中唯一度より用ゆべからざるもの、(例せば若菜、郭公等)二句の物、(野邊、待

戀の類)三句の物、四句の物、五句の物、或は可嫌打越物、即二句以上を隔つべきもの、(例せば居所に村日に月次の月等)可嫌同懐紙物、可隔三句物、可隔五句物等を規定し、或は春、秋、戀の句は三句以上五句に至るべし、夏、冬、山類、水邊は三句以上に渉るべからずと定め、其他輪廻、遠輪廻、本歌取等の法則あるの外は、唯僅かに賦物の取方等を記するのみ、且所謂新式の大部分は享徳年中、一條兼良が宗砌と謀つて追加したる所多しとすれば、應安の新式其物は甚不完全なる者なるが如き觀なき能はずと雖も、そは新たに規定したる方式を記述し盡さんとしたる者に非ずして、其奥書に記するが如く、「只爲止當座之諍論粗所定」たるに過ぎざれば、其諍論の因となるに至らざるべき者は、特に記載する事無かりしなるべし、されば二條良基時代に規定されたる連歌の方式は、一の應安新式に盡きたりとなすを得ざると勿論なるべし、

彼の所謂景物の事の如き、新式中何等の規定をも見ざれど、明應年中兼載が記述せし本式には雪月花郭公寐覺を景物とし、「ならべて三句すべからず、打越にも不可爲」と定められたれど、了俊が辨要抄(良基の傳授と稱す)には、雪月花述懐を寄所と稱し、兼載雜談には雪月花を景物と稱し、「二つともならべて一面にすべからず」と記す、其

景物と寄所とは蓋同意義なるべけれど、其數も種類も各相同しからず、且當時の連歌を撿するに發句の花に第三の月などは普通の事にして、一面に景物三句以上あるもの、又全くなきものなきにあらず、されば後世の如き四花八月と云ひ、四花七月と云ひ、或は花の座、月の座と云ふが如き規定は固り未だあらざりしも、景物と云ふが如き考は既に當代に存せし也、其月花のみを以て景物となせしとは、宗祇以後に初まりしが如し、

賦物の法は新式中の初心抄に見ゆ、曰、

往古以賦物爲題、或百韻、或五十韻、毎句用其賦物、近代發句計有賦物之沙汰、脇句以下一向不取之云々

斯く賦物の法は漸く廢れて、發句のみに取る事普通となりしかば、「兼載雜談」「さゝめごと」などにも、賦物は發句の題なりなどゝも云ふに至れり、されどそは普通の賦物即上賦、下賦の類を云ふ者にして、本式連歌には尚表十句に賦物を取り、源氏國名、伊勢物語等の賦物には、通篇賦物を取るが常なり、今斯道に緣遠き讀者の爲に、少しく賦物の取り方を説明せん、

上賦、下賦は最普通なるものにして、上賦とは何田、何路、何花、何船等の賦物を定め其何と云ふ字に代へて他の田、路、花、船等の字と連續して、一の熟字をなす可き字を、句中に讀み込むとなり、例せば

何路　あふちさく野(野路)は紫の楮かな　　救　濟
何田　星の名も一夜は立し秋の(秋の田)月　　專　順
何毛　花よりも昴(昴毛)に有りける匂い哉(俳諧調)　　守　武

等の類なり、下賦とは山何、朝何、白何、夕何、等にして、其取り方は略上賦と異なる事なし、例せば

山何　身にしむは花の香なれや春の風(山風)　　龍　忠
朝何　光かも天に滿てたる月夜(朝月夜)かな　　生　阿
姉何　鶯の姉(姉妹)かなかぬほとゝぎす(俳諧調)　　守　武

等也、其他三字中略、二字反音、一字露顯、等の賦物あれど、上賦下賦に比しては頗稀なり、そは

二字反音(卵?)花の影月に匂ひのみつ夜哉　　恐　暨
三字中略(花野?)竹の葉の盤は星の林なか　　貞　治

等の類なれど懷紙には單に二字反音、三字中略とのみ記するを法とするを以て、後世よりは其果して卵、花野等を賦せし者なるか、然らざるかは知るに由なし、一字露顯とは、蚊を賦して香と云ひ、名を賦して、菜と云ふの類なり、

以上は皆通常發句のみに取り扱ふ者にして、其他通篇賦物を取る者も亦其例に乏しからず、今其一二を擧ぐれば、

三代集作者百韻の一節　　經　德
春はけふ夏の隣の千里(大江千里)なか　　雅　良
かべるを送る鳥のみち風(小野道風)

以呂波百韻の一節
いなれぬや水のもなかの月のあき　　御
ろを推す舟かはつがりの聲　　方
はるかなる霧まの山は島に似て　　宗　砌

宗牧獨吟名所百韻の一節
山城　波の音水するも蟬の小河かな
仝　夕風涼し片岡の森
仝　日影山あき行雁に移ひて
丹波　ほのかにかゝる葛城の月
仝　瀞勝の立田の奥や時雨るらん

文章連歌五十韻の一節(俳諧調)

新なは如件とるものを
其後よりの雪の遠山
時雨しか雖然月出てゝ
夜ふけかたこそ毎度寒けれ
獨寐は御音信にも不預
稀にあひなばいかゝ恐悦

等の如き、或は源氏國名、伊勢物語、觀世音名號等を賦する者、或は追善の爲に人名を賦する等格段なる賦物は、通篇盡くこれを取るを例とせり、

以上は應安以來、中古の後期に一貫したる連歌の形式なり、

これ等形式上の法則は餘に器械的にして、幾分か連歌の眞趣を阻害せざりしに非と雖も、又此拘束の爲に頗る連歌の首尾をして多姿ならしめ、隨て一面一卷の變化に着目せしむるに至りしは、又蔽ふ可からざる事實也、眞基の如きは夙に一卷の首尾に着目して、

一の懷紙の面の程はあとやかに連歌すべし、二懷紙よりさゝめき句なして、三四の懷紙をばこゝに遊興ある樣にし侍る也、

などゝ說き、若草山には

連歌は一座の移り行さまにてよくもあしくも明ゆる也、先一巡は輕〻と差出たる調なく、求めたる心なく、すなほに有りなん、一巡に粉骨の句などして其首尾の合はぬは如何にぞやと聞え侍る也、大事の句なれば易き方へ付なし、易き連歌續きなば、又大事に取なしなど、深く、遠く、地文有る可き事ぞ、然るに同し樣にのみ付もて行程に懷紙の面もよろしからず、滯り付にくきこと多く侍る也、若能轉物則如來と侍る……付にくき所なも身を捨てやり侍らんは、如何なる粉骨の句よりも心有らんかし、

と論ぜり、されど、要するに其詩想は未だ上代の歌人思想の外に出る事能はず、常に言語上の修飾にのみ重きを置きしかば、德川時代の連俳に比すれば、思想の變化遙かに乏しき者たるを免かれず然れども其辭句の錬磨は優に其右に在り、

當時の連歌は今日に傳はる者頗多く、續群書類聚中にも其數篇を收めたれば、殊更に長篇の例證を掲ぐるの要なるべし、今は唯河越千句中の一節を示すに止めん、蓋そは頗る巧妙なる者の一なり、

遥く見て行けばかすまぬ春野かな　宗祇
明る木梢ののどかなるころ　藤
月うすし峯の櫻に移ろひて　眞

ほのくらき江に水落る山　心敬
浪さむく火なたく村の夕間暮　湖助

けふも明憂身を館に恥もせて
老よいつまで散る花を見ん　心敬
船に語らひくらす野邊のさと　宗祇
さびしやさはぬ春雨の中　道眞
笘かけて獨ぬる夜の舟の床　湖助
妹こひしらの旅のさむしろ　中雅
手枕の月傾て夢もなし　心敬
松風近き秋の山もと　印孝

此一節に於て最讀者の注意を乞はんとするは、相連續せる長短二句の關係なりそは前期の連歌の如く、二句を連續すれば全く一首の短歌となるべき者と頗る其趣に異にして、二句の間は唯意義の上の連關あるのみ、文法上何等の關係をも有せず、換言すれば、句々各獨立したる詩想を咏じたる者にして、只連續したる二句の詩想は、容易に融和して一種の詩興を誘起すべき者たるべき事を豫想するのみ、これ後期の連歌を前期の物に對して區別すべき主要なる特質なり、されど二條良基及び

其同時代の作者中には、幾多の例外なきに非ず

蓋連歌が歌人社會の手を離れて、善阿救濟等地下の輩の手に歸せしより、嘗て二物にして一物たるが如き觀ありし處の短歌と連歌とは漸く其趣を異にし、連歌師は歌人の連歌を歌連歌と罵り、歌人は連歌師の歌を連歌歌と嘲りぬ、蓋是歌人は、付句と前句とは語法上一首の短歌たるべき者なりとなして、師範家の口傳傳授を以て連歌を律せんとし、從つて係語緣語等文字上の連接を重んじ、連歌師は所謂「一句に其理ある事」即句々獨立すべき者なりとなして、專ら意義の上の連關を尊びたるの致す處なり、然く歌人と連歌師とが方圓相容れざりし者は、中古前期より後期に至る過渡時代の狀態也、二條良基出るに及んで、其比較的深遠なる學問と、攝關の地位とは、再び和歌と連歌とを調和したり、否寧ろ其世襲的の歌道を以て連歌師の輩を壓倒して、連歌は再び所謂歌連歌とならんとするの傾向をさへ生じて、彼の專ら良基を尊奉せし、了俊、心敬の輩は、或は歌道連歌道は二道に非ずと稱し、或は名歌の權ぎ方に倣ふべしと稱し、或は周阿が句は「いか程にも云ひくだきて一句の中に理を云ひ立てん」(梵灯庵返答書)とせしかば長高句なしと稱し、大に短歌と連歌とを一致

せしめんことを企てたり、然れども彼等が幾多の盡力にも拘らず、久しからずして連歌は、終に再び和歌道と分離したり、抑一首の上に詩想を發露せんとする短歌と、長短句連接の間に巧緻を寓せんとする連歌は、先天的の差異を有すとすれば、其發達に從つて漸く其趣味を異にするは自然の數のみ、良基救濟歿して固阿獨り斯道を風靡してより、梵灯、智蘊、宗砌を經て宗祇に及ぶに至つては、良基一派の連歌は再び歌連歌と稱し、一句に其理なしと稱して排斥せられ、「連歌は歌にちとたゝずまひかはれり」と、宗祇をして明言せしむるに至りぬ、而して連歌道は全然殿上の和歌者流の手を脱して、永久へに地下の者となりぬ、

連歌の主權は既に地下の者となりぬ、連歌師が社界的地位亦前期の者と同しきこと能はず、且つ其平民的傾向漸く增進して、俳諧調の流行となり、獨立的の詩形たる發句の萌芽を生ずるに至りたるの順序は亦頗る追究するの價値あるに似たり、乞ふ予をして少しくこれを研究せしめよ、

既に說くが如く、殿上の歌人者流が常に餘興として連歌を弄びし間に、所謂地下の者には却て熱心にこれを研究する者を生じ、且つ頗る流行の勢を得しかば、稍文才ある者は、自ら其間に推されて連歌師或は點者と稱し、一國或は一鄉を風靡して連歌の宗匠を以て任じ、自ら一種の職業とはなりぬ、斯の如き者漸く其數を增して、所謂「點者に有らぬ者ぞなき」と云ふが如き有樣を呈せし者は、既に建武年間に於る斯道の狀態なりき、其所謂點者の間に稍頭角を顯しゝ、臣沙門堂法華寺の花の本の如きは、每春數百人を集めて連歌せしと稱せられ、善阿の如きは、救濟順覺良阿十佛等幾多の有名なる連歌師を其門下に出しゝを見れば、假令當時の連歌師輩の傳記は、多く湮滅して窺ふ可からずとするも、假令殿上の歌人輩には地下連歌として輕蔑されしとするも、所謂地下の社會に於る尊重は蓋尠なからざりしなるべし、下つて救濟法師は一寒僧の身を以て攝政の師と稱せられ、筑波の撰集は勅撰に準せらるゝに至つては、連歌師の地位は殆ど和歌の師範家と其衡を爭ふに至りぬ、然く社會的位地の進歩せしとは、既に慾望の燒點たる可き性質を附與せし耳ならず、其當初よりの習慣は繼續されて、物を賭する事は殆んど普通の儀式となりしかば富豪の輩は頻に賭物を盛にして名家を集めんとを競ひ、或は沙金十兩を賭物としたり、或は某所の所領を高點者に與へんとしたりなどゝは、當時の記事に多く散見する處た

り、此に於てか連歌師は單に地位と光榮とのみならず、又頗る利益多き職業として、獨り風流隱士の手に委ねられずして、又野心家が慾望の競爭場裡に入りぬ、

其忌む可く厭ふべき剽竊、罵詈、阿諛、排擠、貪慾、賄賂、の阿修羅場、亦頗る我が見る所の世界に似たる者なきに非ず、心敬がさゝめとに曰

昨日の句をば一字二字のへて今日は申し侍るとなん、互に我物なし、されば心ざし深き人のしみこほりて云ひ出したる句なも、明日は主かはりて出でぬる程に、句は一つにて樣々の作者侍り、

今の世にかゝる事ありやなしや、了俊が落書露顯に曰

近世者の名、渡世のあいだの爲に、他な魏り身を卿かすにや、數奇の道にはづれて侍り、今の如くは當道既によりて侍れば、攝政家の仰の趣せめて述懷仕迄なり、

と云ひ、或は要辨抄に、

自他思ふまゝに惡口もほめもすべきなるべし、唯この道の棄たれんこと、住吉玉津島もやかなしませ給ふ可き、

と云ひて鑑識もなき盲評と、意義なき嘲罵を嘆きぬ、其他、或は點者と結托して賭物を奪はんとを企て、式目に附會して他の名吟を抹殺し去らんとする等、醜態陋狀筆にせんも忌はしき限りなり、彼の有名なる救濟、周阿亦其渦中の人たるを免かれざりしと稱せらる、吁、昔の世もかゝる樣なりけん、

斯く各其門戸を張つて相爭ふに至りては、勢、其競爭の目的物たる連歌其物の價値を高めざる可からず、蓋爭ふ所單に肴の骨なるに止まらんか、狗に似たるの嘲は免かるゝことと能はざらん、況んや其價値を誇大にするは、自ら其見識の高尙なるを示すに足るべく、且つ他を罵るに於て最も都合よき聲なるに於てをや、

見よや古今事理を異にせず、小說界に天狗の鼻合せ起こりてより、小說の價値は頓に九天に冲せんとするに非ずや、某文豪叫んで曰く、予が見識は此の如く高尙なり、思ふに天籟の響き深く心奧の靈絃に觸れて、宇宙の神秘人情の機微筆端に躍如たる者にして、初めて詩と稱するを得べし、彼の小說を目して戲作となすの徒又何をかなさんと、其意蓋謂らく、乃公の小說は獨予が理想の詩なりと、是實に最も罵るに便利なる聲に非らずや、予何ぞ小說を呪ふ者ならんや、唯、小說の聲價は此の如くにして向上したりと信ずるのみ、

嘗て戲作たりし小說が、ミゥズの申し兒となりしが如く、嘗て歌人の餘興の具たり

し連歌は、當代の連歌師の盡力に依て、實に尊む可く、寧ろ畏るべき結構なる聲價を得たり、そは實に佛果にかなひ、神慮に適し、而して、治國平天下の術に通ずと稱せらるゝに至りぬ、笑ふ勿れ、是決して酒落にもあらず、法螺にもあらず、彼等が最も眞面目に信仰し且つ唱道せし處也、されば筑波の翁は(假托の名なり)二條良基が「連歌は國の政の助などにも侍るべきなど、申す人の有るは、あまりの事にや」との問に答へて、かへす〳〵も事新らしき御尋かな」と云ひて、先づ其疑ふ可からざる事實なる事を斷定し、毛詩を論じ、詩經を說き、紀記の童謠を稱揚し、古今時代の浮華を罵り、而して連歌が最も世理に適ひ、正理を重んず可き者なるが故に、國政を助けて力ありと稱し、更に進んで、そは菩薩の因緣にして、其三句の移り一卷の變化は、前念後念をつかず、且つ執着の羈なしと說きて、現世のみならず當來の佛果を得べしと論斷しぬ、心敬も亦連歌の轉化は、若能轉物即菩提の旨に適ふべしと稱し、其他佛法との緣故を說く者亦頗多し、其最も多く連歌の功能を列べ立てし者は、蓋「花のまがき」(宗祇の述と稱すれども疑ふべき箇處多し)に記したる、九州安樂寺の別當善心に御夢想の告ありたりと云へる連歌の二十五德なるべし、其中最も面白きは、其災難除けとなる事なり、曰、

一所らずして神慮にかのふ、
一千句にて、雖を眼前に七里が外へ拂ひ、七區十德即生す、

其奇怪なる、一笑にだも値せざるが如しと雖も、こは單に良基、心敬、善心のみならず、當代一般の迷信なりき、されば、神社佛閣に所願の爲に、百韻千韻を興行するとは珍らしからぬ事なりき、彼の有名なる熊野千句は熊野神社法樂の爲にして、伊豫千句は大神宮の法樂なるのみならず、宗祇新菟玖波を撰ばんとして、先づ所禱百韻を吟じ、氏親は豆州三島神頭に出陣千句を作り、其他兼載は闘礫軒の追善に懷舊五十韻を吟し、宗長は覺阿法師が發菩提心往生安樂國の爲と稱して、名號百韻を作る等、連歌師が其畢生の力を盡したる名篇大作として今日に殘る者の多くは、所禱追善等の爲に吟じたる者たるを見れば、其如何に宗教的思想と混同したりしかを想見すべし、そは特に所謂連歌時代のみならず、守武が俳諧調の千句も立願に依つて成り、二萬堂の名も住吉の社頭に得られたり、加之夢想開きと稱する者、即ち夢中に神冥佛陀の授け玉ひし句を披露するの興行は、常に特殊なる儀式を以て擧行せられ、上、後

土御門、後柏原兩院の御夢想百韻、尼子晴久が夢想開き等より、下、德川の末世蕉門の末流に至る迄、歴々跡を絶たず、今日も猶繪馬堂の片陰に、初午の掛行燈に、怪しげなる發句川柳の影を認むるものは、かゝる迷信の名殘と云ふべし、蓋し彼の厄拂ひ的の迷信は、時と共に消滅せしかど、連歌の轉化を佛敎に附會するの說は、猶此處彼處の草庵に其名殘を止めて、俳諧の奥義は禪味の悟脫なりと、敎え玉ふ宗匠多しとかや、

そは兎も角も連歌は斯く結構なる有難き者となりしとすれば、五十年蜉蝣の命を賭して、此に熱心する者多きも亦怪むに足らざるなり、連歌の專門家は此に於てか益多きを加えつ、各畢生の力を擧げて此に盡瘁するに至りしかば、從て其詩想修辭上の工夫錬鍛の道を說く者亦多からすとせず、就中最趣ありと見ゆるは、梵灯庵が其弟子に誨えしの語也、

此道に醉はずしては我心より出來る連歌有る可らず、假令ば上戸の酒を三盃五盃飲みたらんが如し、口には味もや侍らん、心は更に酒なし、數十盃の後酒になりぬれば、一身は酒にて本心は遁去りぬ、連歌も數度面白き心に醉侍れば、興に乘たる心も唯醉の中なり、されば如何なる初心も分らず句を儲る事あるは醉る心なるべし、まして上手は醉の中に眞實の

秀逸を儲る也、若し一坐の中他念有れば本意の句なし、吾心を取靜て一心よくおさまり、人の息の口より突き出すが如く、氣を天地の間に散らして、必ず求る所なけれども、前句をたよりにして取向ふに、出來せずと云ふ事なし、(梵灯庵主返答書)

彼は滿腔盡く連歌たらざる可からずと稱す、而して所謂秀逸なる者は、此の如くにして自ら成る可しと稱す、彼の天來の妙音を傳ふべしと稱する者と、又何の異なる所ぞ、詩人の工夫此に至つて極まれりと云ふべし、當代の連歌師が連歌に對する工夫は、實に此の頂點に達せしなり、豈亦盛ならずや、

斯の如く夫れ盛也、故にそは能く室町文學の一半を風靡するを得たりと雖も、忽ち覇府の衰運と共に萎微し去つて、僅かに餘興として連歌界の一隅に屏息せし所の所謂俳諧をして、獨り江戸文學に雄視せしむるに至りし者は何ぞや、蓋、煩雜なる形式的の拘束と、狹隘なる歌人的詩想の墨守とが、中古の連歌をして自滅するに至らしめし也、

連歌道は、既に短歌と離れて獨立したりと云ふと雖も、そは唯連歌師が、獨立の事業となりて殿上の歌人と分離し、其連歌の長短句の連接法が、短歌の上下句の連接と

全く其趣を異にしたるを稱するのみにして、其詩想に至つては依然舊思想なりき、されば彼の心敬了俊輩のみならず、宗砌、宗祇、梵灯等と雖も、其詩想養成の爲に常に誦讀せし處は、曰源氏、曰伊勢、曰三代集、是のみ、當代甚稀に行はれし和漢、漢和(こは五言の漢詩の聯句と通常の連歌とを混じたる連歌なり尚後に至つて說くとあるべし)の爲に、稀に白氏文集、朗詠集等を繙く事もあるべし、彼等の詩想は單に此等の間に養はれたりとすれば、其平安朝の歌人的詩想の外に脫却するを能はざりし者、又怪むに足らざる也、加之彼等が初學者の手引草として著述したる所の、連珠合璧集、胸中抄、閨夜一燈、梵燈庵主袖下集等の如きものは、皆古歌物語等より、寄合、緣語等を拔萃して索引を付したるものなり、今其一例を擧ぐれば、合璧集に「天の原と」有る前句に對して付くべき語を列擧して、

富士の煙　なる神(源氏須磨)　くもり　ふたがる(後撰)

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出し月かも　仲丸

秋のよの月や小下まの天の原明がた近き沖の釣ふね　家隆

これ等の歌の中の詞を取て、其歌を取れりと明ゆる樣にすべし、

と記するが如し、唯是舊套なる歌人的思想を、三十一字に非ざる詩形に作りかゆるの道を用ゆるに外ならざる也、短歌と同樣の運命は既に眼前に豫期せられつゝ有るに非ずや、是其自滅の第一因なり、

斯道の專門家として、最も古く且つ尤も有名なる者は善阿なり、其弟子救濟は良基の師として最著しく、周阿、梵灯、心敬、宗砌、兼載、智緼等之に次で殆んと時を同うして出で、皆救濟良基の流派に屬すと雖も、各特殊の見識と、創意とを有せざる事能はず、良基沒してより、式目上の論議會毎に絕えずとは、既に心敬が長嘆せし處なり、心敬の晩年に連歌界に顯はれて、終に斯道を風靡せし者は宗祇也、彼は初め兼載に學び(崎人傳の說に據る)、後心敬に從ひ(玉勝間による)、而して最も宗砌を尊重したり、(肯柏の傳ふる處也)とは幾多の異說あるに拘らず稍信ずべき傳說なるが如しとすれば、彼も亦良基の一派の人なり、されど彼が幾多の創意は、又頗る應安の新式を變更したるが如く、其他是等有數の名家の外に、更に無數の群小は、各其門戶の見を持して、新式を變更し、追加する者日に漸く多く、法式の雜多混亂、殆んど統一する處なきの狀は、肯柏が所謂「追加條々幷近代用捨篇目等、依多其端、末學常迷之」と云ひ、露水が所謂「さま〳〵の後勘を添えられ、異本まちまちに別れ、混雜如何ともすべからず」と云

ふが如きに到りしかは、文龜年中に至つて、三條宗隆卿、宗祇の弟子肖柏と圖つて、新式今案を大成して略連歌界の通則となりしかど、其基が新式に加ふるに、享德の宗砌が追加を以して、更に今案を增補せし者なれば、其項目の煩多なる、例へば一座五句之物と云ふ一項にても、五百有餘の細目を有する也、是到底容易に記臆し得べくもあらず、加ふるに其法式は、元來概括的の法則に非ずして、一々事物の名稱を列擧して規定したる者なれば、年々歲々幾多の變化と增加とは免かるゝ能はさるものにして、連歌社會の人と雖も、宗匠、執筆の外は、是を暗んずる者は頗る稀なりけん曾毎に爭論絕ゆる時なく、彼の執筆は、常に式目の條項を示して、檢事の職を務め、宗匠は此が判事たるが如き形勢なりき、

かゝる形式上の煩雜なる拘束は、頗る詩想の發達を萎縮せしめしのみならず、又大に連歌流行の範圍を狹めたり、蓋其門外漢は、嘗て歌道を以て秘鑰の裡に有りと爲せしが如く、其困難なる煩雜なる法式に驚きて、終に企圖すべからずとなすに至りぬ、是其自滅の第二因なり、

中古調の連歌に次ぎて、流行の勢を占めし處の俳諧調の連歌は、幾多の變更と革新とを經て、終に以上の弊害を除去し去つて、德川文學に特種の異彩を放てり、而して之が流行の先を爲せし者は、守武と宗鑑とにして、終に文壇を風靡するを得たる者は松永貞德を以て初とす、守武と宗鑑とは共に享祿天文の間に出でたれば、時代を以てすれば中古後期に屬すと雖も、今便宜の爲に俳諧時代の初に於て是を論ぜんとす、

斯く所謂連歌は漸く萎微して、紹巴以後は殆んど全く其氣焰を失ひたりと雖も、猶嘉例或は儀式として、文壇の一隅に其痕を留めざりしにはあらず、紹巴以後、玄的、昌琢、玄仲、の輩相次で幽かなる餘光を留め、貞門の俳人にも稀に是を窺ふもの有しなど宛も曉天の星に似たり、さかして、昌琢の時即ち三代家光の寛永年中より、毎年正月御嘉例の御連歌と云ふ事初まり、神官等の中より御連歌師と稱する者撰定されて、二百餘年世襲的の事業となりぬ、其他京羽二重に依れは、毎年正月廿四日、北野松梅院に裏白の連歌あり、又紀州熊野神社にて、正月二日百韻連歌の興行するを例とせりと、嬉遊笑覽に見へたり、是を中古連歌の餘波となす、

後期の連歌は略以上を以て敘述し盡したりと信するが故に、今少しく筆を轉じて、

所謂發句、即連歌の第一句の變遷を論じて、後期の終に至つて、殆んど獨立の詩形と稱するを得べきに至りし順序を說かんとす、思ふに獨立の詩形として發句を論ずるは、既に連歌の一部分として發句を見る者に非るを以て、そは全然連歌史以外の問題たるが如しと雖も、所謂貞門、談林、正風等の發句は、俳諧調の連歌と全く混同して、俳諧と云ふ一名詞の下に包含せられ、甚きに至つては俳諧は即ち發句なりと誤解する者有るが如き、密接の關係に立つとせば、發句の爲に連歌史の一隅を割くも、必しも不當の事に非るべし、

中古の前期に於て、發句が既に文法上獨立の形躰を具有せしことは既に說くが如し、されど强て一句の裡に巧妙の致を咏ぜんとするに至りしは、稍後世の事也、當初は唯當時の眼前の光景を咏じて、時候の前後を違へず、文辭優美なれば足れりとせり、宗祇の吾妻問答に曰、

長月晦に、或人連歌を仕て、阿佛に發句をこひけるに、「けふははや秋の限になりにけり」としてつかはしければ、人々百韻して、翌日に又一座侍りけるに、阿佛に發句を所望しければ、「けふは又冬の初に成にけり」とかきて出して、其次に曰、歌は題を發句とし、連歌は發句を題目とせり、然はその時節を違へずあるべき事也と申されけるとかや、……道を守る數尤難有き事なるべし、

と、宗祇亦此發句に敬服したるが如きも、彼が理想の發句は少くも此に在らざる也、故に彼は尙語を繼て曰、

但又、當世かやうにのみ侍らんは如何有るべからん、

と說きて幾多の例を示しぬ、今其一二を擧げて、彼が理想の句を示すと共に、當代の發句の格調を示さんとす、

花にそへおぼろ月夜のけさの雲　宗砌
花さかり思へば似たる雲もなし　專順
名も知らぬ小草花咲く川邊かな　親當
きのふ見し花か鳥なく朝がすみ　心敬

其巧緻遙かに前期の上に在るを見るべし、ことに親當の句の如きは、川、邊、をかきね、と改めて、某俳人の作と誤り傳へらるゝ者なりとすれば、其如何に後世の所謂發句と接近し來りしかを見るに足らんか、發句が然く發達し來りし者は、發句の作者が常に一坐の名人なりしにも因るべしと雖も、そを一句として、獨立の發句として是非する者あるに至りし者、其主因なるべし、そは心敬が「さゞめごと」に、

古のほん句(フックチキの音を避けて、ホックなホンクと讀む事、當時の讀み癖なり、)ほさのみ風情な盡し沈思せしとは見えず、されど一かたを守るに非ず、此頃は卷頭ほん句とて、是かのみ世にもてあつかひ侍れば、ほれがましくなりて、云々

と云べるを見ても知るべし、斯く發句の鍛錬漸く進みて、十七字中に詩想を咏ずる事益習熟せしかば、連歌の目的に非ずして單に發句を咏ずる事は、自然の勢として始まりぬ、これ今日の所謂發句の起源なり、そは自然の勢として生じたる者にして、人間の創意に依つて作られたる者に非れば、其年代を確定する事能はずと雖も、要するに心敬宗祇等の間に起りしと云ふを得べきか、守武宗鑑の頃に至ては、既に發句のみを短冊に記して今日に殘る者多し、これ發句が全然獨立の詩として認められし事を證する者也、

此に於てか「切字の說」彌其勢を得たり、蓋發句を以て完全文章となすべしとなすの說は、既に八雲抄に其端を開きぬ、切字の說は此說を敷衍したる者也、發句が既に獨立の詩形なりとすれば、其完全文章ならざるべからざる事勿論にして、切字の說も亦從つて其必要を生じたる也、此說も當初は甚漠然たる者にして、假令ば梵灯が

當時、發句の切れたる切れざると申す不審あり、是もやすかるべき事にはあらず、さはさはと云ひ切りたるは、誰か耳にも聞て存細なし、侍公の發句に、

五月雨は峯の松風谷の水　あな尊と春日のみかく玉つしま

攝政殿(良基)の御發句にも常に此面影有しやらん、……此條如何候べきと尋申したりしに、(良基に問ひし也)、一二反にては猶分明ならず、四度も五度も吟ずれば、必ず吟聲の中に切れたるは聞ゆる也、たゞ口に水を含みて味を知れる如し、(梵灯庵主返答書)

と云ひしなど、桂園が「まらべ」と云ひしにも似て、殆んど不可言の妙致の如く論じぬ、されど宗祇の時代に及んでは、「切る〻」と云ふ考は頗る明白となりて、十八字の切字、三目切、四目切、大廻し、などの說をも生じぬ、從つて其切る〻と云ふ意味も亦幾分かの變化なき事能はず、彼の侍公の第一句の如きは、後世の說を以てすれば切れぬ句なりと云ふを得べし、紹巴に至つては更に綿密なる說を出して、假令ば「やに七ッの次第の事」「そよか三字の事」等の如き、口傳々授の類を加ふるに至りぬ、切字の說は俳人社會に於ても最も喋々せし所なれば、更に俳諧時代に於て說く所あるべし、

切字の說と共に、發句界の主要なる法則として、且つ幾多の疑問として、蕉門の末流に至る迄保存されし通則は、發句に無季を嫌ふ事、即ち單に戀又は雜の吟にして、季

節の語なき句を嫌ふ事是也、蕉門の高弟土芳の如きも亦頗る是を疑つて、「何故に四季のみとは定められけん」と云ひて戀雜なきを訝るが如く、去來は「七情萬景に止まる所發句あり」と說きて、稍悟りたるが如き觀あり、蕉門に無季を嫌ふの本意は、果して去來の云ふ所の如しとするも、別に歷史的の源因有つて存するに似たり、蓋發句が未だ獨立せざりし日に於て、既に連歌の發句は其時節を違ふ可からず、即ち其當時の季節に適したる有季の句たるを要すと定まりし事は、彼の阿佛が言に徵して も明かなり、下つて宗祇に至つては、懷を述ぶる者、戀を咏ずる者等固り尠からず、必しも眼前の天然を吟ずるに限られし者には非ざれども尙上代の習慣を存して、宗祇が白髮集にも、「發句は其時(季節)に相當すべし」と說くのみならず、尙其參考として四時十二ヶ月の景物を列擧せり、(こは歲時記のごとく、連歌の參考として列擧せられたるに非ず、單に發句に關して示したる也)俳句に無季を忌む者、蓋この遺風也、要するに十七字の詩形は、略後期の終に成つて遠く蕉翁梅翁が偉才を待てり、

附記

和漢漢和連歌

和漢漢和は共に漢詩の聯句と普通の連歌とを混合したるが如き者にして、其第一句が詩の句なるを漢和と云ひ、普通の發句なるを和漢と云ふ、元來連歌は聯句より轉化し來りたる者なりとすれば、連歌の智識と聯句の知識とは、容易に混和し得べき者なるが如しと雖も、其韻脚法の甚困難なる事と、漢句と和句との連接は、所謂木に竹を接ぎたるが如き觀あるを免かれざる事との爲に、其法式は文龜の和漢篇、明暦の漢和法式等に依つて盛に規定されたりと雖も、其實例は頗る其數に乏しと云ふべく、唯中古の後期の始、即室町の始めの頃に、僅かに五山の僧徒と連歌師との間に行はれしの外は、北野松梅院の連歌會と、德川時代の俳人との作數十篇を存するのみ、然く菽靡振はざりし者なるのみならず、其趣味亦頗る普通の連歌と異なる所あれば、普通連歌の潮流に對しては關係甚薄きを以て、今は只、其最流行せし中古後期の終に附記する事となしぬ、其連歌と稱する名稱は、是を連歌史以外に排斥する事を許さゞればなり、

枕草紙に既に類似の戲ある事は前に記したるが如くなれど、其百韻千句あるは良基前後に始まりしが如し、其法式は略普通の連歌と同じく、只其附け方は、前句が漢

句なるを以て、言語上の細かき附け方を取らず、多く意味の連接を重んじて、所謂長高躰たらん事を務め、頗る漢詩の高調と競はんとしたり、漢句は全く聯句と異なる所なく、韻脚の法も亦聯句に等しく、一卷は通韻なるを常とす、和漢差合と云ふ書に、「和漢には和に韻を踏む故に力有て候」と有りと聞けど、(横井時冬氏の和漢漢和考：愛知學藝雜誌)其和漢は或は漢和の誤にはあらざるか、漢和法式には判然韻字の選び方をも定め、且つ漢和にして和句に韻脚ある例も頗る多ければ、和漢のみ和句に韻ありとは云ひ難し、されど、和漢にも亦和句に韻脚を踏みたるが如きものなきに有らぬば、(和句の韻脚は、頗る複雜なる通韻の法と、奇怪なる譯字あれば、判然し難きもの多き也)或は和漢とは漢和和漢を合せ稱する者にや、蓋後者信に近きが如し、漢和連歌の通韻を定むるの法は、法式に依るに、唱句(漢句にして第一句なる者、即發句に相當する者)の中の平字にして、韻の字に非る者、(即ち其句中の韻脚に非る字也、聯句は通常五言なるを以て、韻脚を除きたる他の四字中の平字を一つ撰ぶ也)を撰び、其韻を以て入韻の字を定めて通韻を定むる也、而して其韻を和句に踏むの法は、其一句中の最後の語、(必しも名詞たるを要せず)を漢譯すれば、其韻に該當すべき樣に句作する也、こは北野光乘坊の秘書と稱する漢和連歌、韻字集解、露水が新式、及び實際の作例等より類推する所なれば、必しも異例なきを保せず、今一例を擧げて更に是を説明せん、

弘治千句第五　漢和　支韻　　策彦

感時(入韻字として撰ばれたる者)秋死鹿　　愚

かつ咲初る花の萩が枝(韻脚)　　金

客衣頻掃露　　理

時雨をしのく山につかれぬ(疲韻脚)　　宗養

暮かゝる雲間の月の影寒み　　仝

鳴つゝ鳥やれんかたなしる(知韻脚)　　支哉

靈人は春の夜ふかく打出でゝ　　江心

征鞍殘雪吹(韻脚)　　仁如

岸巾櫻下鄰　　紹巴

花よりひらく窓の山まゆ(眉韻脚)

この韻脚法は俳諧調の者には認め得ず、蓋時と共に消滅せし也、今更に和漢連歌の一片を示して比較に便ならしめん、

松はたてぬきは紅葉の錦哉　　瓦基
秋雨灑如絲　　空華
けさ見つる花は昔にちりなして　　府君
春遊跡易陳　　國師
秋の田のみつほの國も治まりて　　瓦基
晃旗拜紫宸　　大清

後者の如く、漢和各一句づゝ交ゝ相連ねたるものと、前者の如く雜然相連ねて、只漢和の句數を制限したる者との二種ありたれど、後者は常に和句を隔てゝ對句を作るの不都合あればにや、後には多く前者の格に從へり、更に俳諧時代の者の一例を示して、我が和漢漢和の章を終へんとす、

三日月日記　　芭蕉
破風口に日影やよはる夕すゞみ　　素堂
貧茶蠅避烟　　〃
合歡醒馬上　　蕉
かさなる小田の水落すなり　　〃
月代見金氣　　蕉
露繁添玉瀧　　堂
〃

蕉
〃
蕉翁が連歌をかたなしにしたるが如し、支那思想なる聯句は、終に歌人思想の連歌と調和すべくもあらず、まして元祿時代の時代語をも包有する所の連俳と、隋唐の詩語と調和せんと欲する亦難い哉、否殆んど望む可からざる所なるべし、

蕉
〃
嫐旭が物かきなぐる醉の中
嬾な左右に別るむら竹

素堂が狂詩めきたる漢句は、あたら蕉翁が連歌をかたなしにしたるが如し、支那思想なる聯句は、終に歌人思想の連歌と調和すべくもあらず、まして元祿時代の時代語をも包有する所の連俳と、隋唐の詩語と調和せんと欲する亦難い哉、否殆んど望む可からざる所なるべし、

六　俳諧調の連歌即俳諧の勃興

上代の連歌が如何に滑稽詼諧を尊んじて、八雲抄に所謂俳諧の趣を備へしか、而して其俳諧調は中古に至つて、如何に栗の本の名と與に衰微せしかは、既に是を說けり、而して此衰運は年とともに漸く甚しきを加へて、かの二條瓦基が古筑波には、僅々數員と雖も、亦俳諧の爲に其餘白を割愛せしに、宗祇が新筑波に至つては、全然俳諧を度外視して、一紙半葉をも是に與ふることを肯んせざりしなり、亦以て俳諧が如何に蔑視されしか、如何に衰微せしかを卜するに足らんか、

然く衰微し、然く蔑視されたりと雖も、そは全く湮滅し盡せしにはあらず、全く其生

命を失ひしにはあらす、そは尚ほ連歌師の餘興として、宛も前代の連歌が歌人者流の餘興なりしが如く、尠くとも唵々たる餘喘を持續せり、予が中古後期の連歌を叙するの條に、文章連歌五十韻の一片を擧げしは、讀者の記憶する處なるべし、そは實に中古後期に俳諧調の全く湮滅せざりしを證明する者也、且つ有名なる當代の連歌師兼載法師は、「心物に他念なしとて、長座には必ず俳諧の連歌を催ふせし」こと、守武千句の序にも見え、貞徳が久流留の跋にも古の俳諧を論じて「昔の連歌上手の衆の戯に、つきだにすれば如何やうなる俗態俗語をも云ひ捨てゝ、大笑ひせられしなり」と記せしを見ても、連歌師の餘興としては依然生存しつゝありしを知るべきなり、

されど、とにも角にも、然く衰微し、然く蔑視され、唯餘興としてのみ其存生と價値とを認められしは事實也、時は轉じぬ、勢は移りぬ、來るべき德川時代は、全く俳諧の世界とならんとす、而して是が先をなせし者は誰ぞ、曰荒木田守武、曰山崎宗鑑是なり、彼等は俳諧勃興の先登者なり、餘興としての俳諧に非ずして、獨立したる俳諧の存在を認めし者は、實に二人を以て嚆矢とす、予が題して俳諧の勃興と云ふ者は、主と

して此二人を論ぜんとする也、輪池叢書に曰

（上略）兼載宗鑑などが俳諧の付合を翫弄したるを云ふ也、然れども此頃宗鑑守武の二人は志を同うして其翫弄のものを我が本尊として其道を開きたれば、俳諧の事は何時となく此二人に歸する樣になりて、秀逸と思ふ句は連歌師其他の好士連も、便につけ彼の二人が許に送りたる樣に成行きたる者と思はる、

是眞に其眞相を得たるの言也、俳諧は彼等に於て初めて本尊たる事を得たり、先に二人徹つせば、眇たる一箇の松永貞德、何ぞ三百年全盛の俳諧を創始することを得んや、故に元祿の芭蕉は、此三人を幷稱して斯道の祖翁と稱しぬ、今余が、犬筑波と飛梅千句とを以て俳諧の勃興となさんとするも、必しも誇大の言に非るべし、

蓋守武と宗鑑とが、然く俳諧に熱中せし者は、彼の永正天文の交なりとすれば、是實に室町澆季の秋にして、東に早雲あり、西に義興あり、京師に三善細川の兩黨あり、將軍四方に流離して、戰鬪殆んど虛日なく、天下の亂麻此時より甚しき者なきに非ずや、よしや守武は、神風の伊勢の浦回に、獨り太平の夢を貪ぼりしとするも、足利義滿家臣、支那氏宗鑑、近く京師の西端山崎に住して、何ぞ眼前の阿修羅場を見ずして止むを得んや、彼等そも如何にして斯る滑稽文字を翫弄するの餘暇を得たる、俳諧な

る者、そも如何にして、斯る阿修羅場裡に、其勃興の氣運を得たる、

貞徳は其著御傘の序に、俳諧の流行を論して曰、

俳諧はおもしろき事ある時、興に乘じて云ひ出し、人をも欣ばしめ、我もたのしむ道なれば、治まれる世の聲とは是を云ふべき也、……紀貫之古今の部立に入れ……其後の集にはくるはにはあれども、みだりかはしき代には深くかくれて其沙汰なし、聖代を待得て、誰とどむるとなけれども京田舍の高きも賤しきも、老たるも若きも、此道といへば耳を聳て心を欣ばしむ云々、

俳諧が天下に流行するに至りし者は、蓋徳川氏太平の餘徳なるべし、平安朝に短歌と物語とあり、室町時代に連歌と謠曲とあり、江戸時代に小説と俳諧とあり、中世紀の暗黑時代を終りて文藝復興期あり、太平が文學流行の大原因たるは疑を容れず、と雖も、俳諧の流行を以て、單に國家の太平に歸する者は、餘りに信實にして、餘りに單純なり、吾人は徳川氏太平の民が、何故に殊に俳諧を撰びたるかを知らんことを、欲す、否吾人は江戸時代に於るそが流行の原因を推考する以前に、永正天文の交に於る其勃興の理由を知らざる可からず、永正天文は實に「みだりかはしき代」なりき、されど俳諧は決して「深くかくれ」ざりき、貞徳が俳諧論は更に此間の消息を傳へざる也、

楚辭に高丈の氣焰あり、晩唐の詩は獨得の異彩を放てり、國亡びて山河在り、榮枯盛衰一場の夢に似たるを感ずるの時、何人の腦裡か詩人的の感念なからんや、詩人必しも太平を待つて而して後に生るゝ者に非ず、然れども守武が飛梅千句と宗鑑が犬筑波とは、單純なる猾稽と詼諧とのみ、更に憂世慨時の悲調を見ざるのみならず、絶て嘲世黑俗の諷刺的眞意ありとも見えず、眞に貞徳が所謂「おもしろき事ある時興に乘じて曰ひ出し、人をも欣ばしめ、我も樂しむ」の俳諧に外ならずとすれば、漫に思美人、懷砂を以て比すべきに非ざるべし、吾人は更に他の理由を求めざる可からざる也、

思ふに社會的情況の下に、當時の俳諧勃興の源由を求むること、は總て徒勞なるべし、そは社會的必要と云はんよりは、寧ろ箇人的需要の下に生れたり、而して其俳諧は絶て、當時の社會的變動の影響を蒙らず、彼等は社界の人間として吟哦せずして、實に世捨人或は世外の人として吟哦せり、是頗る彼の歌人社會が、全く其生活せる社會を忘れて、花月の天地に逍遙せし者に似たり、

此に宗鑑が眞相を思ふに、彼は武士として實に一たび憂世の士なりしなるべし、一度は足利の衰勢を挽回せんことをも豫想せしならん、然れども彼が主君たりし義熙は幾もなくして死し、天下の事日に漸く非ならんとするに當つて、僅かに二十五歳なりし彼は、自ら瀾濤を回さんとするには餘りに小膽なりき、されば世間の群小に伍して、名利の街に奔走するには餘りに廉潔なりき、かくて彼は世捨人となりぬ、かくて彼は文筆を友とするの人となりぬ、かくて彼は俳諧師となりぬ、彼を驅つて世捨人となせし者は社會なりき、然れども俳諧師としての彼は既に世捨人なり、社會以外の彼也、社會は又彼の俳諧に影響するの力なきなり、されば彼は文筆場裡に不朽の名を垂れんとずるが如き野心ありしに非ず、人間の文學に或る物を與へんとするが如き熱情ありしにあらず、只其洒々落々たる、社會以外の彼自身を樂しましめんが爲に、其豐富なる詼諧的詩想の自由を得んが爲に、獨り文筆を弄せしのみ、かゝる目的に向つては、繁雜なる拘束を有し、さかも古言雅語を墨守する所の中古調の連歌は、頗る不適當なるを感じぬ、斯て彼は、其用語に於ても、其法式に於ても、其言語に於ても、最自由なる俳諧を撰びぬ、是彼の所謂俳諧なり、彼が辭世に曰「宗

鑑は何處へ、と人の問ふならばちよと用ありてあの世へと云へ」と、人生の最大問題と稱せらる生死の問題に對しても、彼は依然洒々落々たり、彼の思想は依然詼諧的なり、蓋當初の彼は滿腔の感慨を抑へて、特更に詼諧を粧ひし事あるべしと雖も、大成したる彼は全身總て是詼諧也、而して此全身の詼諧、即彼の俳諧也、三上高津二氏が日本文學史に、彼の小傳を記して、俳諧は斯る人物に依つて初められたり、以て其性質如何を卜すべしと云ひ玉ひぬ、梅翁と蕉翁との俳諧は必しも宗鑑の俳諧に非ずと雖も、犬筑波の俳諧は實に斯る意味の俳諧也、

例の長頭丸は其著御傘の序に、「犬なんどにたとふることを、紀貫之古今の部立に入玉ふべきか」と云ひて、宗鑑が犬筑波の犬といふ文字は謙遜の意なり、彼は宗祇の新筑波に俳諧なきを惜み、自らこれを補はんとせしが、其非才を恐れて、假に犬筑波と稱せしなり、俳諧の連歌は犬連歌なりとの稱には非ずと稱すれど、是蓋俳道を重んずるの餘、宗鑑の眞意を誤解せし者也、彼の傳記を讀み彼の爲人を知る者は、何人も彼が新筑波の缺漏を補はんとせしと云ふが如き、眞面目なる意味ありと云ふに左袒せざるべし、彼は明かに彼の俳諧を以て犬連歌なりと認めし也、予が言を疑ふ者

は乞ふ試みに犬筑波を飜せ、彼の、

佛の前で○○○○なかく
夜もすがら○○○○ぞ思ふ文珠尻、
内ばあがうて外はまつくろ
ちられども女○○○○物に似て、

の如き、後世の笠附け、柳たるにも有るまじき野卑猥雑を極めたる、眞に犬連歌と稱するに、適當なる者に非ずや、

而て守武の俳諧は如何、伊勢論語の著者たる彼は、俳諧に對しても頗る、眞面目なる意見を有せり、其の飛梅千句の序に曰、「俳諧とてみだりに人に笑はせんとばかりは如何、花實をそなへ風流にして、ちかも一句正しく、さて可笑しからんやうに、代々の好士の敎也」と云ひ、或は「本歌連歌に譬かはるべからず大事ならんか」と云ふが如き、稍妥當なる理想を有せしが如く、從つて其俳諧も犬筑波の如き野卑猥雑の跡を見ず、然れども吾人は、彼に於ても亦、當時の社會的紛亂の餘響を認むること能はず、彼も亦宛然世外の人なり、唯比較的優美なる彼の性質が、稍上品なる談諧を生みしのみ、而して彼が、所謂本歌連歌、即ち中古調の連歌を捨てゝ、俳諧調を取りしは、殆んど

宗鑑と其理由を同うせり、彼自ら云へるあり曰、

その上獨吟千句の立願ありければ、打紛れ又は成がなく過しけるも空おそろしく、いかがはせんの餘りに、御願を作るべきに、一ならは本歌、二ならば俳諧のあらましにて、あはれ二なれよと念しければ、二なりぬ、有難さ限りなく、大方千句は三日なれば、是は二日にも足らざらんに云々（守武千句の序）

と、彼は作り易きが故に俳諧を歎びぬ、本歌連歌の煩雑なる拘束を脱せんが爲に俳諧を撰びぬ、是實に宗鑑と其揆を同うする者なり、

人間最も憐むべき者、云はんと欲して云ふ能はさるより慘なるはなし、詩壇最も忌むべき者、煩雑なる形式上の拘束を以て、詩想の自由を束縛するより甚しきはなし、中古調の連歌が如何に其腐敗の絶頂に達せしかは、既に說く所の如し、人間は云はんと欲する所を盡し得べき、一種の詩形を有せざるべからず、守武と宗鑑とは、斯て一たび其腐敗せる過去の形式を破壞して、其無規律無法式の理に、滑稽洒落なる詩想の、無障無礙を樂しめり、是彼等の所謂俳諧也、是即ち俳諧勃興時代の所謂俳諧なり、

貞徳は何の見る所ありてか、古の俳諧は和漢の式目（明應の和漢法式を云ふ）により

て取扱ひたり」といへど、守武は明かに「心にまかせん」といひて、「春秋二句むすびたる所あるをも顧みず、唯「うすくこく打まぜて」、一卷の首尾變化にのみ着眼し、「さし合も時代によるべきにや」と云ひたるなど全然上代の法式を否定したるは疑もなき事實也、よしや彼は一種の法式を理想したりとするも、彼の俳諧として今日に殘る所の唯一卷の飛梅千句に於ては、吾人は何等の法式をも歸納する事能はざると共に、其和漢の法式に憑據せざりし事は明白なる事實也、宗鑑が唯一の俳書なる犬筑波は、彼の古筑波、新筑波等の例に慣ひて、僅かに前句と附句とのみを記すにすぎざれば、吾人は絶て一卷の首尾を窺ふ事能はずと雖も、所謂「無俳言句」「無正躰句」(こは貞門の條に説明すべし)をも忌まざりしより推測するも、特に和漢の法式に拘泥せし者とも覺えず、守武も宗鑑も、元來所謂本歌連歌の巧者なりしかば、其俳諧にもまゝ其法式の面影を認むることは勿論なれども、彼等が特に一定の法式を恪守せしとなすは、蓋彼等の眞意を誤想せし者なるべし、予は輪池叢書に「此頃の俳諧に式目と云ふ者は更になき事也」と有るに左袒せんとす、彼の周桂が、守武が俳諧の式目を問ひしに答へて「さる者は我こそ作らん」など戲れしも、亦此斷定を助くる者に似たり、

(因に云世に宗鑑が眞跡の歌連式目歌と云ふ者傳はれり、そは宗砌が應安の新式な六十七首の歌に作りし、所謂式目撰歌中の主要なる者十二首を拔萃したる者也、其眞僞未だ知るべからず、若し果して僞に非ずとするも、そは彼が本歌連歌修行中の心覺えにして、俳諧の爲に撰びたる者には非ざるべし、)

當代の法式は既に是を論じぬ、予は更に進んで、彼等が所謂俳諧の修辭法を研究せん、思ふに彼等の所謂俳諧とは、全く上代の連歌の如く、俳諧歌の如く、狂歌の如く、將又地口の如く輕口の如く、必ず「をかしき者」なるを要すとなせしは疑ふべからざる事實也、俳諧に於る斯る主義は、貞門に依つて一たび衰微せんとし、談林に於ては復活し而して蕉風に及んで終に全く破壞されたり、是俳道の變遷上最重要なる事實の一なり、そは項を逐ふて更に細説する處あるべし、

世或は、予が守武宗鑑の俳諧は可笑即ち「をかしき者」のみに出でずと斷言せし事を疑つて、彼等の俳句中、頗る古雅優美なる者あるを説く者あらん、是俳句と連歌との區別を知らざる者の言なり、宗鑑が「元日の見る者にせん富士の山」と云ふが如き、守武が「元日や神代の事も思はるゝ」と云ふが如き、唯其一句を取つて云はゞ、其優美なる、或は崇高なる、何人も否定すること能はざるなり、そは唯發句のみに非す、其連歌

中の平句も、一句の姿は必しも「をかしき者」のみに限れるに非ず、たとはゞ

足あらふ盥の水に月さして、(犬筑波)

そよやあちこちかけまはりけり、(飛梅千句)

の如き、一句の姿は必しも可笑の句なりと斷言し難き者あらん、されど試にこれ等の句の、前句を連ねて再讀せよ、彼等亦、予の言の誣ざるを首肯せん、

おふそれながら入れてこそ見れ

足あらふたらひの水に月さして、

轡虫ゆるす手綱やなかるらん

そよやあちこちかけまはりけり、

頗る眞面目なりし句が、唯「をかしき者」と化し去る處、是彼等が俳諧の「附け方」なり、連歌の價値と趣方とは、全くこの「附け方」の間に存する者なるを以て、予は敢て彼等の俳諧の連歌は、可笑の外に出でざる事を斷言せんとす、

彼等の俳諧は、果して「をかしき者」の外に出でずとするも、吾人は更に推究すべき問題を有す、曰、其「をかしき者」とは、果して修辭學者が、美麗と崇高と共に美の三大區分となすところの、可笑の總ての者を含有するの義なりや、否や予は今此に、飛梅千句の一節、及び犬筑波の連歌三四を取り出でゝ、讀者と共に此問題の解釋を試みん、

飛梅千句第三　何毛　守武

花よりも鼻にありける匂ひかな

月はおぼろにふくるゐのしゝ

春の夜の夢やさながら牛ならん

十三や酒をぱたちものこすらん

かすは五臓の養生のため

前は四つ後ろはひさつあくを見よ

なだのしほやの尺八のあな

犬筑波中の俳諧

(犬筑波は宗鑑の著にして、一も作者の名を記さゞれば、或は宗鑑一人の作の如く傳る者もあれど、實はさにあらず、「守武が飛梅千句の序より推測すれば、「雞のうつほになりて」、「入婿の夕に渡る」などは、雜戯の作にて、「山寺の入相の鐘を」の句は宗碩がなり、されば其他周桂宗牧守武などの句もいと多かるべし」と、輪池叢書に、見ゆたるは至當の見解なり、)

吹けかし風のふかであれかし

花見にといそぐな舟に帆をあげて、

おしやおもしる春の田樂
花を風ちりやたちりとふき立てゝ、
あつたら味柑くさらかしぬる
正月の茶の子にことなかきばかり、

馬に乘りたる人丸を見よ
ぼの〳〵と明石の浦は月げにて、
くちなしにきぱのあるこそ不思議なれ
菊の花さて耳はあらばや、
よぶかよはぬが心もとなさ
さりともと思ふ國の椀の音、

讀者は俳諧勃興といふ、盛なる聲の下に、此等の實例が意外に價値なき者なるに驚きしならん、然り吾人は如何に庇護せんとするも、吾人の問題に對して積極的に答ふる事能はざる也、要するに此勃興時代に於る俳諧は、百韻千句の長篇ありと云ふ事の外、唯上代連歌の復活のみ、其滑稽諧謔は彼の金葉散木時代の連歌と全く其趣を同うして、依然言語上の末技に過ぎざるなり、そは一の大なる理想をも見ず、一の深酷なる諷刺をも見ず、彼等は未だ思想上の滑稽、即ち人間の不權衡、人世の不調和

等に向つて其眼光を轉することを能はず、一に地口、輕口、謎々、等を、五七、七七の形式に入るゝを以て、彼等の能等終れりとなしぬ、語を換て云はば、彼の平安朝の短歌、中古調の連歌に於る、重要なる修辭法たりし、緣語と係語とが、頗る野卑なる語を以て顯はれたるが爲に、をかしく聞き爲さるゝのみ、其根本的思想は、中古調の連歌と甚しき徑庭を見ざる也、されば彼等が連歌界に與へたる者は、只繁雜なる法式の破却と、俗語の使用とのみ、唯是のみ、しかも亦以て貞門と談林と蕉風とを啓發するの基なりとすれば、是亦決して等閑に附すべからざる也、

守武宗鑑出でゝより、此種の連歌は頗る流行の勢を得て、貞德の頃には終に「京田舍の高きも賤しきも、老たるも若きも、此道といへは耳を聳てゝ心を欣ばしむ」るに至りしは、疑もなき事實なれど、德川以前は彼の元龜天正の鼎沸たる戰雲に遮ぎられて、吾人の目に觸るゝ者頗る稀なり、唯巴紹が「海の中にも武士は有りけり、釣にかゝりて上る兜がに」等の如きは、其一例として見ることを得べきか、

七　近古の連歌　前期

天文十八年荒木田守武死す、超えて四年山崎宗鑑逝きぬ、實に將軍義輝が丹州に奔りしの年なり、社會の歷史が足利時代を終りしの翌年、近古連歌の先登者、松永貞德生る、政柄再び織田氏を去つて豐臣氏に移り、終に家康が大手腕の中に統一さるゝに至るの間は、此寧馨兒が雌伏の時なり、詩神意あり、彼をして生て太平の世に遭遇せしむ、亂に倦むの天下は甘んじて、秀忠家光が守成的政畧に籠絡せられ、三百年の太平將に其緒に就かんとし、戰國殺伐の氣風漸く銷磨して、昌平文華の潮流沛然として來りぬ、短歌は既に死せり、中古調の連歌は既に其餘弊に堪ゑず、況や戰塵の間に狂奔して比較的無教育なる當時の士民は、何ぞ彼の錯雜なる法則と耳遠き古文學とを歡迎することを得んや、守武宗鑑は此に於てか意外にも夥多しき知己を得たり、彼の御傘に所謂「京田舍の尊きも賤しきも老たるも若きも此道と云へば耳を聳てゝ心を欣はしむ」とは、蓋し誇大の言には非ざりけん、貞德はそが幾多の古文學上の智識と、天賦の偉才とを以て、此流行の潮勢に乘じ、終に近古連歌の基礎を成しぬ、彼が周圍に集ひし者を貞門の俳人と稱す、寛永より承應に至る二十有餘年の俳壇は、一に彼等が獨舞臺なりき、下て西山宗因の徒が談林の異調を弄するに至つて、

俳風全く一變せんとせしが如しと雖も、尙西に立圃季吟あり東に未得玄札あり、依然貞德が格調を傳ふ、季吟が門に松尾芭蕉出づ、初め貞風を慕ひ、中頃談林を學び、終に獨創の俳風を起こして一派を立つ、是を蕉風となす、彼の崇拜者、流は曰く天平靡然として此に趨きぬと、然れども蕉翁既に死して、貞門の季吟尙健在なりき、享保天文の交尙貞山貞賀あり、貞門の俳風未だ全く沒したりと云ふ可らず、況んや談林の全盛時代は、芭蕉が所謂蕉風開基と恰も其時を同じふして、共に貞享元祿の交なるのみならず、其格調が西鶴來山等を經て、遠く安永天明の頃に至るまで、其祖述者を失はざりしを見れば、蕉風の勃興は決して談林の消滅を意味する者に非るを知るべし、之を要するに、近古の連歌界に先登の榮を擔ふ者は長頭丸が貞門なり、梅翁が談林は之に次で起りぬ、最後に顯はれたる挑青が蕉風は、頗る偉大なる勢力を有し、將に俳壇を一掃し去らんとする狀を呈しぬ、而して貞享元祿は實に此三派の競爭時代なりき、今寛永より元祿の末に至るの間を、假に近古の前期となし、以て三派の特色と異同とを評隲せんとす、而して最後の勝利者としての蕉風が如何に他の二派を同化して、所謂天明調の異彩となり、一變して文政天保の俗調となるに至りし

の變遷は我が後期の問題に屬す、

第二、貞門の俳諧

貞門の高弟野々口立圃かはなひ草の自序に曰、

歌はよくよむが難しと、古人の云ひ置かれたるよし、云ひ傳へ侍れど、我が身一つには、あしくも難からんと思ひ定め侍りぬ、連歌も同ト道となるべけれど、世のことさらにもてはやして道のちまたにても、知り人に行きあひぬれば、衣紋ひきつくろひ、肩ないからして、今日は連歌の月並にて、そこ〳〵へまかるなど人云ふを羨ましくて、道の途者に親しみより、伺ひ見侍れば、唐の大和の其事此事、掟の正しきに立入るべくもあらず、此に連歌のたゞ言を俳諧と云ひて、あながちにふる事の跡なも逐はず、今様のよしなしごとを口に任せて云ひ散らすあり、其妙なるところは輪篇が輪たるべけれど、云ひ易きに心ひかれて、予が爲には孟母の三遷にもまげて思ひなしぬ、

と、彼も亦中古連歌の煩雜なる拘束を脱して、自由なる俳諧調に遊ばんとする者なり、是特に立圃のみに非ず、當代の俳人者流は、盡くかゝる意志を以て斯道を弄びし者なるは、更に論究するの要なかるべし、そは予が俳諧勃興の條を讀みし讀者の容易に類推し得べき處なればなり、されば彼の犬筑波飛梅千句の無規律無法則は、即ちこれ彼等をして俳諧を欣ばしめし主因にして、應安の新式享德の追加は、即ち是

261183

彼等をして中古連歌を厭はしめし主因に非ずや、果して然らば貞德と立圃とは、何を苦んでか、彼等が弄びつゝある、其無規律無拘束の自由を奪つて、再び御傘と「はなひ草」の頗る煩雜なる法式の裡に投ぜんとしたる、此れ中古連歌が一たび覆りたる轍路に向つて進むものに非ずや、然り彼の比較的複雜なる、只應安の新式を少しく簡易にしたるに過ぎざる御傘と噓草は、實に覆轍を蹈む者たるを免かれざりき、然れどもミターとライムとが、韻文の美を助長する者なるを認むる者は、連歌の總て、の法式が、必しも詩想を抑壓する者に非ざるを認めざる可からず、從つて吾人は俳諧の法式に對して絶對的に反對すべきに非ざるなり、

東花坊支考、嘗て指合と去嫌とを論じて曰、「去嫌とは先は天象地形より草木鳥獸も器財食服も、目にたち耳に響く物は、見渡しに遠慮あるべければ、たとひ人の制せずとも、我と用捨は知る可きなり、指合とは露路の拍子なれば、手爾波のかさなりてあしからんは、俳諧ならでも我としるべし」と蓋し至言なり、指合も去嫌も、必竟一種の修辭法に外ならずとすれば、至人は求めずしておのつから其法式に適合するを得ん、必しも形式的に規定されたる法式を細くを要せざるなり、唯憐なる群小は此形

式的の法式に據るに非れば、一の連歌らしき者だも創作する能はざるを如何せん、芭蕉云へるあり曰、「切字を入るゝは句を切る爲なり、云々、未だ句の切れざるを知らざる作者の爲に、先達切字の數を定めらる、この定めたる字を入る時は、十に七八はおのづから切るゝなり云々」と、こは單に切字に關して說く處なりと雖も、又移して以て總ての形式的法式を評することを得ん、蓋し連歌の法式は、連歌をして變化に富ましめんが爲なり、未だ一卷の首尾、一面見渡しの變化の何たるを知らざる者の爲に、先達假に形式的法式を設くこの法式を墨守すれば十中八九は自ら變化に富むことを得るなり、貞門の法式は實に斯る必要に應じて生れたり、

加之、俳諧の法式は更に他の種の必要に迫られたり、讀者或は記憶するならん、連歌は其創造の當時より既に物を賭することの盛に行はれしを、此の賭拇的性質は歲月を經るも決して遺却されざれき、否そは猶ほ盛に持續されたり、賭するものは爭ふ者也、俳諧に於る形式的論諍は一の大なる原則あるに非ざれば、終に決定する能はざる也、貞德が御傘の自序に「さし合にまどふ事多くて、諍論絕えせねば、丸が門弟の爲に此一帖を著す」と、云ひしを見れば、後者却て其近因なりしが如し、

貞德が俳諧の式目は、鹿谷安常の爲に十首の式目歌を作りしに初まる、其年代明かならずと雖も、思ふに寛永の初年なりけん、歌は其著書、あぶらかすの尾末に記せり、其第一首に曰、

俳諧は式目ぞなきゆほかたは和漢の如くさりきらふべし

此彼が式目の大綱なり、其和漢の式目を取つて俳諧に適用する事を以て古人の遺法なりとなすとの、頗る疑ふべきは既に是を論じぬ、蓋其法式の價値を疑はざらしめんが爲に、特更に古人に托言せし者なるべし、

立圖其意を受けて嘘草を著し、次て貞德御傘を作る、(嬉遊笑覽の說による)此二者の間には大なる異同を見ず、唯後者が稍精密なるが爲に錯雜なるのみ、要するに唯應安の新式を基として、一卷中に唯一度より用ゆ可からずと規定せし者を、二度用ゆる事を許し、二なるを三とし、三を四とし、四を六とし、或は七句を隔てざれば云ふべからずと、定められし者を五句去とするの類に外ならず彼は此を以て「私の新法を作らず」と稱する遁辭を爲すと雖も、支考の徒は「一を二となすの道理、さら〳〵心得難し」と嘲りぬ、そはとにかくに、彼が新式は只古式の規定を寛にせしに過ぎずして、其條目の雜多にして錯雜なるは、依然舊態を存すとせば、亦未だ古式の流弊を脫却

せし者と云ふべからず、是予が覆轍たるを免かれずと云ふ所以也、

然れども其雜多にして錯雜なる事は、彼自身及び其門弟の利益なりき、そは恰も中古連歌の法式と均く、斯道の專門家に非れば容易に記憶すると能はざる也、熟錬なる點者と執筆とは斯くて俳筵に欠く可からざる者となりぬ、需要の集まる處は利益の集まる處也、彼等は俳人としての名譽と共に點者としての利益を得たり、殊に貞徳は俳諧花の本の稱號を賜ひ、貴權富豪の寵幸を得て頗る驕奢なる生活を成せし者の如し、嗜人談に彼が住居の狀を叙して曰、

幾年親王より、大佛の南地方、許多の地を賜はり、自ら果樹を植え、榜を出して柿園と名く、中に報恩藏あり、納るに妙經千部(子昂の筆)を以す、藏外に六歌仙の像を畫く、前に吟花廟あり、詩歌連俳の短冊を集む、直に蓋の丸屋に通ず、方域東西二十間、南北三十間、藩籬するに皆竹を以てす、……其貴權に幸せらるゝ亦翁の碩德なり、

亦以て想見すべきなり、利益の燒點は、終に爭討と猜疑とを免かるゝ能はざるか、重頼と立圃との確執、西武と貞室との反目、曰口論、曰破門、是實に常時の俳壇の流行物なりき、嗚呼利益は終に俳人を俗了しぬ、「座敷乞食」の名(連歌師及び俳諧師を稱する冷笑の語にして、巴紹の時より初まりぬ、事、歌林雜話に見ゆ)は其式目と共に中古連歌の遺傳物となりぬ、

新著聞集に曰、「山崎宗鑑法師は、云々、後に山崎の鄕に移り、常に油筒を鬻て世を渡るを業とし、朝げ夕げには、鳥目十錢づゝ旅籠に持行しとなり、室には藥罐一つより外は蓄る者なし」と、嘗て赤貧洗ふが如き、眞正の乞食坊主たりし俳人は、今や美衣美食の坐敷乞食となりぬ、社會的境遇が、前後相徑底すること何ぞ然く甚だしきや、彼は清貧に安んじて驕然自適せり、此は驕華を競ふて尙ほ權門に媚ぶ、彼は閑居自適の具として俳諧を弄び、此は自營の業として俳諧を修む、滑腔の滑稽口を衝て出し者は宗鑑が俳諧也、修業と熟錬とを經て初て成りし者は貞門の俳諧也、彼の俳諧は詩想の自然の果なり、此の俳諧は故意に創作されたる一種の詩形なり、故意に創作せんとする者は、其創作に先つて我が作らんとする者の性質を豫知せざる可からず、そは彼が思想の自然の果に非ざればなり、されば俳諧の定義は初めて貞門に至つて說かれたり、

貞門の俳諧は、其新創の法式に背違すべからざる者たるは今更に云ふを要せざるべし、貞徳は更に俳諧の根本的特質を說て曰、

貞德云、連歌にて五ヶ十ヶなどの賦物なれど、俳諧は即ち百韻ながら俳言にて、賦する連歌なれば、端作りなも俳諧の連歌とかくべきなり、(猪山の非)

と彼は俳諧を以て賦物の名なりとなしぬ、即ち通篇句ごとに俳言を用ひたる連歌なりとなしぬ、而して彼が所謂俳言とは俗語或は漢語等の、和歌或は中古連歌に用ゐられざりし言語の義なり、されば彼が所謂俳諧とは、唯連歌に用ひられたる言語上の區別の名にして、其内容即ち詩想に於る區別の名にはあらず、是れ守武宗鑑の俳諧が想のをかしきを以て主眼となせしと大に趣を異にする處也、俳言を用ゆるとは、必しも其想ををかしくする者は非ざればなり、喜多村信節も亦、此間の消息を傳へて曰、

宗鑑守武の頃はをかしく興ある事を專らとしたり、其後は(貞門を云ふ也)理屈になりぬ、附合も連歌の古躰にて、四ッ手附囃附取なし附などにありしを、西山宗因出て云々

と、蓋當を得たるに似たり、然く彼は中古連歌と俳諧との間に、思想下の區別を置かざりしを以てや、彼が定義に矛盾なき限りは、中古連歌と於る總ての法則を俳諧に應用せんとせり、彼が正躰なき句(一句に其理なしと云ふが如し)用付(前句に顯はれたる物の用を付けたる句にして、上の句下の句になること多し)同意(前句に泥む句即ち前句と付句と思想を同うする者也)等を禁ぜしが如きは、全然中古連歌の法則を墨守せんとする者にして、是亦守武宗鑑と大に見界を異にする所也、總て此等の見界の異同は貞德が著淀川(一名新增犬筑波集と云ふ、こは宗鑑の犬筑波を批評し、並せて三句の移りを敎えしの書なり)に明かなり、今其一端を拔萃して更に其異同を明示せん、

碁盤の上に春は來にけり

鶯のすごもりと云ふ作り物、

此句今ならば作り物といふ字入るべからず、これは同想になるなり、

女も具足きるとこそきけ

姫百合のとも草すりに花落ちて、

さしたる錢に秋風ぞふく

二三十四五十程虫なきて、

今は具足に草すり用付なり、錢に二三十亦用付なり、

上にかた〳〵 下にかた〳〵

三ヶ月の水にうつろふ影見えて、

前句、一句の正躰なし、作りものなり、此三日月の句俳言なし、

讀者若し此等を以て、予が中古連歌の條に示したる、文章連歌五十韻と對比し來らば、宛然一物なるが如き觀あるを見ん、而して又、其「野の宮」「天人」「咲く花」等の句は其俳言ある事の外は、一句の姿に於ても、前句に對する附け味に於ても、絶て中古連歌の格調と區別すべき特質なきことを認めん、是れ貞徳の連歌を守武宗鑑の連歌と區別すべき特色の主要なるものなり、

彼も亦、もとより「をかしきもの」を排斥せしにはあらず、否な彼は頗る宗鑑に私淑せしは事實なり、されど彼は又、中古連歌的或は和歌的詩想をも排斥せざりき、是彼の俳諧が「をかしきもの」に富むと同時に、眞面目なる觀念を咏ずるもの有る所以なり、されば池田是惟が初元結にも貞門の俳諧を論じて曰

蓋に今の世の俳諧を見るに品々にかはれり、或は云ふ俳諧とても歌の一躰なる者を、さのみ賤しき詞句つかひはすべからずとて、唯連歌の鹽くちたる樣にする人も有、又いや〳〵迚も俳諧は狂言なるものなとて、下劣卑賤の詞なのみ好て、假にも正風躰を嫌ふ人有之、共によろしからぬ也、伯夷柳下惠は聖の偏なるを、孔子は大成すといらし、玉はぬが如く、貞徳老人の俳諧はやさしきを躰といていかいしきを用とす、正風躰を根ざしとして狂言を花とす、されば花實備はりて一偏なる事なし、云々、

と、聖の偏と不偏は予が問題に非ず、唯「洩し玉はぬ」とは、守武宗鑑が俳諧のをかしみと、中古連歌のやさしさとを兼ね備へん、とせしの義なりとすれば、予は其所說に左袒せんとする也、されど、其所謂「やさしきを躰として、をかしきを用とす」とは、蓋し彼を稱揚せんとするの餘意と、「をかしさの美を輕んずるの陋習と相合して、本末輕重を轉倒せし者なり、彼が俳諧の大部分は依然守武宗鑑が俳諧なり、中古連歌的詩想は稀にこれに加味せられしに過ぎざる也、されば予は寧ろ「をかしきを躰とし、やさしきを用とす」と云はんと欲す、若し夫れ其根と云ひ花と云ひ、躰と云ひ用と云ふ、必しも實躰と變相と云ふが如き嚴格なる意味に非ず、して、唯二趣味を調和せりと云ふの義に外ならずとすれば、予は其觀察の妥當なるに服せんのみ、

上來畧、彼が俳諧、俳言、及び其二句の附味、三句の移りを研究したり、吾人は更に彼が法式を適用したる一卷の首尾が、如何なる變化を有せしかを討究せざるべからず、而して予は既に幾多、貞徳自身の連歌を列擧したるを以て、今は特に其高弟が作の一二を示さん、

寛文三上巳兩吟百韻の一節(兩吟集)

連歌は總て犬筑波中のものにして、批評は皆貞徳なり、彼は自家の定義を以て然く非難しつゝ、又宗鑑の爲め寛恕すべき者ありとなして曰、「其頃も、連歌師歴々にて、かやうの吟味も有るべきに此撰者左程の事、辨まへざる人には非るべし、予をしては かるに、此時は連歌の爲の狂言なれば、用付同意も指し合ひも、故意と詮索せず、一二句にてとよみになして遊びして見えたり」と、流石貞徳も、守武宗鑑が俳諧の何者なるかを知らざりしにはあらず、斯くて貞門の法式は總て彼の創意に出しこと益明白なるべし、

今更に其實例を取て、彼の所謂俳言が如何に用ひられしと其附け味は如何なりしかを研究せん、

堂の坊主の燈はするころ
玉づさをしきみの花に結ひそへて
あたこ參りに釉やひかまし、
口なしにきばのあるこそふしぎなれ
菊の花さて耳はあらばや
耳陽に醉て何いふひとりごと、

一寸二寸かゝむ冬の夜
番匠のかれの如くに身はひえて
さいはかしら者て行くさし、
さしたる錢に秋風ぞふく
二三十四五十ほどむしなきて
公家も色めき分る野の宮、

以上淀川(前二句は犬筑波の句にして第三句のみ貞徳の吟なり、點を附したるは、俳言を示す、以下倣之)

かすみの衣すそはぬれけり
天人や天下ろらし春の海、
吹けかし風のふかであれかし
咲く花を立かくす風のつらにくや、
いひたき樣に夕ぐれのそら
七夕のあふを見つけた人もなし、
秋の歌さびしき姉が得物にて、
つくし人こそ偽をいへ
暫文をかいて玉はれ文字の圓、

以上あぶらかす(前句は犬筑波、附句は貞徳)

讀者若し此等を以て、予が中古連歌の條に示したる、文章連歌五十韻と對比し來らば、宛然一物なるが如き觀あるを見ん、而して又、其「野の宮」「天人」「咲く花」等の句は其俳言ある事の外は、一句の姿に於ても、前句に對する附け味に於ても、絶て中古連歌の格調と區別すべき特質なきことを認めん、是れ貞徳の連歌を守武宗鑑の連歌と區別すべき特色の主要なるものなり、

彼も亦、もとより「をかしきもの」を排斥せしにはあらず、否な彼は頗る宗鑑に私淑せしは事實なり、されど彼は又、中古連歌的或は和歌的詩想をも排斥せざりき、是彼の俳諧が「をかしきもの」に富むと同時に、眞面目なる觀念を咏ずるもの有る所以なり、されば池田是惟が初元結にも貞門の俳諧を論じて曰

蓋に今の世の俳諧を見るに品々にかはれり、或は云ふ俳諧とても歌の一躰なる者なさのみ賤しき詞句つかひはすべからずとて、唯連歌の麤くちたる樣にする人も有、又いや〳〵迚も俳諧は狂言なるものなとて、下劣卑賤の詞なのみ好て、假にも正風躰を嫌ふ人有之、共によろしからぬ也、伯夷柳下惠は聖の偏なるか、孔子は大成すといらい玉はぬが如く、貞徳老人の俳諧はやさしいきな躰といいていきな用とす、正風躰を根ざしとして狂言な花とす、されば花實備はりて一偏なる事なし、云々、

と、聖の偏と不偏は予が問題に非ず、唯「洩し玉はぬ」とは、守武宗鑑が俳諧のをかしみと、中古連歌のやさしさとを兼ね備へんとせしの義なりとすれば、予は其所説に左袒せんとする也、されど、其所謂「やさしきを躰として、をかしきを用とす」とは、蓋し彼を稱揚せんとするの餘意と、「をかしさの美を輕んずるの陋習と相合して、本末輕重を轉倒せし者なり、彼が俳諧の大部分は依然守武宗鑑が俳諧なり、中古連歌的詩想は稀にこれに加味せられしに過ぎざる也、されば予は寧ろ「をかしきを躰とし、やさしきを用とす」と云はんと欲す、若し夫れ其根と云ひ花と云ひ、躰と云ひ用と云ふ、必しも實躰と變相と云ふが如き嚴格なる意味に非ず、して、唯二趣味を調和せりと云ふの義に外ならずとすれば、予は其觀察の妥當なるに服せんのみ、

上來畧、彼が俳諧、俳言、及び其二句の附味、三句の移りを研究したり、吾人は更に彼が法式を適用したる一卷の首尾が、如何なる變化を有せしかを討究せざるべからず、而して予は既に幾多、貞徳自身の連歌を列擧したるを以て、今は特に其高弟が作の一二を示さん、

寛文三上巳兩吟百韻の一節（兩吟集）

うすかすみ衣通姫か桃の色　季吟
柳のかみもしなだれし庭　友光
築垣に蜘の糸遊ふらめきて　仝
御門にあるゝ駒つなぐなり　季吟
よせてよりまけて降参仕り　仝
勸進元の相撲ゆゝしき　友光
桟敷は弓張月をながめにて　仝
賜もはれりとすだれまきけり　季吟

第三の轉の覺束なき、桟敷の句の用付めきたる、猿簑炭俵に比ぶべくもあらねど、流石に戀と無情との以外に、人事のをかしみを加へたれば、彼の「唯三四五句の中を、くり返し〳〵柱をばめぐるが如くにするなり、しからば三百句すき形本にひらきて、作者ばかりを嘗きかへはべれ」など嘲けられし、中古連歌に比して、遙かに變化に富むと云ふことを得べし、且つこゝに掲げたるは、神祇釋教戀無常述懐懐舊などの、最趣味ある品題を禁せられたる、表八句なれば、讀者は其變化が裏より二の折に、二の折より三の折名殘に、益々自在なることを思はざるべからず、而して此狹隘なる詰上が一卷の首尾を詳評するの餘地を與へざるは、予が最も遺憾とする處なり、予は

更に松江重頼が獨吟百韻中、最も縱横の逸才を洩し得べき第三の裏を示して、讀者が類想の資となす者は、其最も窮屈なる部分と自由なる部分とを對照して、一卷の首尾の微けき推測をだに得せしめんと欲するなり、

賦何田俳諧の一節　重頼

紅葉まで梅はなかしき色にして
此野は花の趣よ暮よ
神も人も嫁とはなき盃は
佛の道はむづかしきもの
いかにして目のおもひどなたさまし
且はずてゝも拾てぬ石うす
これかれの醫にあやかる人心
世の繁昌はおさまれるころ
御年貢も君々たれはゆるかせに
誰か難波の京に秋風
晴れ渡る海邊の月の景
燕脂金そ身は輕るげなる
のりものや花にもいそぐ肩の骨

宿生は公家のいとまあるらし

風景の付合は寄合に非ざれば、線の詞に偏し易きは自然の傾向なり、中古連歌の比較的單調なりしは、實に此に因する處多しと云ふべし。俳諧が頗る人事的方面に傾きしは蓋し其弊を破却するの一段梯にして、此一節の如き蓋し這般の一轉歩を窺ふに足る者の如し。

更に注意すべきは、其「紅葉まで」の句及び「飛雁金」の句に俳言無き事(嚴格なる意味に於て)是也そは梅の紅葉ををかしと云ひ、飛雁金を輕ろげと云ひし處、即ち其想は確かに俳諧的なるを失はずと雖も、句中に用ひられたる言語は蓋く、中古連歌及ひ和歌中に發見し得べき者たるは事實也、是貞德の所説と少しく其趣を異にするが如し、思ふに重頼は立圓と確執の餘、終に一たび貞德に破門されたりとすれば、其俳諧に對する見解は稍立脚地を異にせしには非ざるか。其「心の俳諧」と稱する語の、貞門に於ては初めて彼の著書に見えたる如き、更に此疑點を增さしむるに似たり。彼が毛吹草に詞俳諧にて心の連歌なる者を擧げて、

ちり敗て草花となる野梅かな
大雪に柳ならざる枝もなし

の如きは前者を「ちりしくや花に又さく」と改め、後者の初五を「雪にけさ」と改むれば、意味は變化せずして、連歌(中古連歌の義)となるべければ、詞の俳諧なれど心は連歌なりと論じたるは、詞の俳諧を却けて心の俳諧を重んずる者に似たり、果して然らば、彼は師翁が非難したる犬筑波中の無俳言句をも俳諧なりと認むることあるべく、而して師翁自身の「野の宮」「天人」「咲く花」等の句は、俳諧に非ずとして却くるなるべし、然れどもこは予が憶測に過ぎず、予が淺見と時代の遠隔とは終に此間の消息を判明ならしむる事能はず、されど彼が心の俳諧即ち想の上に俳諧を説きしは決して此に留まらざるなり、

指と有るに小櫛、蓋、舟を付るは連歌付なり、將棋、蜂、箱、細工、此等俳諧なり、打とあるは碁、碁、畑、は連歌、碁、双六、かるたあそびは俳諧、

と云ふが如き幾多の例は、毛吹草の一半を滿たせり、貞德も既に云ふが如く、をかしき者を排斥せんとせしには非ずとすれば、彼も亦心の俳諧を非難する者に非ず、唯彼は主として用語の上に於て俳諧を區別し、此は主として想の上に於て區別せんとせしは、蓋し事實なるが如し、芭蕉が嘗て連歌と俳諧とを區別して「春雨の柳は全

躰連歌なり、田螺とる鳥は全く俳諧なり」と云ひしが如きは頗る後者に近し、而して貞門の末輩、例せば初元結俳諧新式の著者等の如きは、全く二者の所説を混同したるが如し、

重頼はさらに一の卓見を有す、曰、

百韻連歌の時も、俳諧躰とて少々有之よし、然らば俳諧にも連歌躰あるべし、句なみ重く來たる時は連歌行きにてかろ〳〵と先へやるべし、危うき俳諧付よりはまさるものぞ、

と、此亦吾人が貞徳の所説中に發見せざるのみならず、彼が所謂百韻ながら俳言にて、賦す」と云ふ定義と相容れざるの説なり、且其連歌と云ひ俳諧と云ふ者の、單に俳言の有無のみを云ふものに非ざる事は、「行き樣」と云ひ「付け」と云ふにて明白なり、彼は此に於ても想の上の區別を意味しつゝあるなり、されど吾人は不幸にして、彼が連歌の僅小なる遺響の中に純然たる連歌附を發見する事能はず、唯蕉門の俳諧に至て初めて此見解が採用されたるが如き痕跡を認むるなり、

吾人は貞門の俳諧に就きて、尚叙すべく論ずべき所に乏しからず、例せば當代に於て初めて顯はれたる俳諧花の本の傳統如き、姿の花と正花の論の如き、季寄せに於る變化の如き、付句の法の分類の如き、誹俳の爭の如き、其他幾多の事項は、實に古俳人の熱心なる研究を集中せし處、吾人必しも冷々看過すべしと云ふに非ずと雖も、此雜多なる條項は、終に我が小史の納め得べき處に非ず、今は只其流風變遷の大要を叙して、既に短かゝらざる貞門連歌の研究を終らん、其主要なるものは、尚談林蕉門の條下は論及する處あるべし、

然れども此に、連歌の餘論として唯一の割愛すべからざる者あり、其發句これなり。乞ふ予をして最も短簡に、後世蕉門の末輩の爲に、然く轢蔑されたる、彼等が俳句を説かしめよ、

貞徳が發句に關する所説は、全く其俳諧全躰に對する見界と異なるところなく、俳言ある事を以て其根本的特質なりとなし、其想に至つては、必しも重頼が所謂心の俳諧ならざる可からずとは限らざりき、彼が區別的見界の常に言語上に在るが如く、彼が審美的見界も主として言語上の巧緻にあり、かくてかの新古今時代の短歌者流或は中古の連歌師の如く、「秀句は歌の材木俳諧の花也、秀句なくして俳諧せんは、棹なくして舟をやり、針なくして魚を釣るが如し」と稱する、偏狹なる修辭法は、貞

門の俳諧の通弊なりき、而して其所謂秀句即ち言語上の末技は、彼等が最も注意したる其第一句、即ち發句に於て最も著明なるを見る、

冬ごもり虫けらまでもあなかしこ　貞德
海棠がいやさやうにはなしの花　立圃
大上戸東にあるかにしさかな　四武
はら筋をよりてや笑ふいとざくら　季吟

此等は其最も得意とする處也、去來亦是を論じて曰

長頭凡以來年を經て一体久しく流行し、角樽やかたふけてのむ牛の年　花に水あげてさかせば天龍寺

と云ふまで吟ずつめぬれど、世人俳諧はかくの如き者とのみ心得て風を變ずる事をしらず、(蕉門俳諧語錄)

と論じて、宗因が一轉を稱揚し終に蕉門の不易流行に論及しぬ、貞門の發句中にも彼の貞室が「これは〳〵とばかり花のよしの山」の如き、重頼が「順禮の棒ばかり行く夏野かな」の如き、全然此境を脱出したる者無きに非ずと雖も、是れ寧ろ其例外のみ、其他、中古連歌に行はれたる切字の說、無季を嫌ふの說、の如きは彌盛に稱道せられ、

就中宗祇が十八字の切字は、貞德に至て二十二となり、驚水に至ては更に五十八となるに至りぬ、其煩雜なる作例等は總て新式、埋木、秘要書等に讓らん、而して後世の賦物即發句のみに賦物を取る事は(發句成りし後に賦物を撰ぶ者にして、全く懷紙の上の形式的のことのみ、尙稀に行れたり、そは一見貞德が俳諧は俳言を賦物とすと云ひしに矛盾するが如くなれど、彼も亦賦何々俳諧と記することをも許したることと增山の非に見ゆ、(秘要書に「貞德翁曰、俳諧にて賦物をとらず」とあるは蓋誤傳なるべし)而して其とり方は、略中古時代と趣を同ふすれど、中古は上下賦、一字露題、二字返音、及び稀に三字中略、四字上下略ありしのみなりしに、今は一字重轉(詩をまゝ矢をやゝの類)二字除篇(鰌を雪、松を公の類)除冠(灰を火の類)加冠(舞を蕣の類)等、幾多の寄怪なる賦物を初むるに至りぬ、而して彼の通篇の賦物は俳言と重複する爲か絶えて、其實例を見ず、蕉風談林に至りて初めて、戀の百韻釋教百韻等あり、

第三　檀林の俳諧

檀林と云はゞ讀者は直ちに佶倔難解の字あまり多き俳句を想起せん、而して貞門の俳諧が比較的穩和なるに比して、放縱なる檀林の俳諧は、蕉風の俳風を去ること

彌遠きを豫想せん、然りそも赤半面の眞理を有せざるにはあらず、然れども梅翁の俳諧は、必しも後世蕉風の末葉が稱道せしが如く、芭蕉の俳風と對角線的反對に立つ者にあらざる也、否蕉風は貞德に近きよりは寧ろ宗因に近し、芭蕉嘗て曰、

我等此道に出て百變百化す、然れどもその境眞草行の三を離れず、その三の中にも未一つなも盡さず、先德多かる中にも宗鑑あり宗因あり白炭の忠知あり、上に宗因ないくば我々の俳諧今以貞德老人の迹かれふるべし、宗因は此道の中興なり、

と。彼も亦俳諧の開基者として守武宗鑑と共に貞德を尊重せざりしにはあらず、されども其俳風を說くに當つては、貞德の餘涎を甜めんよりは寧ろ檀林の一轉歩を歎びぬ、思ふに彼は宗鑑宗因及び忠知(貞門の俳人にして一奇軸を出せし者なり)「白炭やゝかぬ昔の雪の枝」と云ふ句ありてより世人白炭の忠知と稱せしといへど、それは左程の名句とも見えず、思ふに其性行の脫俗なる、終には「霜月やあるはなき身の影法師」と云ふ一句を留めて、切腹せしなど大に蕉門の同情を惹きしものか)を以て俳諧の行脚を得せし者となすに似たり、彼の故意に奇意を衒ひ、佶倔を弄する者は、只檀林末葉の事にして、眞に梅翁の格調を得たる者に非ざるべし、

そも〳〵宗因の檀林は、貞門の後に出でたりと雖も、貞門より出でゝ一轉歩したる者には非ずして、直に中古連歌より脫化したる者なりと云ふことを得べく、或は守武宗鑑を祖述したる者なりと云ふことを得べし、蓋し彼は其初め俳諧師にはあらずして連歌師なりき、連歌師としての彼の技量は、其師昌琢の輩と伯仲するのみにして、未だ宗砌宗祇等に及ぶ能はざること遠しと雖も、其人麿神社法樂百韻、陸奥記、行に見へたる獨吟等頗る見るべき者なきに非ず、彼は此の素養を以て彼の俳諧を創めたり、故に彼は勿論連歌の舊形式をも墨守せず、貞德流の新形式にも介意せず、唯興に任せて云ひ放ちしと雖も、其縱横滑脫の間、自ら規矩準繩を存して、漫りに指合去嫌を等閑にせしにはあらず、只形式的法式の却て詩想を束縛する者あるを忌んで、一に自由なる變化の妙致に着眼せしに外ならず、而して這般の着眼と傾向とは頗る守武宗鑑の俳風と其趣を同うせり、彼も亦其一致をや認めけん、其弟子總本寺高政を祝して、「末しげれ守武流の總本寺」と發句して與へたる事、破邪顯正、さる類等の書に見えたり、されば宗因の檀林は必竟守武千句の再興に外ならざるか、否必しも然らざるものあり、其「をかしみ」を以て主眼とせし事と、其式目を立てざりしこととは、全く守武宗鑑と一致すれども、彼の所謂「をかしみ」は守武宗鑑の如く單に言

語上の滑稽に止まらずして、まゝ眞に想に於る可笑の趣味を提ゝ得たる者あるを見る、且つ彼の俳諧は句ごとに必ずをかしからんことを求めず、時に輕快なるやり句を挿みて彌通篇をして多姿ならしむることを求めしが如し、是檀林の俳諧が守武宗鑑に比して一籌を贏つ所以なり、

其所謂やり句とは西翁が獨吟(華落集)

けふは別してよき市の場
順風に宮島舟をのり出して
汐もみちたる十五夜の月
二千里の外から、雁や來る覽

終りの三句の如きものを云ふなり、そは貞門の所謂俳言はなきにあらねど、一句の姿及び前句との附け味に於て絶てをかしみを見ること能はず、只頗る優美なる海上の月夜を見るのみ、これ勃興時代の俳諧に絶てなき處なり、而して其想に於る可笑の趣味は讀者乞ふ次に示す處の一二の例に徵せよ、

「梅の花見に」の一節　四翁獨吟

在々所々もよき秋のころ
けふもなごり昨日も踊暮して　友雪
きくばかりなる月の夜念佛　由平
ばづかしや後生れがひを近隣　紫敬
狐すなどりに心いれつい　四鳥
一封の書狀に涙ついみこめ　由平
古郷の妻にやるかれはなし　本秋
南の田舍くたりの不仕合　紫敬
いのちからく涙の捨舟
落武者は嵐の花のごとくにて

「櫻千句」の一節

死んで名は土に埋むと花心　友雪
殿にひいくかれば出來もの　由平
鷲のひな引つゝいたいこ持　紫敬
もらひ羽織や雉のちよろけん　四鳥
野邊見れば やき直したる草の色　由平
藁屋をうつす霜のむら消え　本秋
……やはらのあてみ服ふ夜嵐　紫敬

勝相撲むりな岡に月落て
殿の威勢になびく小すゝき　　本秋
如昔

是等は檀林俳諧中の上乘なる者なり、蓋し宗因は其初め唯連歌の餘興として俳諧を弄びしに過ぎず、貞徳立圃等の如く、俳諧を以て一家を成さんと企てし者にあらず、「人俳諧の事を問へば、連歌をこそ專一とすれ俳諧は知らず、唯當坐の云捨てなれば出るまゝにと云はれしとぞ」と俳諧綾卷に見え、破邪顯正返答書にも「是程俳諧盛なれども何集と名付て一集の建立もなく、何の書とて一卷の物をも開板せず、多くの俳諧の發句も自ら書き留めも置かせられず云々」と見えたるなど、亦俳諧に對する眞意を忖度するに足るべし、其崇拜者例せば一時軒惟中の輩は是を以て林和清が孤山に隱れて獨り詩文を樂しむに比すれど、貞門の徒は「自身は唯嘸言一べんと思ひて大事にかけねば、法もなく式目もかまはず」と稱して、末代の初心に放埒を敎えし」ことを罵る、思ふに兩者共に一理なきにあらず、其俳諧を以て敢て世人に衒はんとせず獨り自家懷をやるの資となせしものは、必しも和清に比すべからざるに非ず、然れども其古法を破却して全然無法式無拘束を主張せしものは、彼の西鶴由平等をして自由に其詩想を發揮せしめしの利ありしとともに、彼の惟中の徒をして用附もてにをはも、指合も、去嫌も總て顧るに足らず（俳諧蒙求）と誤解せしめ、終に唯偏なる漢語と不調和なる字あまりの句を作らば、俳諧の能事終れりとなすの餘弊を生ずるに至りしは蔽ふ可からざるの事實也、（宗因は古法を破棄したるは事實なれども、全然如何なる指合去嫌をも等閑に附せしには非ず、西鶴の大矢數などにも指合見と云ふ役割あれば、著しき指合を禁せしは勿論なるべし、只貞門の如く煩雜なる形式的法則なかりしのみ、俳諧蒙求の如きはこれを曲解せし者なり）

一方に於て然く指合去嫌等と蔑視すると同時に、他方に於ては一日千句、大失數、三千句、十百韻等頗る流行の勢を占め、其巧拙よりは寧ろ句數を以て勝を制せんとするか如き傾向を生じてより、彼の放縱なりし者は彌放縱に、無規律なりし者は彌無規律に、容易に普通の句作りに改め得べき者にも思ひ出るまゝに、蠢漫なる字あまり俳偏なる字句を弄して顧ざるに至り、はては其放縱なることを以て檀林の特色なりと誤解し、字あまりと漢語とを以て斬新なりとなし、一種の奇怪なる俳風を成しぬ、此新俳風は實に驚くべき潮勢を以て浪華の俳壇を蹂躙し、終に京江戸をも風

廢しぬ、蓋し貞門の煩はしき式目に苦しみし者が、其自由にして新奇なるものに移りし也、

御傘、はなひ草を生命とし俳諧を以て生活の資となさし貞門の徒は、單に自己門派の故のみならず、又其生活の爲に利益の爲に檀林を攻擊せざるべからざるの必要を感じぬ、而して檀林の徒も亦其流行に勢に乘じて、斯道に衣食する者日に益々多きを加へしかば、兩派の衝突は早晩避く可からざる所なりき、時に高政が中庸姿山板せらる、彼は京師檀林派の白眉と稱せらるゝ者、今自ら俳諧の總本寺なりと稱し、京師の俳檀を一掃し去らんとす、貞門の徒が反抗の聲は貞德の孫弟隨流が破邪顯正として顯はれたり、序で其返答書檀林の俳人一時軒の手に依つて成り、頼政又序で出で、二ッ盃出で、源氏供養、あつかひ草、行司板、綾卷、猿鶴の類或は攻擊し、或は辯護し或は兩派を調和せんとし、或は兩者を比較高下せんとし、はては一時軒惟中が返答書の卷末に附記したる俳諧が更に新らしき辨難の燒點となりて、呶罵咆吼殆んど停止する所を知らず、要するに彼等は、誠意を以て自家の見解を主張せんとする者に非ずして、主として一箇の私利の爲に虛名の爲に喧囂する者なるを以て、名を攻擊に托して漫に學殖を衒ふ者、自派を辯護すと稱して同門を擠排せんとする者、其陋其醜殆んど通讀するに耐えず、其間比較的公平なる眼光を以て(少しく貞門に傾けども)、破邪顯正と其返答書とを比較判定せる綾卷に破邪顯正を曰く、

今の世上に其名高うして恐く肩をならふる人もなき宗因の一流遍れくひろごりて、古風の俳士は片角に目計り動かせて居るが、偏執の心をやすめ兼れて書たる書也、……其人々の俳諧と(貞門)宗因の俳諧さをならべて見よ、上手下手の別ち儘に知れん、

と、とは檀林の巧緻が遙かに貞門末派に右に在るを認むる者也、又曰く

彼書に(破邪顯正也)神道の道理を引き、歌連歌の事を引て、色々の事を書く、宗因夫れ程の事を知られましきや、然れども俳諧は只當座の戯れ、折に觸れての云ひ捨なれば、歌連歌の格は知りながら、臨さかうしらるゝ一流也、さらば掟を守ると云ふ作者の句共をきけ、皆ふるめかしくて、一ついおもしろからず、又邪俳の外道のとさみすれども、當風の作意、皆新らしくて興あり、

と、蓋し梅翁の意を得たるに近し、此等は檀林派最貪連を語として書かれたる者なれども、其正邪曲直等の議論を離れて、單に句作の巧拙を論ずれば、檀林を以て貞門の上に置かざる可からざることは、世人の等しく認めし所なるべく、全力を擧げて檀林を攻擊せし破邪顯正も

中庸の作者共、も中〳〵、初心の輩にはあらず、何も一ふし有て前句へ心をめぐらし、二重三重に意味をあまし、咱く所多し、

と許さいるを得ざりき、されば其攻擊の主要なる點は、連歌の式目を蔑視するを以て歌道を輕んじ和歌三神を潰すとなし、放縱なる連句のまゝ神佛の名を亂用せるを咎めて佛法神道の外道となし、はては國法の罪人、紅毛流などと嘲るのみ、縷々數千言深く注意するに足るもの鮮し、唯少しく文學上の攻擊として見るべき者は、畧次の一章に盡きたり、

新ら敷云ひなさんとする故、あまりに上手過ぎて一句埒あかず、前句へのみ理屈を仕かけて、一句の出來やうな成次第に仕立るなよしとする故に、異やうの狂言になれり、彼等が作意を以つて正直に前句を受、一句の道理を立るならば、おそらくの俳諧ならん、然るに當座の口たは言、四條河原の道外猿若も同下物也と道を輕く心得て、獅々踊の如く互に浮きうかされてめつた的を射る也、又中心の者思へるは、いか樣古風は珍らしかず、當物に有付合皆先立の付古したれば、付ても口まれ也、何とぞ古人の未だ知らず云ひ殘したる物あらんと深く堀り尋ねて、若異風のなま物に取付かば、隨分新らしからんと、五文字より發句に作る時、必ず實方古風にきこゆる故、無理に五文字を七もし八もしに云ひのべ、月の出と云ふなにゝるとして、留りなてになは止りになど仕立る時、一句の有樣異形異類にして、新事前代未聞也、扨も仕たりおもしろし、付合の格も此いきを以てせよや、人々とて、師匠不入の

我流を云ひちらす種に、其僻ならんだ流になる也、(破邪顯正)

立言頗る危激なりと雖も、檀林末輩の餘弊を指摘し得て其當を得たる者と云ふべし、されどそは末派のことにして梅翁の關する處にあらず、惟中が返答の書に云へるが如く、「高政が百韵を批言したればとて宗因もかやうの事とは斷ずべきに非ざるは勿論にして、其故意に奇怪なる句を作り爲すことは惟中も亦俳諧の亂逆なり」と云ひぬ、されど總て梅翁の門下に屬する者を檀林として論ずるの日は、又いかにかゝる餘弊ありしかを說かざるを得ざる也、而して惟中の如きは自ら其餘弊を認めつゝ尙其渦中のものたるを免かれざりき、

綾卷は宗因の俳風を論じて惟中に論及して曰、

又俳諧衆求とやらんに、八雲御抄に九ッの品を別かてり、その內狂言と云ふ一名あり、此狂言の字にて俳諧の大意を心ろ得べき也と書たり、寓言も寓言によるべし、狂言も狂言によるべし、初心是を心得そこなはゞ邪道へ引落さるべし、尤俳諧は狂言なり、されどもたとゝは大廳鬱が狂言もあり、ふんとく與五郎が狂言もあり、いづれも上手の名を得たり、その內に本間の狂言はならひの行儀をそむかず、立居もしほらしくて同下事を幾度見ても見ざめもせず、歌舞妓あやつりの狂言は、ならひの法もなく、云度まゝ仕度まゝにすれば、一度は面白き樣なれども二度とは見られぬもの也、宗因流の俳諧は上々の歌舞妓狂言といふべ

し、第一道戯方上手にて出るまゝの輕口也、次に一句の仕組本末そろはぬとを作り、本問のてにはにがゝはらす、式目も立てれば數ふべき事もなく、自ら無法放埒に成て、踊り拍子の俳諧、宗因大夫もとにて、その外役者どもあらゆるたはけを盡して人ををかしがらせん、笑はせんと計たくむなるべし、中にも一時軒(惟中)と云ふ役者はぎゝやうつよくて、俳諧蒙求を作りて、俳諧には眛付用付もかまはぬものゝやと式目も無いものゝやと無法放埒の本手を出す云々。

と、梅翁は盡し、「上々の歌舞妓」の名を甘受すべし、彼は單調なる形式的の驚流を學ばんよりは、寧ろ道化役者の滑稽なるものを希ひしに外ならざればなり、されば彼は幾多の嘲罵に對して唯冷然として微笑しぬ、連歌師某嘗て梅翁が異風の俳諧を敎ふるを責む、彼唯莞爾として答へて曰、我他意あるに非ず、唯衣食の需を備ふるが爲のみと、勿論そは彼が眞意に非ざるべし、しかも其言の洒々落々たる寔に擅林俳諧の祖翁たるに背かざるを見る、

梅翁は然く微笑するのみ、而して門下の徒は獨り囂々として貞門の徒と相罵る、而して其貞門を罵るや、常に唯彼等が詩才の梅翁に及はざるを罵り、其擅林を攻擊するは一に新風流行を妬む者なりと嘲るのみ、例せば俳諧頼政の如きは通篇謠曲に擬して、貞門を罵りたる者にして、

「先づ入道がふるくさい俳はいかやうなる句作りにて候ぞ、」「されはこそ笑止なる事を御尋れあれ、彼入道が狂句に、はいかいを都の弟子にきらはれて、ふるき道外と人はいふなり、人はいふなりとこそ、ゐしだにも申し候へば、わけは知らず候、

と云ふが如き調子にて、必竟無意味なる漫罵に過ぎず、前段屢々引證したる一時軒の返答書のみは稍辨難の眛を備へたりと雖も、そは主として自家の學殖を衒はんが爲に記したる者にして、或る書に「自己の句言を此便によせて書たる者也」(書名末詳、惟中が皮肉百韻を評したる書にして延寳八年の板本也)とあるは誣言にあらず、要するに貞門には和學の大家北村季吟翁あるあり、議論に於ては擅林は終に一籌を輸せざること能はず、然れども議論は終に流行の勢を回すの力なし、激烈なる筆戰も延寳八年の交に至つて其跡を絶ちて(中庸姿は延寳六年出板)、天下の俳壇は一に擅林の獨占に歸せんとせり、「當世のすたりもの、隱元の墨蹟、貞徳流の俳諧、鎌倉團右衛門」とは實に延寳の末年に於る社界の狀態なりき、

今更に一時軒が所謂皮肉の百韻の一部を示して、其奇異なる句作りの一端を示さん、(其新奇を弄するの極、殆んど常識を以て解すべからざるものあれば、今は當時辨

雖の群書を參考して少しく私解を添ゆ)

獨吟百韻の一節　　一時軒惟中

短冊の旗管城の固前は花
こは發句なり、筆を管城子といふに因みて椶林の俳壇を守護せんと云ふ下こゝろを管城の固めと句作し、短冊の旗を押し立てたりと云へり、前は花とは、明詠集に留春不用開城固、花落隨風鳥入雲とある趣を取りて、春を留むる固めにも云ひかけたる也、

戈を揮て留けり春
例の明詠の句と、俳壇守護の意とを承けたるのみ、

海老のかぶり釣にかゝれる餌もなし
留めけりといふを受けて行く春に見立て、はや餌もなき海に釣などする樣なり、海老のかぶりとは、海老はかぶりふりて釣にかゝらずといふに餌のかゝることを云ひかけたり、かゝる云ひ方は椶林の特色なり、

此江山をえしるまいなあ
萬事無心一釣竿、三公不換此江山など云ふ淺に思ひ寄せて釣箱江山に對して昂然たるの狀、

によつと出る一目の月影白し
前句の江山を圍碁のこゝに取り成し、一目の月影白し、と白石が一目さし出でたる盤上の躰にいひなしたり、其趣向の奇怪なるを見よ、

きせるくはへて霧をふくなり
月を白石に比したれば仙人の圍碁と見立てゝ、煙管に霧を吹くと付けたり、

……

餘の酔三日かけて以前より
評判の張翰爰ドやはく

嘉鱸聊以寄吾思と云ふ句を思ひ出でゝ、前句の餘を張翰の馳走と見たり、頼りに故事を弄するは、其博覽を驕らんとてなるべし、

お宿にか陶淵明で御座りまする
申兼たれども雲無心あり

雲無心出岫といふよりの酒落のみ、

手本一つ二つ三つ飛ぶむらからす
手本の無心と見立てたる也、群鴉は鳥倦飛知歸とある對句より取て無心の雲に對したる也、

惟中尚且つ斯の如し、其末葉に致つては彌々增々其極端に走せて、終には魚どもが天井張つたと思ふらん氷かな」と云ふが如き奇怪なる調を成しぬ、讀者此等を取つて前に示したる宗因西鶴等が(西鶴が大矢數などの句數を爭ひし者には、後者の如き傾向頗る著しく、且つ駄句も甚だ多し、今は其上乘なるものを指す也)俳諧に比せ

は、宗因の真意は果して如何なる邊にありしかを窺ふに足らんか、

彼の奇怪なるもの斬新なる者は、只新奇なるが爲に暫く人目を惹きしのみ、永遠なる流行は終に望むべくもあらず、天和二年梅翁死し、三年蕉翁が虚栗成り、翌貞享元年冬の日成る、これ所謂蕉風開基の年なり、嘗て檀林の流行が貞門の徒をして其舊調を改めざるを得ざらしめしが如く、焦風勃興の機運は幾多檀林の俳人をして蕉風化せざるを得ざらしめたり、されば西鶴の高弟才麿の如きは、全く彼の奇怪佶倔なる調子を脱したるのみならず、殆ど檀林としての特色をさへ遺却せんとしたり、例せば椎の葉に見えたる、

打むかふ膳に涙ぞこぼれける　空我
約束捨てい緑結ぶらん、　仙櫻
世のなかを知れや鏡の裏表　オ丸
萩やすゝきに名をかくし住　空我
感狀をひきさくばかりきり〳〵す　櫻
うらがへる身を月も照覽　丸
邪な宗旨の門を花に出て　我
火かと誤る三味のぼけ　櫻

朝燈子何に道はれていさがり聖　丸
女房に髪を結へと居直り　我
かづのなき針を恨のすて處　櫻
ふきぬのみぞのへだて勝なる　丸

の如き「約束捨てい」に「裏かへる」の輪廻めける「裏表」の裏と「うらかへる」のうらと同而にしてしかも僅かに二句去りなるなど、頗る破格に富むと雖も、其趣向と句作りより見れば、よしや猿簑炭俵と伍する能はざるも、冬の日春の日と比して大なる徑庭あるを見ず、

然く檀林の一部は漸く軟化して蕉風と一致せんとせし間に、他の一部は彌々放縱の極端に走せて、強力躰の名の下に、安永天明の交に至るまで其餘燼を止めつ、そは更に後期の條に於て説くことあるべし、

檀林の發句は略其連俳と類似して、をかしみを主とす、れども時に優美なるものなきにあらず、而して其發句のみに賦物を取ることあるは貞門の賦物の法と大差なし、今其一二の例を示せば、

やくわんやも心してきけほとゝぎす

お閑に御座れ夕陽いまだのこんの雪　仝　四鶴
惜みなれて棺の月や二度びくり(お何)　四　友雪
桐の水や悪性のもてばはら〳〵〳〵(島何)　友　四友
いろ〳〵よ花よ園子よ上戸よ下戸(葛何)　四　宗因
白つゆや無分別なるおきごころ　宗　四鶴
綱は花は見ぬ里もあり今日の月　四　來山
見返れば寒し日くれの山さくら　來

最後の三句の如きは芭蕉七部集中の物たることを得べき也、其放縱なる者に至つては切字の覺束なき、てにをはの亂れたるなど頗る多しと知るべし、

俳言を以て通篇の賦物なりとなすの説は、勿論檀林には行はれざりしかば、(されど實際は漢語俗語等の使用貞門よりも多きを以て、貞門の所謂「俳言無き句」は頗る尠なかりしと知るべし、)通篇に特別なる賦物を取ることも頗る流行したること貞門の條下に説くが如し、梅翁が超世の奇才は此種のものに於て尤も著明なるを見る

釋教の俳諧(百韻)の一節　宗因

ふるなの辨舌山からの聲
寂寞の谷の戸出る使者男
空の岩屋に事ぞありける
不可思議の何やらかやら豆腐やら
有爲轉變を見る市の棚
古日記たゞ過去帳の如くにて
修行の末は死山のやま越
思ひだす經かたびらに鞋がけ
先長老ばゝ先きへ御座れ

戀俳諧(百韻)の一節

いつも唯病ほうけたる物思ひ
起たり寢たり空ながめたり
むかし〳〵男ありけりあだ心
小むすめかさてよびし悔しさ
見返しの笠の内なもちらさ見て
南無あみだ佛戀はくせもの

此種の賦物は元來其意味に於て相類似せる言語を句ごとに賦するものなれば、異常の俳才あるに非れば單調に流れ易きは見易きの道理なり、余は此に至つて又百韻の首尾を掲ぐべき餘白なきを憾む、然れども此の連俳の一片が如何に自由なる

變化に富むかを見れば、亦以て類想の資となすに足らんか。

要するに梅翁西鶴來山等の逸才は或は蕉門の徒をも凌がんとす、しかも唯單に可笑の趣味に傾きて、世界更に大なる詩想あるを遺却したるの弊が終に其末輩をして輕薄なる道化に陷らしむるに至りしは蔽ふ可からざる事實也、土芳嘗て檀林を評して、「梅翁自由躰をなして世に弘むと雖も、詞のみかしこくて賊をしらず」と云ひし者、必しも臆言に非ざるなり、」

第四　蕉風の俳諧

落柿舍去來曰く、「古より名人多しと雖も始めて俳諧の神に入たる人は我が翁なり」と其弟子の言を以て師翁の德を證明する事能はざるは勿論なりと雖も、俳諧が終に芭蕉に至つて大成し、始めて詩歌に對して對等の地位を得たるは事實なりとすれば、去來の言必しも誇大を以て目すべきに非ず、中古時代は更にも云はず貞門檀林の俳諧と雖も尙おどけたる連歌として弄ばれて、未だ全く連歌より獨立して文壇に其地位を有せしにはあらず、貞翁も梅翁も元來連歌師なりき、彼等は連歌の技量を以て俳諧を弄ひぬ、芭蕉に至つては始めて全然古連歌を離れて俳諧を創めたり、彼をして俳諧に古人なしと絶叫せしもの寔に所以あるを見るなり、

其方式の如きも專ら一面見渡し、一卷の首尾の變化に着目し、必しも貞德流の形式的拘束を墨守せず、彼嘗て自ら云つて曰、

われ俳諧に於て法式を增減する事は概れふまゆる所ありと雖も、今日の俗人たる事を免かれすたゞ以後の諧生なして此道にやすく遊しはめん爲也

と、彼は徒らに窮屈なる形式的拘束の頗る俳諧に不利なるを認めて種々の點に於て異例を示せり、今其一二の例を擧ぐれは、脇のてには留めは「冬の日」にも（冬の朝日はあはれなりけり）「ひさこ」にも（うたれて蝶の夢はさめぬる）「雪丸げ」にも（安積の堤あやめ折すな）其他頗る多く、第三の字留りけり留り（冬の日）「俳諧集」行秋を庭に定むる石の色、升落し待ぬに月は出にけり）等も又多く歌仙の表の六句目に月盈れた（「續虛栗」「ひさこ」「俳諧集」）表に人名名所出たる（冬の日」「ひさご」「初懷紙」）、けり、なりの打越に出たる（「炭俵」等）、釋教神祇の打越しに出でたる（「續虛栗」等）等の異例一々枚擧に暇あらず、彼は極端なる無方式を主張せし者には非ずと雖も、必しも御傘に從ふべきものなりとは信ぜざりしなり、去來が所謂「法式を用ひて泥み玉はず」とは、蓋

し師翁の意を得たるに近かし、

東華坊支考は更に其意を敷衍して曰、

中古の俳諧は皆々連歌の式目を以て俗談平語をあつかはんとすれば、擧の爪がけて田舞とるにひとしく首行の遂なからんや、けにそれ俳諧の捉と云ふは、其事を取なし其詞を云ひかけて連歌の付心にかはらねば、がしこには方式の名を先にして、皆て法式の故を悟らす、宗匠は一字一首の指合をとがめんとす、こなたには法式の故を先にしてかつて法式の名に拘らす、まして文字を去嫌をとがめす、(古今抄)

と説て、更に貞門の式目が單に應安の新式を少しく簡易にしたるのみなるの無意義なるを笑ひ、更に百韻首尾の變化を説て曰、

四折のくはりは、初折は專らに地を先にしてかりにも奇首怪語を求めす、當句も附心もすなほなるべし、其意如何となれば表の七句目に月を好み、裏の八句目に月秋をことはり、十三句目を花の座とすれば、初折は月花の儀式多く、それを世法の禮節なるより、是を俳諧の地とは云へり、然れは二の折に至りては半地半節の模樣をくばりて初折の心をほどくべし、そこを禮節の和と云ひて世法を知るべきは此境なり、さて三折に至りてはこゝを俳諧の遊ひ所にして例の曲節を盡すべし、されど和を以て和すれとも禮を以て節すと云へる古人の捉を忘るべからす、知りて其節に泥まぬ人を優游自在の人と云ふなり、かくて名殘の一折は本より百韻の首尾なれば、其日其場の運速をはからひて、其句のよしあしに人を

屈せす、そこを一座の報と云ひて世法の時宜とはこの謂なり云々、

亦其主として一卷の變化に着眼したるを見るべし、彼が法式に對する詳細なる議論は今此に説き盡すこと能はず、彼が十論、爲辨抄、古今抄等は尙世上を流布すれば篤志人は就て見らるべし、且つ蕉門の俳諧を貞門の式目に對照して其異例を列擧したるの書は、蕉門格外辨(寛政二年板、著者未詳)あり、

芭蕉も亦一卷の變化を説て、歌仙は三十六句ともやり句なり」と云ひ、「たとへば歌仙は三十六歩なり、一歩も跡へ歸る心なし、行に從ひ心の改まるは假令ば先へ行く心なり」と云ひ、其角も亦「序破急をとりはづすべからず」と云ひ、或は逃句(一卷の附込たる所をゆるめん爲に、天象時節氣色等にて伸たる句をする義なりとは彼の定義なり、即ち複雜なる思想續きたる後輕く附くる句を云ふものにて、例へは芭蕉が「かもの、やしろはよき社なり」と云ふ句の如きものこれ也)も亦一卷を多姿ならしむるにて最も必用なりとなして、「一卷の繫り功者、の捌なりと云ふの類、皆首尾の變化を重んずる者に外ならず、然く形式的の拘束を離れて一卷の首尾に着限するの傾向は、既に梅翁の俳諧に於てあらはれたるは嘗て説くが如しと雖も、彼は其放縱なる俳

風に驅られて、寧ろ無法式の極端に走り、其大成の功を蕉風に遺せり、されば一卷の首尾が最も變化に富み、最も整頓したるの連歌は元祿の蕉風に至つて初め顯はれたりと云ふべく、蕉風の俳諧が全然俳壇を風靡し去りし者は、實に此に其主因を有すと云ふべし、予は今此に其實例を示すの必要を見ず、芭蕉が七部集は再板に再板を重ね、注解に注解を兼ねて、天下至る所に流布すれば、されど蕉風に於る一大特性、連歌界に與へたる一大進歩は僅かに以上の單簡なる叙述を以る匆々經過し去るに忍びず、乞ふ更に蕉門の高弟等が如何に此點に留意せしかを聞け、

芭蕉曰く、

一卷我より名殘まで一体ならんは見苦しかるべし（俳諧問答）

と、こは付け味に、種々の變化あるべしと云ふなり、輕ろ〳〵とのみ付け進むもよしと云ふべからず、さればとて句ごとに前句に深く思ひ入りて、重々しき趣向ある者のみなるもわしかるべし、要は變化を極むるに在り、嵐雪が

附句の變化は、大概れ料理の甘く淡く酸く辛きが如し、能くもよからずあしきもあしからず、時によろしきを變化と云ふ、（同）

と云へる、其角が

（前段）俳諧過ての點なれば其席に交りて、是は長是は丸（長、丸は句の點を云ふ也）珍重などゝ、點にあてゝ目利をせらるべきは本意にあるまじくや、打越のむつかしき所か、席のしぶりたる時に、よろしく付なしたらば無點の句なりとも是れ用なり云々、（全）

と云へる、去來が

附句は一句取放してさして見る所なき樣なる句も、前句によりては大なる手柄あり、（去來抄）

と云へる、支考が

名家の一卷を見て、始終の變化なかへり見す、此句はおかしからす、其句は味なしと云ふべけれど、一卷を連ねる事、あなかちに一句の上を論せず、（十論）

と云へるなど、かの汗牛充棟も啻ならざる蕉風の俳書より此種の辭を摘み來れば、蓋し際限もなかるべけれど、十書中の四傑が等しく、一卷の首尾を專一として、一句の巧拙を第二義としたるを見れば、又我が言の經ひざるを見るに足らんか、單に發句のみを取つて、駄句と罵り悪作と嘲る者は由來彼等が冷笑に値ひしつゝあるなり、古詩の第一句は必しも非凡の名句たるを要せざるに非ずや、

予を以て、蕉門の發句は盡く連歌の第一句なり、芭蕉時代に連歌を離れて獨立したる發句なしと斷定する者と誤想すること勿かれ、彼等も亦單に一句の短かき詩と

して俳句を弄せしことあるも事實也、されど若し其巧と拙とを論ぜんと欲すれば、須く先づ其俳諧の第一句として作られたる者なりや否やを考察するを要す、予が此に所謂發句とは俳諧の第一句を云ふなり、

發句は斯る意味に於て、一卷を離れて其巧拙を論ず可らず、況んや脇、第三、平句(ひらく)に於てをや、野坡が人のある脇句の可否を問ふに答えて、「脇ばかりにては主なき句なり」と云ひしも此意に外ならず、此種の議論は嘗て宗祇一輩に稱道されて中古連歌を大成し、梅翁蕉翁に稱道されて俳諧を大成しぬ、其結果として最も著しきは俳諧集の躰裁の變化なり、彼の筑波集を初めとして新筑波、竹林抄、老葉等より、犬筑波、あぶらかす、鷹筑波に至るまで、即ち貞門の末代(季吟)に至るまで行はれたる處の、單に前句と附句とのみを列擧する編纂法は、檀林蕉風の交に至つて全く其跡を絶てり、(檀林の集中にはありしやも知れねど未だ見當らず、蕉風には後に、雪門の蕉翁附合集などあれど、それは二句間の付け味を示す者にて、普通の俳諧集とは別なり)、首尾の變化に次ぎて最も注目すべきは、前句に對する附け方、即ち二句間の連接の法なり、蕉風は此に於ても一新機軸を出だして、古人がさばかり注意せざりし點に向つて其全力を注ぎぬ、芭蕉曰く「發句は昔より樣々にかはり侍れども、附句は三變なり、昔は付物を專らとす、中頃は心付を專らとす、今はうつり、ひいき、句ひ、位を以て付るをよしとす」と其所謂「今」とは蕉風自身の義なり、去來もまた「蕉門の附句は前句の情を引來るを嫌ふ、たゞ前句はいかなる場、是いかなる人と、その業其位を能くみさだめ、前句をつき放して付くべし」と云ひ、或は「附物を離れ情をひかず付んには、前句のうつり、にほひ、ひいきなくしては、何れの所にて付かんや」と云ひぬ、是其新機軸なり、

さらば彼の所謂うつり、ひいき、にほひとは何ぞや、芭蕉は更に之を解釋して曰く「附句は大木を倒す如し、鍔元に切こむ如し西瓜きるが如し、梨食ふ口つきの如し、付ところは海月夜に梅の匂へる心地こそめでたけれ」と、嗚呼吾人は彌〻益〻迷宮の奥に進むに似たり、げにや野坡が云ひけん「姿を云ふて、更に理をいはざる」蕉翁が解釋は、悟るべくして說く可らず、升六が「冬の日」の註に「不可說々々々、是を解する時は却て第二義に落つ」と云ひけんも思ひ出でられて、所詮不可說と云はんの最も適當なるを知ると雖も、說かざらんは予が小史の初志に非ず、今少しくその面影を窺はんか、

にほひと云ひ、ひいきと云ひ、うつりと云ひ、位と云ふ、必竟唯一の妙味を樣々に云ひかへたるに過ぎざるは勿論なれど、文字通りの解釋を大辭林に覓むるとも何にかせん。されば予は先づ「昔」と「中頃」との調なる「付物」と「心付」とを研究して、蕉風の特色と對比し、其特色を知るとともに、所謂三變の趣味も同時に判明たらしめて、前章の缺を補ふの一端となさんとす、

「付物」とは中古連歌以來の名稱にして前句にある事物を受けて句作するの義にして、緣語の如きも其一部なり、而して其所謂「昔」即ち犬筑波より貞門に至る連俳に於て、其實例を示さば、(貞門の條下に示したる例を用ゆ)

「犬筑波」
口なしに。きばのあるこそふしぎなれ　全
菊の花とて耳はあらばや　貞德
◎◎◎
◎陽◎に醉て何云ふひとりごと、
◎◎◎

「犬筑波」
かすみの衣すそはぬれけり　貞德
天人や天下るらし春の海、　季吟
うすかすみ衣透姫がもいの色　友光
柳のかみもしなたれし髮、

(もいは腿と桃との兩意にかけたる語にして、附句の柳は桃に對し、かみは腿に對す)

の如きは其著しき者也、讀者若し此の圈點を辿らば、其附句に於て如何に前句の事物が對すべき語を以て受けられ、或は說明する如き語を以て受けられたるかを認め得べく、且つ予が所謂上代の連歌と宛然一樣の趣あるを認め得べし、此の附け方は重頗に至つて衰微し、檀林に至つて更に衰微せり、

「心付け」とは中古連歌の時代に於ても、專ら緣語のみに依賴する歌人者流に反對して、稱道されし者にして、檀林俳諧の大部分はこれに屬する者なり、今其例を前章に取らば、

一封の書狀に涙つゝみこめ　宗因
故鄕の妻にやる金はなし、　仝
鬢のひなひきつるゝ太皷持　素敬
もらひ羽織や雉子のちよろけん　四鶴

の如き最も其趣味を解し易きものならん、前者は涙を封しこめたりとの句意を受けて封し込む金なしと云ひ、後者は鶯ひきつるゝ太皷持の句意そのまゝにちよろけんの貰ひ羽織と付けたり、即ち前句の事物を受けずして全躰の句意を受く、これ

「心付け」と稱する所以なり、

俳諧の連歌が「付物」より「心付け」に轉ぜしの進歩は、宛然本歌連歌の歴史を繰り返せし者たるに過ぎず、本歌連歌は更に轉歩すべき時期無くして蕉離不振の境に沈み、俳諧の連歌は蕉風の爲に更に一轉歩したり、これ則ち「ひゞきの付」なり、

そも〳〵「付物」が前句の事物に拘泥せるは今更に云ふとを用ひず、かの「心付」も亦前句の情をひき來るは勿論、かの二つの例について云はゞ、前者は「涙を封ず」と云ふ語にすがり後者は「太皷持と云ふ文字にすがれ」るは何人も認め得る處なり、而して蕉風は「前句をつき放し」「付物によらず情をひかず」と稱するとすれば、彼等は必竟付かざるを尊ぶものか、曰否「付かざれは付合にあらず」と去來も云ひぬ、そは勿論のことなるべし、然れども彼をしてことさらにこの自明の理をとかしめし者は、當時の俳林亦吾人と疑を同ふする者ありければなり、されば如何にしてつくることを勉むべきか、彼又曰く「つくるは疾なり」と嗚呼吾人は再び迷宮に誘はれぬ、

付くるは疾なりと云ひ、付かざるべからずと云ふ、彼等の付け方は必竟付くと付かざるとの間に存するか、果して然りとするも、これ亦新らしき不可説の妙諦のみ、吾人は更に他の方面より歸納せざる可からず、

彼の無數なる蕉門の俳言はまゝ「にほひ」「ひゞき」等の語に對して私解を試むるなきに非ずと雖も未だ嘗て見るに足るべき者を發見することを能はざること久し、近時偶々五升庵の秘庫を探つて、蝶夢叟が自筆の十論發蒙と稱する一書を得たり(こは支考が十論を去來抄以降の俳書と對照して、俳論の差同を示したる者なり、叟が跋に曰「其器に非ずしては一覽をも許すべからず、後の人、心ありてみだりに傳ふる事勿れ」と、讀者諸子若し其器にあらざれば、此先き數行は讀まで過ぎ玉へ、呵々)其變化論中支考が攀、走、響の三法を擧げたるの條に注して曰、

葛の松原を撰みて武江に遊しけるに、靈云(芭蕉也)攀(こは支考の用語例にては先に云ふものとはことなり)は超情也、走とは拍子也、響とは百韻百句ながら二句の間にこもれるを和歌には餘情と云ひ、俳諧ににほひといふ、これは附合の一法となせるは、附合の事不會得にやと云々、

と、予の淺學なる、未だ其何の書を引用せるものなるかを知らずと雖も、俳語錄以下夥多なる俳書の著者として有名なる蝶夢の自筆として、頗る信を置くに足る者なるべし、されば、そは獅子門一派の説には反對するとも、にほひは餘情なりと斷言す

るが却て蕉翁の眞意を得たる者ならんか、

にほひは果して餘情なりとするも、そは前句と付句の間に存すべき者にして、蕉風の所謂にほひを以て付句を作るとは、前句の餘情を付句に句作せよと云ふ義にはあらず、若し餘情を取つて直ちに句作するとせば、そはやがて「心付」なれば、そは又前句と付句とを合して一首の歌の如く見做す時に、其歌が餘情ある歌となるべき樣に句作すべしとの義にもあらず、俳諧の二句間に於る關係は一首の歌と見做し得べき程に密接なる者に非ざるのみならず、「二句の間にこもる」と云ふ定義にも適合せざれば、所詮其所謂餘情と和歌の餘情とは、よし其與ふる處の美感は相等しとするも、其形式は全然相一致せる者には非ざるべし、獨り思へらく「前句をつき放し」「前句にすがらず」、しかも「付かざるに非ず」とは、前句の餘意と、付句の餘意とが融合し調和すること、假令へば一音のパーシャル、トーンが、他の音のそれと融合して、一の調音を作るが如き者を稱するに非ざるが、而て彼の融合が美しきハーモニィを作るが如く、此の調和が所謂幽かなるにほひを作るに非ざるなきか、かくてそは付くると付かざるとの間に存する事を得べく、所謂餘情が二句の間に存することを得べきに非ずや、然れども十論發蒙にして信ずべくは、獅子庵支考も尙且つにほひを誤解せり、吾人何ぞ其幽玄なる妙味を誤了したりと確言するを得んや、

されど予が推測の基礎は單に前述に盡きたるにはあらず、限なき材料は七部集以下の俳諧に存せり、蓋蕉風開基てふ一紀元を開きたる「冬の日」の俳諧に於て最も有名なるは、芭蕉が霜月の句の脇なるべし、

霜月や鵜のつくづくならび居て　荷兮
冬の朝日のあはれなりけり　芭蕉

連躬が附合集評註にも「翁も此の冬の日に至りて、初て正風への眞的を得られけるにや、まさに此脇あり」といへり、其何故に正風(蕉風と云ふに同じ)の眞的なるかは、例の不可說を主張すれども、若し予の見解を以てすれば、これ彼の所謂にほひを得たる者也、試に見よ、其發句と附句との間には、何等の關係かある、冬の朝日のあはれは、水鳥にも霜月にも何の緣もゆかりもなからずや、されば俳を解ざせる者は直ちに無意味なりと云ふべしと雖も、古來の俳人が口を極めて此一句を稱揚する者必しも所以なきに非ず、若し試に沈思瞑目して、霜月のころ、さる汀など徘徊ひたらんに、

嘴を翼の下に收めなどしたるかうの烏の四五羽ばかりが、つく〳〵と並び居たらん、いとも長閑やかなる、靜かなる風姿を思ひ浮かべて、やがて又寒くもあらぬ冬の朝日のまと、とにかはれいふ語に盡きたらん樣を思はゝ、彼の姿と此の姿とは、終に泌然相融化して、彼の餘意とこれの餘意とは全然區劃すること能はざるに到る時、一種の限りなき餘韻は嫋々として盡くるところなかるべし、これ芭蕉の所謂にはひに非ざるなきか、そは勿論此句のみにあらず、蕉門の所謂名句なる者は盡くこの類なり、今予が會心のの句一二を擧ぐれば、

野坡　御頭へ菊もらはるゝめいわくさ
芭蕉　頭なかたう人にあはせぬ、
帷然　篠竹まゝる柴ないたゞく
芭蕉　雛があがるとやがてくれの月、
仝　月と花比良の高根を北にして
越人　雲雀さいつるこゝろの肌ぬき、
孤屋　行燈のひき出しさがすはした錢
其角　顔にものきてうたゝ寐の月、

以上の四句を以て、七部幾千句中最も卓越したる者なりと稱するにはあらず、唯讀過數次自ら記憶に存して忘るべからざる者の什一を示すのみ、而して其記憶に存して忘るべからざる所以のものは、實に二句間に於る無限の餘情に因するものにして、そは蕉門の連俳に於る一大特色なりとすれば、今これを以てにはひなりと斷ずるも、蓋し甚だ眞相に遠からざるを得んか、

此種の妙味は芭蕉以前の連歌にも稀に見るを得べきが如く、蕉風(元祿時代の)中にもまゝ古躰の附句なきにあらず、所謂「走り」と云ひ「拍子」と云ふ類の如きは、支考も亦梅翁流の一變躰なりと稱しぬ、而してそも亦首尾の變化を多姿ならしめんが爲に、儘彼等にも用ひられたり、

其他蕉風の付合を分類して論じたるもの、當時に在つても貞享式の三名と云ひ、東華式の八躰と云ひ、十論の四名、三法、七名、芭蕉の十七躰等あるのみならず、遠く古筑波時代よりこれを分類すること頗る行はれて、良基か時代的分類、宗砌宗祇の綿密なる性質上の分類、貞門に於ては重頼露水等の說明等ありてこれ等のみを論ずるも、本誌一二冊を滿たす事容易なるべきも、今は唯其大躰を說て細目に及ばず、

蕉風の蕉風たる所以は一に一卷の變化と、二句間のにはひとに存して檀林の如く

必しもをかしからんことを求めず、貞門の如く必しも俳言あることを求めず、其詩想は優美なるも、可笑なるも、崇高なるも、そは問ふ所にあらざるなり、されば土芳は「詩歌連俳ともに風雅なり、上三つの物にはあます所あり俳は至らずと云ふ所なし」とは云ひぬ、

然く蕉風はすべての詩美を容れて餘さゞらんことを務めたりと雖も、唯一却けざる可からざる者ありき、そは齋套なる陳腐なる歌人思想、或は古連歌的思想なりき、芭蕉が「春雨の柳は全躰連歌なり田螺とる烏は全く俳諧なり」と云ひ、去來が「和歌は制法多く題も名所も限あり、俳諧は分量なし、題として俳諧ならずと云ことなく、詞として俳諧に用ゐずと云ふことなし、たゞ和歌の見所と俳諧にならむ所に趣違ひあり」と云ひ、支考が「人が渡し舟まつとは連歌の心なり、渡し舟が人まつとは俳諧のかけりなり」と云ひし如きは必竟、古連歌的思想の反復を忌むに外ならず。(されども變化の爲にはやり句としてこれを用ゆることなきにしもあらず)、されば俳諧と云ふ語は風雅と同意義に用ゐられて、全く其本來の意義を失へり。(支考曰「をかしきは俳諧の名にして云々」名とは實にあらざるを云ふ也)これ芭蕉の俳諧に古人なき所以にして、詩歌と對して拮抗するを得るに至りし原由の主要なる者なり、

蕉風の俳人が、俳諧趣味の極致を說くや、常にさびと云ひ、しほりと云ひ、ほそみと云ふを見て、蕉風の俳諧は一に閑寂に傾き、華美なるもの、雄大なるもの、滑稽なるものを排斥せしが如く說くものあれど、恐くは其當を得たる者に非ざるべし彼の檀林一派のお道化たる者を反動として、冬の日よりひさごにひさごより猿簑に漸次閑寂の調に傾きしとは、一面の眞理を得たる者なりとするも、炭俵と別座敷に於る一轉歩は確かに、他の反動を認め得べしとすれば、其閑寂と華美とは由來彼等が所謂流行(變動と云ふが如し)にして、風雅即ち詩美其者が彼等の所謂不易(本躰と云ふが如し、不易流行は許六去來其角支考等が大議論の基にして、彼等の間に多少定義の差あれど、今其煩を厭ふて細說せず)に外ならざるべし、若し前代の反動、及び芭蕉の箇人的嗜好が稍閑寂を重んずるに至らしめたることを許すとするも、他の詩美を排斥せざりしことは實例に徵しても明なるべし、

此に今一の注意すべき點は、彼の「心に思ふことを云ふ」と稱する歌人社會の唯一の詩論、即ち單に箇人的抒情詩のみを主張せし弊風が頗る此に破壞されて、天然及び

人事を客觀的に詠ずる事の起こりし事これ也、蓋し連歌の性質として、自己の思想を吐露するよりは、寧ろ他人の句を受けて句作せざるべからざるか爲に、自ら客觀詩とならんとする傾向ありしことは、必しも蕉門に初まれるに非ずと雖も、古來の連歌師俳人の徒は、尙古習を墨守して、可成的主觀的思想を偶せんことを務めしの後を承けて、「造化にしたがい造化にかへれ」と云へる、芭蕉の自然主義は、終に彼の傾向を大成せり、是單に連歌のみならず、日本の詩歌に與へたる一大改革と稱するを得べし、然れども惜いかな此主義は門下兩三輩に理解せらるゝに止まつて、未だ大に天下を風靡すること能はざるのみならず、晋其角だに尙不思議なる誤解をなせり、彼嘗て師翁が「うきよの戀は皆小町なり」と云ふ句を評して曰「此句のさびやう作の外を放れて、しかも翁の衰病につかれし境界にかなへる所誠に疎ならず」と、彼は此の純客觀の詩を取つて、尙其間に主觀的思想を覓めんとす、惑ふ者に非ずして何ぞや、詩を以て主觀を吐露する方便となせる、古今以來の陋習は、然く牢として拔き難すべからざりき、吾人は唯元祿の蕉風が幾分か客觀詩の端緒を我國に開きしを欣ぶと云はんのみ、

今これらの總ての實例は七部集、ことに其猿簑と炭俵との連俳に讓り、全く蕉風俳諧の行き方を解せざる讀者の爲に、最も信じ得べき註解の一二を擧げて類想の資となさん、

日の春をさすがに鶴のあゆみかな　其角

元朝の日のはなやかにさし出てゝ、長閑に幽玄なるけしきを、鶴の歩みにかけて云ひつられ侍る、祝言々外にあらはる、流石にと云ふ手爾波惑多し、

みきりに高き去年の桐の實　文鱗

貞德老人云、脇四道ありと立られ侍れども、當時は古くなりて景氣をいひそへたるをよろしとす、梧桐遠く立、しかも木枯のまゝにして枯たる實の梢に殘たるけしき、言葉こまやかにして、桐の實と云ふは、桐の木さいはんも同しことながら、元朝に梢は冬めきて、木枯れの其まゝなれども、ほのかにかすみ朝日匂ひ出でうるはしく見え侍る体なるべし、但桐の實と附たる新らしみ、俳諧の本意かゝる所に侍る、

霽村が柳見に行く棹さして　杉風

第三の体長高く風流に句を作り侍る、發句景と少しかはりめあり、柳見に行とあればまだ景に不對也、霽村は畱の名筆也、柳を賞へき時節、其柳を見て畱んと、自から棹さして出たる狂者の体珍重也、桐の立木詠やう奇特に侍る、附樣大切也（第三に人名出たり、貞門にては許さゞる事なり）

酒の蜆に入あひの月

四句目なれば輕し、其道の樣餘酒屋と云ふもの能く出し侍る、蜆は暖簾など云はん爲也、

尤夕の景色あるべし、

秋の山手東の弓の鳥賣らん　芳里

狩の鳥を得て市に持出てゝ賣る体さもあるべし、酒屋にたゞりたる珍重の付樣なり、手東の弓はみしか弓也、秋季を持たる鳥の名は多くあれともいはずして、秋の山と大やうと置たる五文字大切也、見る人翫味すべし、　（芭蕉評註、初懷紙）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

年忘れ盃に桃の花かゝむ

膳にのせたる琵琶の水がらし

背の月よく寢る人に宿かして

發句は年忘の佳興に曲水の宴の學びせむと誘れたる也、脇は其座に平家などかたり出たるさま也、第三は轉下てしづかなる場所とし、主はひとり月に對して琵琶かきならしゐるに、其夜は風流のえせ人なさゞめて、奥に樂させたるが、その琵琶をきくこともせぬ樣にて、肝高〳〵と寢入りたるしれものゝ姿也、　（石兮註解、芭蕉翁附合集評註）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

狸をおどすしの張の弓

まいら戸に蕪遊かゝる暮の月

四句目はきはめて寂しき所と見て、まいら戸に蕪遊ひかゝりて、人も住まずなりたる古屋敷のさま、物すごき憑言外に有、　（全上）

これ等は、二句間の趣味を悟らしめんとするよりは、寧ろ作者がかゝる句を作り出しゝ工夫の徑路を說いて、俳諧を學ぶものゝ手引草とせんとしたる者なるが爲に、かの幽微なる餘韻をさも明白なる者なるが如く說いて、所謂第二義に落ちたる者なることは勿論なり、讀者乞ふ俳諧の趣味は此に說き盡したりと誤解する勿れ、とは唯彼の趣味を覗ふべき階梯に過ぎず、

此種の註釋が彌出てゝ彌精密を極むるとともに、かの幽玄なりしにほひは、「執中の法」として說かれ、終に後世の所謂蕉風の俳諧となりぬ、芭蕉死し、元祿古となつて、蕉風は更に一變せんとす、

元祿時代の蕉風の俳諧の格調は、畧其大躰を說明し了りぬ、例によつて其發句を說くに先つて、少しくそが流行の範圍を說かん、

新年のふくべに五升の米あるを以て足れりとなせし一寒措大芭蕉庵桃青が、三月の糧をも包まずして全國を周遊し、足跡殆んど八道に偏ねきを得たる唯一の事實

は、如何に其俳諧が至る所に弄ばれしかを見るに足るべく、其流行の範圍は、決して床屋の親方と商家の手代に限らざりしを推測するに足るべく、其弟子の有名なる者の中にも武士學者大名さへなきにあらずとすれば其俳諧は單に無智卑賤なる社會のみに行はれしにはあらざるを知るべし、されど所謂殿上の歌人社會は俳諧を見ると栗の本を見るよりは酷なりしは勿論にして、一般の學者社會即ち儒者一派は「俳諧は敗家の具なり」とさへ罵りぬ、而して俳人自身も又必しも儒者歌人社會をも風靡せんとは企てざりき、支考曰、

俳諧といふ者は中品以下に風雅なひろめんと、中品以下の言行を以て中品以下の人を導かんに何かは學び難けん、

と、これ彼等の豫期せし處にして、其結果も亦其豫期の如く、多く中以下の社會に行はれ、商家、武家の隱居、遁世者流等は其流行の中心なりき、

元祿時代、否寧ろ明治以前には、連俳を知らざる俳人はなかりき、されば俳諧の流行とは點取發句流行の義に非ずして、俳諧の連歌(勿論點取者流多し)流行を云ふなり、然く發句は必然に俳諧に伴ふものなりきと雖も、發句を獨立せる十七言の詩形として弄ぶことを、貞門檀林を經て益々進歩し、此に至つては發句、俳諧(俳諧の連歌の義なり)單に俳諧と云ひて發句のみを意味することは決してなし)と區別して論ずることと普通の事となりぬ、されば十七字の短詩は元祿時代に至つて初めて大成せり、と云ふも誣言に非ざるべし、當時の俳句は其俳諧と同じく、頗る多姿多樣にして、寂しきもの、お道化たるもの、華やかなるもの、強きもの等、一々枚擧すべからず、要するに檀林の發句が主として可笑の趣味に偏せしに反して優美、崇高の調を加味せし者と知るべし、これ等の變化の詳細は我が小史の業に非ざるのみならず、近來俳諧(實は俳句なり)勃興の聲と共に、我が文壇これを論評するものに乏しからざれば、そは盡く他日に讓つて、單に蕉風に於る發句と附句との區別を述べてこの章を終へん、蓋しそは蕉風に至つて、初めて明かに確定せる俳句の根本主義なれば也、

中古以降切れ字を以て發句を附句より區別するの特徴となせしことは既に說くが如し、而して彼の形式的の切れ字の法は檀林に依つて破壞せられ蕉風に至つて初めて說明されたり、

芭蕉曰、

切字なくては發句の姿にあらず付句の躰也、切字を加へても附句の姿ある句あり、まことに切るゝ句あり、其分別切字に第一也、其位は自然と知らされば知りがたし、切字を入るゝは句を切る爲なり、切れたる句を字を以て切るにも及ばず、未た切れざるを知らさる作者の爲、先達切字の數を定めらる、この定めたる字を入る時は十に七八は自ら切るゝ他、殘り二三は之を入れて切れざる句、又入ずして切る句あり、

されば眞に切れたる者にして發句と稱するを得べく、彼の形式的の切字の有無のみにては、未だ發句と附句とを區別することと能はざる也、而して其所謂「切るゝ」とは、芭蕉は自覺せざれば知るべからずと云ひ、土芳は「行て歸るの心なり」と云ひ、支考は「彼と是と差別の義なり」と云ひぬ、(元來切字の法はさる幽玄なる意味を以て作られしに非ずして、單に句(フレーズ)に非ずして文章(センテンス)たらしめんが爲の法則に外ならざりしに、蕉風に至ては大に意義を改めたるなり、)今簡單なる語を以て、充分に蕉風の所謂「切るゝ」即ち發句となると云ふ義を說明し盡すとは頗る困難なるべきも、假にこれが定義を下さば、切るゝとは「詩想」と「語」とが「一句中に完備したる」の義なりとも云はんか、今更に一二の區別論を擧げて、予が說明の缺けたるを補はん、

其角曰發句と付句との差別に極めて物數、奇、あるべし、「鼻紙を鼻につかふ女かな」とは孟ほしかぬると云ふ句に付句なり、もと付合の道具なるをめづらしと思へるは未練なるべし、

(俳語錄)

土芳曰發句は行て歸る心の味なり、たとへば「山里は萬歳遲し梅の花」と云ふ類なり、山里は萬歳遲しと云放して、梅の咲りと云ふ心の如くに行て歸るの心發句なり、萬歳遲しばかりは平句(發句、脇、第三、擧句等に非ざる句の義なれど、此には唯附句と云ふが如く用ゐたり)の位なり、(全)

支考が古今抄東花式にも、發句と平句と第三の別を示して曰、

辛崎の松は花より朧にて　(發句)
辛崎の松は春の夜朧にて　(第三)
辛崎の松を春の夜見渡して　(平句)

其多くは禪語的の解釋にして、人をして彼等自己が果して充分理解せりしや否やをも疑はしむるばかりなるが中に、これ等はやゝ取とめある說明なり、されど芭蕉の辛崎の發句は元來雜物にして、彌切れたりや、發句と云ひ得べきやは頗る疑ふべく、支考が論も附會に近し、ましてや其角が雜談集に此「にて」は「かな」に通ふ「にて」なるが故に切れたりなど云ふは、勿論取るべくもあらず、要するに一句の姿とゝのひたるを切れたりと云ふの義に外ならざるべく、そは文法上の意義なるよりは、寧ろ修

辭上の術語と見るべし、

八、近古の連歌、後期

如何に烈しき競爭を經て貞門の俳諧が檀林派に壓倒されしかは既に說く處の如し、天下の俳諧は將に維中高政一堂の倨傲眸に移らんとして、新らしき反動は貞門の殿將北村季吟の門下より顯はれたり、松尾桃青が名は季吟が門下として貞門の俳人に味方なるが如く感せしめたると同時に、其中頃檀林の風調を弄びしが爲めに檀林にも友人視されたり、且つ彼が一方には檀林派の爲めに全然破却されんとしたる御傘の方式の一部分を保護し、他方には檀林の主張せる自由眸をも拒絕せず、能く兩者の長所を容れて、更に一頭地を其上に擢でしことも、兩派の俳人に等しく歡迎されし所以の一なるべし、されば彼の蕉廬振はざりし貞門は、勿論蕉風に向つて反抗せんとはせず、其全盛の頂に達せし檀林も必しもこれと爭はんとはせず、箇人としても、三派の俳人相互交友し、和樂し、絕えて猜疑反目するが如きことなかりしが如し、彼の貞享四年(蕉風開基と稱する冬の日撰集後四年目なり)の四季の句合の如きは、又此間の消息を窺ふに足る、句合の撰者は貞門の不卜(貞德の高弟未得

が門)檀林の才丸(西鶴の高弟)及び其角にして、其評者は貞門の素堂(季吟門)調和(安靜門)湖春(季吟の男)及び桃青なるを見れば、彼等の眼中既に門派の偏執なかりしを見るべし、(ことさらに他門の評を集めたる書あるは勿論なれどとはさる種類のものに非ず)、かくて素堂の如きは芭蕉が親友として終には蕉風の一名家と稱せらるゝに至り、檀林時代には寧ろ俳友たりし其角は蕉門隨一の高弟となり、貞門も檀林も漸次芭蕉が卓絕したる格調に同化されて、才丸の俳諧も終に蕉風を帶ぶるに至り(檀林の條參照)、季吟が文臺も芭蕉を經て去來に傳はりぬ、「良きものは最後の勝利者なり」、師傳は其系を異にするも、門派は其名を異にするも、俳道の總ての實權は蕉風に統べられぬ、翁と云ふ名は芭蕉が獨占に歸しぬ、蓋しこれ元祿の中葉に於る連歌界の大勢なり、

檀林と貞門との外に伊丹派あり、有名なる鬼貫は此派の代表者として元祿時代の一勢力なりき、志かも彼は到底芭蕉の敵には非ざるなり、世に傳ふ鬼貫幻住庵に芭蕉を訪ふて兩吟の俳諧半に至り、二の裏移りに三句まで芭蕉に非難せられ、坐に有りし芭蕉の門下に讓りぬ、丈艸の之れを附たるが彼の有名なる

うす〳〵と色を見せたる村紅葉　芭蕉

御膳がよいと松風のふく　丈艸

の一聯にして、鬼貫は初めて無心所着の附けを知りたりとて感じたりと、(野坡物賀他理等)其眞僞未だ知るべからずと雖も、彼は芭蕉に抗せんとするよりは寧ろこれを先輩視したるは蓋し疑ふべからざる事實にして、蕉翁が行脚にあふて「歩くものと知れば尊とし神送」の吟ありし如きは、又一證となすに足らんか、彼は貞門に一異彩を爲せりし松江重頼が門人にして、其格調も貞門談林に似るよりは寧ろ蕉風に近かし、

之を要するに或る者には古今獨歩と稱せられ、他の者には古來未曾有と稱せらるゝ、芭蕉翁桃青は、冬の日より猿蓑に、猿蓑より炭俵に、常に俳諧流行の先をなしつゝ常に正風不易の敎を垂れつゝ、元祿七年十月十二日、永遠への眠に入りぬ、我が近古の後期は彼が死を以て初まらんとす、

俳風の統一は蕉風の力に非ずして芭蕉の力なりき、芭蕉死して蕉風存せざるに非ずと雖も、芭蕉死して芭蕉再び生れ難し、俳諧の統一は彼の死と共に破れんとす、彼が死は歴山王のそれの如し、義仲寺に於る追悼の俳諧は既に分裂割據の緒をなしぬ、去來其角に快からず、許六去來に伏せず、而して支考は別に一家の見を立てゝ傍若無人なり、曰く江戸坐曰く雪門、曰く美濃派曰く伊勢派、唯其門派の遠く後世に及びし者のみを數ふるも、吾人は蕉風の四門派を擧げ得べし、卓郎が一覽集に序して、「沒後、直傳の高足すら、おのがじし百家九流に分れ行」と云ひし者は、これの謂なり、

そも〳〵彼の百家九流、必ずしも百種九樣の特色あるに非ず、蕉門の四門派が其根本に於ては、等しく蕉風たることは勿論なるのみならず、採茶庵と云ひ、落柿舍と云ひ、加賀派と云ひ、伊賀連と云ふのみならず、或は今日庵の傳統を稱し、沾德の血脉を說く者と雖も、其說く處其作る處を見れば、盡くこれ蕉風の一端を覗ひ得たる者たるに過ぎず、例は季吟家二十五ケ條と稱する俳書宇多法師も、芭蕉を稱するに翁を以てし其句を以て「人力に及ぶ所に非ず」となすのみならず、其說く所は總て蕉風にして其例證は芭蕉の句のみ、或は白羽(宗因の孫弟沾德の流派)の追悼の爲に成りし俳諧一萬八千日の如き「師沒して半百年一派の强力躰今に髣髴たること蟬蛻の如し」などゝ序すれど其俳諧は唯蕉風の拙なる者に外ならず、はては明治のお江戸通

幸堂得知をして、其角の江戸坐と梅翁の檀林とをさへ混同せしむるに至りぬ、蓋し實なき者は名を爭はざるべからず、天才死して人、門派の名を爭ひし者思ふに蕉門分裂の一原因にして、百家九流多くは空しき名の上に立てる者に外ならず、

獅子門支考が一派の俳人に異端視されし者は、主として、十論、古今抄等の俳論の故にして、其俳諧の故にはあらず、許六と去來が俳諧問答の長々しき議論も、主として不易流行の意義を爭ふ者に外ならず、彼等も亦俳諧の實を爭はずして其名を爭ふ者のみ、其角は流石に蕉門隨一の高弟なりき彼は嵩々たる者の上に一頭地を擢けり、去來が彼に與へて其變調を詰りたる不易流行の論を取つて、無造作にも自家の選集若葉集の卷頭に載せて、敢て答へんともせず、彼が焦尾吟の如き類柑集の如き、專ら俳諧の趣味を說て其虛しき名を說かず、蓼摺小木に「考(支考)が議論多きは其角が絕章多きに若かず、……翁(芭蕉)に議論なし、議論ありと云ふは即ち翁を賣るなり」と云ふ者蓋し至言なり、然れども支考が才と筆とは能く翁を賣るの力ありき、議論なき其角が江戸を風靡して江戸坐を創むると同時に、彼は上方に割據して獅子門を起こしぬ、美濃派とは即ちこれなり、其勢力この二者に次く者を江戸に於る嵐雪の雪門、上方に於る凉菟が伊勢派となす、(江戸坐と雪門とを合せて江戸風と云ひ、獅子門と伊勢派とを合せて上方風と云ふ)卓郎は前二派の消長を說て、

汲後(芭蕉汲後)直傳の高足すら、おのが十〻百家九流に分れもて行中に、晋子其角の豪邁なる獨り天下の俳諧を摧斷して、大きに洒落の風を起せしも、其末誹字の低に流れ入て、明人も云ふ者もともに其落處を知らざるに至る、中頃芭蕉風と云ふ者世に唱ふると雖も、多くは支考が手筋にして、風格下れて偏に野夫村童の雜談に異ならず、是を祖翁の風調に比ぶれば、氷と水晶の似て其物に非さる事、莠の苗を見るが如し、其後曉臺、爾更、蕪村、青藍、初其、麓太、白雄、樗て士耶、道彦、成美、乙二などの世に指ゐられし人傑出て、漸く調正風に復古してより云々、

と云ひぬ、其江戸坐と獅子門との流行を以て相前後せる者の如く說けるは予の首肯する能はざる處なれど、其末派の餘弊に至つては說き得て盡せりと云ふべし、蓋し支考も其角も將又嵐雪も凉菟も、蕉風俳人として根本的には同一の格調を備へたりとするも、箇人としては其嗜好を異にすること勿論なれば、これ等の人々に依つて創められし門派が、各々其箇人的臭味を帶ぶると、宛も芭蕉の蕉門が禪宗的臭味を帶ぶるが、如きに至るべきは數の常なり、而して彼の普遍なる根本主義は其普遍なるが爲に、以て自守他排の口實と成すに足らざるを見て、かの微かなる差異

點即ち箇人的臭味を以て特色となし長所と稱し、黨同伐異の久しきを經て、はては其根本主義を失て專ら其長所と稱する所に精進したるの結果として、江戸坐は謎字に流れ、獅子門は俗談に陷りぬ、孔聖豈宋襄の腴を欲えんや、老哲豈神僊方藥を說かんや、只本源一差、末流甚焉しきもの有りと云ふべきのみ、さらば予をして少しく溯つてかの四門派が其本源に於る一差を討究せしめよ、

其角嵐雪は蕉門の二俊傑として常に並び稱せらる者にして、「草庵に桃櫻あり門人に其角嵐雪あり」とは、祖翁が未來記(翁と其嵐との三吟の哥仙)のはしがきなり、然れども五井老は其同門評判に嵐雪を評して

嵐雪器隨分惡し、本性柔弱にして花あるに似たれども實は少なし、相應にとりはやす樣なれども全脉とりしめたる血脉なし、……柔弱にいて弱く、弱きによつて美しきやうなり、上に丹青なぬりて色どりたれば、世俗の眼には眞の錦の如し、　(俳諧問答)

と云ひ、其角を評しては

晉子其角が器極めてよし、人のとりはやするも、生得活潑(くわつぱつ)を表に上手をあらわせし故に諸人の耳目を驚かす、不易流行ともに得たり百年先の事を慮り行き過ぎたる句有、中以下の俳はこれをとらず、愚なる人の耳遠きが故なり、……殘句と俳旨を論するときは、遠かに發句を得たり、

と云ふ、其嵐雪に於る稍酷に過ぐと雖も、彼が玄峯集と角が五元集とを對比する者は尠くとも彼が纖弱にして氣骨なき、此の雄大なる者洒落なる者に比して頗る特色あるとを認め得べし、是特に發句のみならず其俳諧に於ても雪が纖巧は終に角が疎大に若かざるは未來記を見る者の首肯する處ならん、されば如何にや有らん、彼が雪門は江戸坐一派が盛なる氣燄に壓せられて、彼が格調は漸く湮滅しぬ、第一の高弟周竹(嵐雪の傳書を受けたりと稱せらるゝ者)も吏登(周竹よりかの傳書を受けたりと稱す、二世雲中庵是也)も大なる成功あるを見ず、三世雲中庵變太頗る聲譽ありと雖、かれが俳論は變摺小木の著者の言ふが如く、必竟支考が俳論を敷衍したる者たるに過ぎず、而して其格調當時の江戸坐と大なる徑庭あるを見ず、名は雪中庵と稱するも實は嵐雪の誠實なる祖述者には非ず、巴人の後蕪村几董出るあるも、彼等は寧ろ其角の流派に屬するものと云ふべし、要するに江戸の俳壇は殆んど盡く其角が格調に倣ふて、所謂「行き過ぎたる」「耳遠き」調子に流れ行きしなり、これを罵る者は「謎字の低」きに就けりとなし、これを贊する者は蕉風の困難なる側面を得たる者

となす(蓼摺小木に曰「翁の道は萬化無窮而不可言説、得難き方を取りたる都風と成、得やすき方を取たる鄙風となる、人情憚難趨易古今通患、云々)、蓋し一は「行き過きたる」側面を罵り、一は「愚なる人の耳遠き」側面に贊するなり、これを江戸俳風の大躰となす、

江戸に於る雪門が江戸坐に同化されしが如く、上方に於る伊勢派は美濃派に同化されぬ、蓋し蕉門に於る凉菟は唯所謂三十六俳の一と稱せらるゝのみ、固より其角嵐雪支考等の俊傑と比肩すべくも非ず、此人に因つて創められたる伊勢派が、更に芭蕉晩年の末弟にして沒後支考に從ひたる乙由に因て繼承されたりとすれば、其格調の支考が美濃派に同化さるべきは勢の必至のみ、されば其嵐の流に對して、此二派を合せて上方風と云ひ、伊勢美濃の風と云ひ、或は單に美濃風と稱すると多し、」支考が奇怪なる俳文難澁なる俳論は、今日より見れは左迄の名文名論と云ふに足らざる勿論なれども、當時の俳人には絶て彼に匹敵する者なかりしが如く、許六の徒も「趣意が通らずかたはしいやみをかけり」などゝ云ひつゝも、尙「文章をかゝせても聞事なり」と許さゝるを得ざりき、されば其文章は風俗文選の白眉と稱せられ、其俳論は異端視したりし其嵐の門派にも、終には採用せられて、執中の法、七名八體等は、殆んど蕉風の公論と認めらるゝに至りぬ、

(因に云ふ、執中の法、七名八体に就ては古來種々の議論あれどくだ〳〵しければ省く、されど要するにそは芭蕉の教にあらずして支考が創意なり、專ら初學の爲めに俳諧の性質を知らしむるを目的としたる者なれば、勿論所謂第二義に落ちて蕉風俳諧の極致にはあられど、就中執中の法の知きは俳諧と云ふ者の構造を解釋するには最も簡易なる方法なれば、少しくこれを附記して、俳に通せざる讀者に示さん、

執中の法とは前句の中を取つて句作すると云ふ義にして、換言すれば前句の意義を如何なる人なるか、如何なる時なるか、如何なる場所なるか等を見定め、既に見定めたる上は全く前句を抛棄して、其見定め得たる人、時、場所等を基に句作することを云ふなり、今蓼太が俳諧小鑑に其一例を取らば

糊強き袴に秋を打うらみ

と云ふ前句あらば、その樣は必ず老翁(人)の上なるべしと見定めて

髮の白髮を今朝見つけたり

と云ふ附句を作るを得べく、

手紙を持て人の名を問ふ

と云ふ前句は振舞の席(場所)なりと見定めて

木膳が出れば皆々かしこまり

と宴席の句を附くるを得べし、

此秋も門の板橋崩れけり
　敕免にもれて獨見る月

とは門の板橋崩れたるを、左遷せられたる人の佗住居と見たる者にして、

鳴子驚く片藪の窓
　盜人につれそふ妹が身を泣て

とは、鳴子にも驚く者を、盜人の妻と見定めたる手際なり、かく説明するか執中の法の説き方なり、）

支考が俳諧も其嵐に比して遜色ある者にはあらず、許六亦「花實兼備へたり、しかも取はやし得物なり」と云ひぬ、されど又「難して言はゝ實薄く今めかしき事折々見ゆ、故に言外に意味ある句尠し」とは彼が贊辭に接する批言なり、此實薄く餘韻に乏しき事は美濃派の通弊にして、其末派に至つては彼の難解を以て高しとなせる江戸風と全く正反對の極端に走りて、終に「野夫村童の雜談」とさへ罵らるゝに至りぬ、而して其淵源する處は實に支考が此短所に存すと云ふべし、されば此派を辯護する者は專ら其輕妙の長所を稱揚す、所謂「美濃派のかゝるみ」とは即ちこれなり、これを上方俳風の大要となす、

江戸と上方と然く相對峙する間は、江戸坐の淡々出でゝ京華を蹂躙せるあり、獅子門の盧元坊一派の遠く江戸を風靡せるあり、江戸派に於る湖十、貞佐、上方派に於る玄武、吾竹、希因等を初として天下無數の宗匠各門派の見を持して相競ひ相爭ひ、芭蕉出でず、其嵐出でず、十傑の一人だに出ざる者前後六十餘年、俳諧の流行は元祿をも、淺がんとすれども、其實質に至つては滔々唯これ點取俳諧のみ、

近古の後期は斯の如くにして初まりぬ、終にさながら終るべきか、曰く否、次で來るべき安永天明あり、更に轉ずべき文政天保あり、以上は唯劈頭の一短期のみ、

所謂江戸風の「謎字」とは、例せば淡々の吟「澤蟹は蟲くに蜘蛛の冬ごもり」「眞桑瓜されば思へば年一夜」（俳家畔人傳には上の句は抽ひぢての古歌を取て老衰にかけて云ひ、下の句は二月中旬に瓜を獻ずと云へる古事をふまへて冬と春とのわいだめをいへる、何れも意を盡したる吟詠なり、）と云へれど、常識を以て然く推測し得べからざることと勿論にして、これ所謂謎字なり）等の如き者にして彼の壇林の末輩の句に髣髴たりとも云はんか、所謂上方風の「野夫村童の雜談」とは、例せば「傘の數程噂ふいて憎く、一羽でも泊り烏はやかましい」「餅て下つた痞おかしい、裁物の支度に七つ道

具ほど」(甲斐家集、寶暦の刊本)などの類にして、漫りに「俗談平話」を弄して、全く何等の趣味をも有せざる處、稍貞門の末派に似たり、

此の佶倜の風、この卑俗の流を排して、安永天明の刷新は來りぬ、人は云ふそは蕉風の復古なりと、獨り思へらく然らず、そは單なる復古には非ずして、新俳風の勃興なり、

元祿の蕉風は古今集の如く、安永天明の俳風は新古今に似たり、彼は婉美渾厚の姿に富み、これは纖巧機警に於て優る、彼に含蓄の妙あり、これに聲調の美あり、時に平淡無味の句あるは前者の蔽ふべからざる欠點にして、儘々露骨淺薄の句あるは後者の餘弊なり、更に二句間の連接即ち附け味に就てこれを觀るも、前者は餘韻の心琴を撼動すること深きを重んじて、專ら其所謂「にほひ」「ひゞき」を企て時々「走り」と「拍子」を交ふるのみ、後者は聲調の耳に快く目に美しきを尊んで、多く「拍子」「走り」を弄し、所謂「ひゞき」「にほひ」ある句は大に其數を減じぬ、是予が單なる復古に非ずとなす所以なり、安永天明の俳人は多く自ら蕉風と稱しぬ、其祖翁と稱するは桃青にして其龜鑑となせしは彼が七部集に外ならざりき、歴史は回顧しつゝ進捗す、彼等は確かに回顧したり、然れども彼等は又確かに進捗しぬ、彼等が元祿復古の聲は必竟新趣味鼓吹の聲に外ならざりし也、見ずや王政復古の結果は新日本の開拓なりき、新古今の撰集も、古今復古の聲の下に成りぬ、

云ふを休めよ蕉翁逝て又俳諧なしと、貫之去つて又婉美渾厚の姿なきは事實也、然れども新古今が獨得の妙致に至つては、古今時代の作者が夢想だもせざりし所在つて存するに非ずや、所謂「ほそみ」と「さびしをり」と「にほひ」と「ひゞき」とは元祿の蕉風が獨り其美を恣にする所なるは事實也、安永天明の間又蕉翁が閑寂温雅の美に次ぐ者なかりしは事實也、然れども蕪村几董が新清飄逸の姿、曉台蘭更が洗煉綺麗の致に致つては、元祿の蕉風に於て殆んど見る可からざる者なりとすれば、俳諧の致何ぞ獨り元祿にのみ歸すべけんや、且つや元祿の蕉風が放縱疎野なる檀林調の反動として、一に芭蕉が閑寂主義の偏重に倣ひ、絶へて其の繩墨の外に脱出することを思ひ、此の新俳風が蕉風の高調に精進しつゝ、能く檀林の豪放横溢の佳處を容れて、二者の間に圓滿なる調和を成せんとせしが如き傾向を思はば、亦以て多しとするに足る者あらんか、

刷新世界の曉星として顯はれたる者を蕪村及び曉台となす、前者は江戸風の俳人巴人の門に出でて出藍の妙あり、後者は名もなき上方の俳人に學びて別に一家を成しぬ、彼等は刷新の主動者にして、又天明の泰斗なり、世人天明の三傑を稱するや常に曉台、白雄、蘭更を擧げて蕪村を後にする者は、蓋し彼が傳耳遠き漢語をも交えし一種清奇の格調は、後世の俗俳人の歎ふ處とならざると、能く自家の格調を維持すべき子弟を得る能はざりしとに因す、彼が俳諧は決して曉台以下の者に非ざるなり、蕪村の門に几董あり、曉台の門に士朗あり、其他麥太、青蘿、道彦、成美、の徒時を同うして輩出し、其師傳繼承の間幾多特異の點なき能はずと雖も、要するに皆還般刷新の氣運に養成せられて、元祿以來の一盛期を作りぬ、今予が斷定を畧せんが爲に、此に蕪村が「一夜四吟」、曉台が「夜のはしら」の一節を示さんか、

「一夜四吟」の一節

白菊に露置き得たり置得たり　嵐山
のこりそめぬる今朝の月かげ　几董
借馬に秋か涼しくまたがりて　樗良
遠酒ありと婿の申しけり　蕪村

小暗きと明きと燭の二所　董山
手これの香爐うちすりつゝ　村瓦
かくて世に四位となるべき身なりしか　村山
野上の君が色にしづみぬ　瓦董
中垣の障子に堀の二つ三つ　村瓦
春の風吳國の貢渡り來ぬ　董山
鼻へ出たる宿老の智慧　村瓦
人々の沙汰となりぬるわか燈は　山董
小袖うるとも世をうらむまし　瓦村
精進のゆりし佛の忘られず　董瓦
今日や切るべき牡丹二もと　白圓
敵陣の和歌の書物を盜み來て　曉台
星の光りにあけ近く見ゆ　闌水
「夜のはしら」の一節　羅城
（ニテ五句目）
袈裟掛て國上の僧を墜しけり
覺なき血の手を拭て見る
雉子の聲野中の蕨葉になりて
をとゝひ賣し牛に行逢ふ

何とやら物の云ひたき人の後ト　　蕉分
名もはゞかりのなかご染紙　　閑毛
竹川の月よりあけて露の松　　珉丈
竿で並べる屋根の稲束　　士朗
名の秋な海士とよまるゝ折もあり　　曉台
さても色なき風の浮雲　　白圃

其聲調の美しきと其三句の移りの斬新機警なるとを以てせは、そは決して芭蕉が七部集以下のものに非ず、然れども其終に元祿を凌駕することを以て許す能はざる所以のものは、單に蘊蓄と幽趣とに乏しきのみならず、更に俳諧の本質に於て彼に劣る者あつて存すればなり、劣る者とは何ぞや、曰く首尾の變化に乏しきことこれなり、一卷の終始が頗る單調なることこれなり、這般の斷案に對しては一卷の全躰を示すことは勿論許多の實例を以てするに非ざれば充分なる説明をなす能はずと雖も、今假りに前に掲げたる一二の例を以て此時期を代表し得る者となさば、其の二句の附け方、三句の移りに巧なるを見ると同時に、其表六句と二の裏とさへ殆んど同し調子にして、名殘の表と裏との如きは全然區別すること能はず、而して

醜て支考等が曲節地の辨、あるは猿簑炭俵の實例等を見なば、予が言の必しも認ひざるを認めざること能はざるべし、

更に此時代の俳論として有名なる摯太が小艘、白雄が寂栞も亦此の傾向を見るに足る者あり、前者が最も力を盡さしと見ゆるは執中の法にして、即ち二句間連接の法なり、後者が精細を極めたる人情と自他の辨も亦三句の外に出でず、折と面とは唯懐紙の名たるに止まつて、徒らに二句三句の間に巧緻を競ひし者、蓋し此の時代の通弊なり、

此時代に於る發句の趣味は勿論其俳諧と異なる所なし、其句作の法は元祿の蕉風と大同小異のみ、若し其の特質の主なる者を云はゝ、彼の比較的單調なりし閑寂主義を脱却したるの外、又彼の客觀的自然に專らなりし傾向を離れて、頗る主觀的人事に富めるに在り、大江丸が特に蕪村と摯太を擧げて人情を寫すに妙なりとなせしは稍首肯し難しと雖も、此を以て安永天明の總評となさば蓋し當を得るに近からんか、今其人事に關する句一二を擧げんか、

梅がゝや思ふことなき朝ほらけ　　蘭更

春の日や終人となる土細工　仝
さしぬきな足てぬぐ夜や朧月　蕪村
頁けまゝき相撲な寐物語りかな　仝
雑炊に月の明りの菜花かな　青蘿
眼な開けは蛙なりけり虫の聲　蕉太

これ等其最も巧なる者の一なり、「朝貌は下手のかくさへ哀なり」とするも、拙き人物畫は由來見るに堪えざらん、人事に巧なりし作者が、人事流行の氣運を作りしより、白雄等が俳諧は人情を寫すに在りと稱導するあり、天下靡然としてこれに化して發句となく俳諧となく、盡く拙き人物畫を以て滿たされたる者、これ即ち天保以後の俗俳なり、

曉台死し蕪村逝き、所謂復興の名士相次て去れりと雖も、尚乙二あり岳輅あり完來、葛三、璧守、卓池の徒あり、嘗く天明の高調を維持せりし者を享和文化の俳風となす、然れども其調日に漸く卑く、其巧日に漸く衰へて、終に蒼虬梅室の俗俳をして其名を恣にせしむるに至らんとする傾向は蔽ふ可からざる事實にして、讀者試みに當時の俳諧を時代に從つて列擧したる「蕉門中興俳諧一覽集」を繙かば、時を逐ふて漸

く卑く漸く拙きこと、譬は丶西に春くの月光、漸く暗く漸く微かなるが如き思あるを見ん、而して此の衰頽の氣運の裡に獨り特異の光彩を放つものを一茶の俳諧となす、

一茶坊は成美の門人なりき、然れども彼が天賦の奇才は到底師傳の羈束に堪えざりき、彼は破門を甘受して彼自身の俳諧を始めぬ、其滑稽詼諧の調專ら俗談平話を弄して、而かも卑俗に陷らざるは三百年の俳諧史中獨り其の美を專らにする所なり、

蕎麥切の寐さめの里に年よりて　一茶
丸くなくさも八月の月　一瓢
召玉へ蜩聲きりぐす　茶
さびれさましに河岸へふと出る　瓢
肥後米の買ひそこなへを笑はれて　茶
……瓢
……茶
……瓢
ひとりでに馴れは旅はあるかゝる
あらこと〳〵しつもこりの雪
膳棚は鼠のものかとはかりに